

# 地名研究会報

第 6 5 号

鹿児島地名研究会

平成 1 1 年 1 2 月 5 日

I. 第 6 5 回例会 平成 1 1 年 6 月 1 3 日 (日) 於教職員互助組合会館和室

(出会者) 青柳俊二・上野堯史・小川秀直・小山田 稔・大田照夫・納 栄蔵・

川野雄一・木場武則・永井啓介・永坂芳彦・永田典男・西田春人・

平田信芳・福元忠良・松山 健・村山謙一 (計 1 6 名)

II. 大日本地名辞書読会 P. 1742~P. 1745

〔問題となった地名および事項〕 下福良と中福良・ヤマゲ・上町の範囲

下福良・中福良 木場 川内にもありますよ。中福良が。

平田 今日読んだところは日向国の北の 平田 川内の中福良ですね。

方で、われわれにとっては歴史的にあまり 木場 この福良には薩摩殿の墓というのが  
関心のない所ですが、この辺まで島津氏の あります。

影響が及んだことは事実のようです。読ん 平田 あゝ、行っちゃったわけですね。

での通り西南の役古戦場で、薩軍の苦戦 木場 えゝ。薩摩殿というのは身元が判らん  
の状況がよく示されています。当時の新聞 のです。薩摩殿の墓と書いてあります。

の記事にもとづいたのでしょう。私はまだ 平田 この地方は島津の 4 代忠宗が地頭に  
薩軍の跡を訪ねたことはないのですが大変 なっています。代官が行っているわけですから  
な山の中のようなようです。何か疑問の点はあり 薩摩殿の墓というのは当然あり得ます。

ませんか。 木場 誰じゃろかい、と。

納 1745 ページの真ん中の段、椎葉の 平田 それは、ちょっと。記録にないでしょ  
ところ、4 行目の中間頃に大字下福良と うね。

ありますね。鹿児島県には中福良という所 木場 記録にはないわけですけど。

が沢山ありますね。今の天文館、あそこも 納 下福良が出ていますが、上・中・下と  
昔は中福良という所だった。 かに分かれているのでしょうかね。

平田 そうです。 木場 そうです。

納 中福良というのは地形から来たの 平田 上・下などもあると思いますよ。

じゃないかと思うのですが、どういう地形 山陰 (やまげ)

の所なんですか。 納 もう一つ。1743 ページ、下の段。山陰  
平田 ふくらんでいる所。鹿児島の中福 と書いて「ヤマゲ」と読ましていますね。鹿屋に  
良というのは真ん中がふくらんでるという は「ヤマゲ」という名字と地名があるのです。

ことです。福良でも中福良でも地形的には 平田 あゝ、そうですか。

同じなんです。中福良・下福良があれば、 納 鹿屋の場合は「山華」と書くのです。

上福良という地名もあるはずですよ。 平田 それは文字を当てたのでしょうかね。

納 それから鹿屋と吾平との境の所は「山下」と書いて、これを「ヤマゲ」と読ましています。

平田 ほう。

納 それから小林だったか、これは電話帳で見たのですが「山毛」と書いてヤマゲと読ましています。この「山陰」からすると、元々「山下」が変化してヤマゲになったんじゃないかと思うのです。

山華、山毛なども・・・

平田 昔の右筆たちが勝手に書いたものもあるでしょうね。

納 文字の音が合えば何でもかんでもはめ込んでいますからね、昔は。

平田 山下(ヤマタ)という所は中部地方ではサンゲと読んだりします。中世では集落立地として一番良い場所の呼び名だったようです。山陰(ヤマカ)だったら日が当たらないわけだから、人の住む場所じゃないでしょう。山下から変化した人々が住む場所としては良い所：そういう所から出た地名と考えたらいいのじゃないですかね。実際に行ったことのない所の地名を考えるのは難しい話ですが。

#### 上町の範囲

納 もう一つ、鹿児島市内のことで。

お宅の辺は清水町ですか？

平田 はい。

納 あの辺でも鹿児島の人は「上町」と言いますね。上町というと元々どこ辺をいうのですか。

平田 それは『鹿児島県地誌』の中に詳しく書いてあります。あれには清水町は上町に入っていない。普通は鶴丸城の堀から北の方を上町と言ったりします。

納 最初は、清水町・春日町・稲荷町など山手の方を上町と思っただけなのですが、『鹿児島市史』だったかな、その付録に明治30年頃に吉田書店が発行した地図があったのです。それを見ると、大体小川町から北の方ですね。

平田 沿川ですか。

納 上の方：北の方は「上方」と書いてあったのです。

小山田 上方限だな。

納 なんと読むのですか。

平田 上方限(かみかぎり)？

納 易居町からこっち、南の方を「下方」と書いてある。「上方」の中に柳町・車町・恵美須町・栄町・和泉屋町・向江町・浜町、もう一つ何かあったけど。(小川町が入る)。8か町が上町だと書いてある。一般的には山手の方も上町というが。

村山 私はそこで育ったのですが、小川町・車町を境にして春日町が大体上町の武家屋敷の入り口だったのじゃないでしょうか。それで、柳町～車町の一带が正式に言えば上町の範囲になるのじゃないでしょうか。私たちの小さい頃あの辺は商店が多かったのです。

納 私はこう解釈してるのです。昔の電車道路：今の国道筋ですか。

平田 国道10号線。

納 国道を境にして海岸側：海側が上町、北の方は稲荷川が境界になつたらせんかなあと思うのです。どうもびんと来んものですから。

平田 時代によってそのとらえ方が広がったり小さくなったりするのじゃないですか。

納 私はこう解釈するのです。商店街があつたりする所が「町」である。その以前が「野町」というもの。定期的に「市」が立つ場所。野町があつた所が「町」であって、その他

は町じゃなかとじゃなかるかいと考えたりするので。

平田 そういう分け方では鹿児島の場合には浦町でしょうね。横井が野町。

納 横井町(ヨクマチ)がな。それと西田、西田橋から上へあがって行く所。筋違橋(スバシ)との間あたりを上・中・下に分けてあるのです。そして「西田町」と書いてある。他の所は「町」に入っていないのですね。

小山田 西田村でしょう。

平田 「鹿児島市西田村」と呼んだ時代もあるようです。今の常識からいうと市：cityが付けば「村」はない。「西田町」の間違いではないかと聞かれますが、鹿児島市西田村と書いてありますから、そういう時期があつたのです。今おっしゃったように西田橋を越えて水上坂(みっかんざか)につながる両側に町屋があつて、それを西田町と呼んだのでしょね。

納 私が憶えているのは、西田町の場合、両脇に言うなれば商店街があつて、裏の方は田圃。「西田の田圃」と言っていた所です。

平田 他にありませんか。後半は上野さんが西南の役の話をしませう。今日読んだところも薩軍が長井から可愛嶽を突破する経過を述べた部分です。休憩して後半に時間をとりませう。

〈付記〉『鹿児島県地誌』は小川町・和泉屋町・恵美須町・車町・栄町・柳町・浜町・向江町の8か町を「上町」とする。一方山下町・易居町・生産町・六日町・築町・汐見町・泉町・金生町・中町・呉服町・大黒町・堀江町・住吉町・船津町・新町・松

原通町の16か所を「下町」とする。

これらの他、新照院通町・薬師馬場町・鷹師馬場町・西田町・平ノ馬場町・西千石町・東千石町・加治屋町・山口馬場町・新屋敷通町・下荒田町・高麗町・上ノ園通町。冷水通町・長田町・下龍尾町・上龍尾町・池ノ上町・鼓川町・稲荷馬場町・清水馬場町・春日小路町が、江戸時代の鹿児島城下であり、その周辺の坂元村・西田村・武村・荒田村・中村・郡元村などは、いわゆる「近在」であつた。

鶴丸城の本丸・二之丸を分ける東西の線で、上・下を分けるのは上方限・下方限の区別であつたと理解してよい。それが上町・下町の区別と混同してしまつたとみれば納得出来るのではないだろうか。

# 薩軍北上路を歩く

上野堯史

(前半部はラジカセの操作ミスで録音なく  
記憶により概要を記す)

## 加治木隊の戦死率

西南戦争における薩軍将兵の戦闘ぶりについては、各郷土史の中でも『加治木郷土誌』が最も詳しく、戦死地・戦死月日などが一人一人について記録されています。レジュメの9ページ・10ページに加治木隊がいつ・どこで戦い、何名戦死者を出したかの一覧表を提示しました。戦死率17.6%というのは非常に高い比率で、アメリカ軍の感覚では10%の戦死者が出ると敗北と評価するそうです。負傷者を加算すると50%はやられたことになり、戦える状況ではなくなるということです。

## 薩軍本営の進路

明治10年2月15日～17日、薩軍一番・三番・五番大隊は西目街道すなわち出水筋を北上して熊本に向かいます。別働一番大隊・別働二番大隊、これは後に六番大隊(加治木郷土)・七番大隊(国分郷土)と呼ばれます。これと二番大隊・四番大隊は大口筋を通過して山野から久木野・佐敷を経て熊本に向かいます。西郷を中心とする薩軍本営と一番砲隊・二番砲隊は山野から久木野への道が雪で通れぬとの知らせで加久藤峠を越える道に変更したといわれます。

西郷を護衛した薩軍本営の道を進るのが北上路を探る場合のねらいになると考えました。薩軍側の記録は乏しく、最近知られるようになった久米清太郎の日記が西郷本営に近い所を移動しているの、それに

拠ることになりました。昨日、本屋で風間三郎『西南戦争従軍記』というのを見かけました。風間三郎は樟南高校の久米雅章という先生のペンネームで、久米清太郎の一族になるようです。私自身も曾祖父が歩んだ道を追体験してみようと歩くことを考えついたのですが、西南之役の経過を詳しく調べれば調べるほど薩軍は政府側の挑発に乗ってはめられた戦争だったという感じを強く受けます。

## 一日目～三日目の行程

一日目：私学校から加治木まで。24.57km、7時間04分。

二日目：加治木から横川まで。23.6km、6時間14分。現在「竜門司坂」と呼んでいるものは久米清太郎日記には「大門寺坂」と書いてあります。

三日目：横川から京町まで。21.5km、5時間21分。(以下、録音あり)

〔吉田〕

久米一行の宿泊地は吉田町となっておりますから吉田温泉だと思います。吉田温泉は京町温泉と川内川を挟んで対比する位置になります。私は一応京町温泉に行きました。というのは、吉田温泉と京町温泉の間が大体4kmぐらいあるのです。汽車に乗って引き返さなければならぬので、便利を考えて私の場合は京町を終点と考えました。

次の4日目ですね。えびのから出るのは2月20日でした。えびのを出て人吉に向かう行程です。命がけの感じでした。県内は土地勘もあつてある程度判るのですが、一歩宮崎県とか熊本県に入ると、もうほとんど判らない。熊本大学

を出ていますが、熊本市内だけの話です。土地勘がなくて行動するのは大変なことです。国道を通ると加久藤トンネルの中を通らなければいけないので、これは止めようと思って、えびのの場合も事前に何回か車で調査したのですが、やっぱりよく判りませんでした。吉松の役場は24時間車が置けるとわかったもんですから、いざという時は都合がよいと思って吉松町役場に車を置き、タクシーでえびのまで行き、えびのから歩き始めました。餓肥街道、いわゆる加久藤トンネルの道になかなか出ないのです。少し手前から曲がって行くと三角形の斜辺を突っ切る形になり短くなるもんですから、そこを歩きました。地図を見て山道に気付きました。この山道はトンネルの向こう側に出るのじゃないかと考えて、山道を辿ることになりました。昔の衆は山道を歩いたみたいなんだから、これでよくはなかるかいと急遽変更して山道を歩きました。ところが加久藤トンネルの手前の所でトンネルの出口が見えているのですが、道が消えて先に行けなくなり、あきらめて引き返しました。これで、ぐたーとだれました。止むを得ず加久藤トンネルの中を恐怖にふるえながら歩きました。

トンネルを出てすぐ下に降りて行けば、旧道なんです。元々の道路。それを知らなかったもんですから、大変な目に遭いました。開運橋。皆さんご承知のぐるぐる回るループ橋がありますが、あれが一番最後が開運橋だと思います。そのすぐ下に歩行用の道があるのです。下の方の道を通れば安全でよかったなど、その時初めて気付きました。知らない所を歩くのはやっぱり大変

です。

あとはずーっと歩いて行くのですが、喉が乾いても人家も何もないのです。ただ車が通っているだけです。歩道もない所もあり、歩道にありつけたのが表にある通りです。だいが経ってからです。最初に人家あり、これは3時36分。私は10時に歩き始めて12時40分に餓肥街道に合流していますから、12時40分から3時36分までは全く人家がなかったということです。

馬の油を売る店があります。ご存じの方があられるかも知れませんが、此処で犬が一匹私を見つけまして1kmぐらい私を付けて来るのです(笑い)。西郷さんも犬を連れておいやったというので連れて歩こうかいと思ったのですが、そういうわけにもいきませんので途中で追い返しました。

西郷さんの一行かあるいは久米一行か、記事には書いてあるのですが、大畑(おこば)で休憩しているのです。

小山田 大畑(おこば) だよ。

上野 あゝ「おこば」ですね。済みません。オコバ。今も間違いましたが、何度聞いても間違いそうな地名です。この大畑で休んだということです。西郷一行は吉田から矢岳を越えたという説もありますから、そのルートかなとも思っています。全員一斉にそのルートを越えたのではなく、一部は私が行った餓肥街道を歩いたのも居ったかなあと思うのです。

西郷一行が栗野から大口越えでなくてこっちで行ったのは、久米日記によると雪が深いということです。だけど、私は他に理由があったのではないかと思います。大口を越えて行きますと水俣に出ますが、水俣の海岸線は歩きたくなかったのじゃないかな、と。つまり、政府軍の動きが気になっていた。海からの襲撃もあり得

るわけですから。事実、すぐ後に警視庁の  
巡査隊が海から来て入ります。ですから  
何か入れない事情があったのじゃないかと  
思うのですが、久米清太郎は雪が深いため  
に回ったと書いております。考えてみたら  
加久藤を越える方がよっぽど雪が深いの  
じゃないかな。どんなものですか？大口越  
えの雪と加久藤越えの雪を比べた時こっち  
の方がよっぽど雪が深いのじゃないかなと  
も思います。大口筋は雪が深いとの理由で  
加久藤越えを行ったらしいです。

此处は31.35kmです。雪の中を歩けと言  
われたら、とても歩けません。彼らの歩く  
体力と言いましょか、強靱な体力は銃を  
持ってですからね。私は軽い着替えを持っ  
てですから、これは全然違います。それで  
も私はぐったりとなりました。歩いていて  
辛いのは最初の10kmぐらいです。あとは陶  
酔の境地になります（笑い）。足は痛い  
のですが体がどんどん前に動いて行くとい  
う状態です。本当にそういう気持ちになり  
ます。マラソンの選手が走っているうちに  
そんな気持ちになるという話です。

人吉の城下に入った時は時期的にもう真  
っ暗になりました。私は人吉に宿舎がある  
ことは知らなかったのですよ。勉強不足で  
そこまでは調べなかったのです。麓とい  
えば城の下だろうということで、城前を一  
応終点としました。人吉駅まで歩いて列  
車で吉松に引き返し、吉松から車で帰っ  
て来ると。こういうふうになりました。車  
を使った場合は途中で汗をかいてもビール  
が飲めない、これはちょっと不自由です。

人吉から歩いたのは12月29日でした。  
女房は嫌な顔をするのですけれども、今日

歩かんと後の計画が立たんと言うて強  
行しました。12月29日の早朝、家を出  
まして高速道で人吉まで行きました。い  
わゆる城前の駐車場、これは無断駐車  
が出来ますので、この駐車場に車を置  
いて、多分西郷が歩いたであろう土手  
町という所に向かって歩き始めたら、川  
を渡ってすぐ西郷宿所跡に偶然ぶつかり  
ました。歩き始めて200m。偶然ぶつ  
かりまして、わぁ、此处やったという  
ことで、初めてその時知った次第です。  
大きな看板が立っています。歩けば誰  
でも判ります。これが泊まったという  
元島さんという方の所なのか、そこま  
ではまだ調べておりません。西郷一行  
は土手町に泊まったとあります。真っ  
直ぐその道を通ると土手町です。そこ  
にお寺があります。その寺に突き当た  
って左折して行くと、また国道に出ま  
した。宮崎からえびの・人吉を通って  
八代に行く国道です。国道219号線  
です。この国道を朝6時まだ暗いうち  
から歩き始めました。渡駅というの  
があります。渡駅は渡しがある所。今  
も時期的には営業しているようです。  
渡駅の所から、実は対岸に渡るべき  
だったと思います。JRがあそこから  
渡っているのです。私も同じように渡  
るべきだった。車が通る橋があります  
から。ところがそれを知らないのです。  
その道がずーっと行動出来ることを  
知らないわけです。

地図では判っているけど、ちょっとお  
ぼつかないもんですから、ずーっと  
219号線を行きました。ロード＝パ  
ーク＝ババというのがあります。NHK  
のテレビでも取り上げられた釣宿が  
あります。鮎の釣りを紹介する宿：ロ  
ード＝パーク。それを過ぎると一勝地  
という所に出ます。此处からやっとな  
り対岸に渡りました。一勝地それから  
一勝地阿蘇神社。此处は西郷軍が陣  
を取った、此处で戦ったと言いま  
す。ちょうど、  
6

その向い側の所が官軍が砲台を置いた  
という跡で、これは史蹟としてちゃんと  
立札で説明してあります。向い側の山  
に官軍、その山の下を八代に向かっ  
て右岸を皆さん車でとどろき走ら  
せてくれました。車はいつも結構お  
ります。左岸の方は県道になっていま  
すが、ほとんど車は通りません。私  
が歩いている間に追い越した車は、自  
転車が一台でした。郵便局の人が今  
日はと行ってまた途中で今日はと行  
って返って行きました。その間、車  
とは一台も遭いませんでした。自転  
車と遭っただけです。そのくらい誰  
も通りません。

一勝地を過ぎてしばらくすると、さび  
しいという字ですかね。淋という字  
です。淋（うるう）という地名があ  
ります。そこに柴立姫神社がありま  
す。いろいろな由来が書いてありま  
すが、これは女の方が奉納するの  
か男が奉納するのかわかりませんが、  
多分此处におられる皆さんどなた  
も負けそうな感じの男根がいっぱい  
並べてあります。太か電信柱があ  
つねと、ひょっと見上げたら上の  
方は見事に整形してあるわけです。  
これがもう何十とあります。皆持  
って来ては拝んじょいやつわけす  
よ。大きさも様々でしたが、もう自  
信を失いながらまた歩くことでは  
したが（笑い）。

淋から歩いて行きますと、面白いの  
は電柱に時々テープみたいにペンキ  
で描いてあります。そして昭和〇  
年〇月〇日、水が此处まで来たとい  
う印です。私の頭の2倍ばかりの高  
さにあります。よう見とてすね、さ  
すが考えてますね。JRの線路はそ  
れから下は一つもないのです。よく  
考えて作ったんですね。今までJR  
の線路は

全く被害を受けていない。人家の方  
は洪水の影響を受けたのがあって、  
下の方から上の方へ移っています。

さらに行きますと、球泉洞という  
有名な所があります。そこは兩岸  
を吊り橋でつないであります。鎌  
瀬という所が下り舟の終点なんです。  
此处までが23kmです。西郷一行  
は舟で下りたと書いてありますから、  
多分久米も舟で下りている筈です。  
医者と一緒にですから、お医者さん  
を疲れさせずにはいかんから、多  
分舟で下りているはず。他の一般  
の兵士は歩いたと書いてあります。  
私も兵士同様に歩いたわけでは  
ない。この23.6kmまでを舟で来  
たのか、あるいはもっと下まで舟  
で下ったのか。昔はダムがないわけ  
ですから相当下まで下ったか、あ  
るいは全部舟で行ったか。そこは  
書いてないのです。途中から陸を  
歩いたとも書いてない。この辺に  
なると記録もはっきりしません。此  
處で私が歩いた時間は13時間52  
分です。途中の休憩は全部足して  
も30分ぐらいしかしていません。  
今朝もある番組で30分以上休憩  
しても何もならないという説を言  
っておられる有名な方がおられま  
した。4・5分休みと段々疲れが  
出て来るのです。だから疲れが出  
らんうちに体が暖かいうちにとい  
うことで歩き始めるのです。飯も  
買ったのを食べながら歩くのです。  
誰も見てるわけではないしそれこそ  
誰一人通らない。そんな感じ  
です。

鎌瀬で今は川下りの舟はストップ  
です。4月から10月はやっています  
が、あとはやっていません。時期  
をはずれていましたので舟による  
川下りはしませんでした。ずー  
っと歩いて行くと、吉尾という所。  
温泉です。私が歩いている道は  
人吉の殿様が参勤交代で使った  
道です。吉尾には温泉があるの  
です。此处が唯一、温泉街だ  
ったような気がします。  
7

それから海路駅、瀬戸石発電所。その先は書いてありませんが、瀬戸石駅というのがあります。その駅から先は道が狭くなって車1台がやっと。しばらく行くともう何も通れない。人一人がやっとという道になります。それでも先の方は見えているのです。500メートルぐらい先が見えているのですが、車は行けないのです。この間の距離は測っておりません。想像で500mぐらいじゃろうなど、想像で作った距離です。

歩いていたらお婆ちゃんが歩いて来るのです。気持ちが悪いですね。夕方になろうかという頃に女の人が一人とぼとぼ歩いて来やっとなですね、よか気持ちはせんですね。あれは若い女の人でも同じだと思えますね。男ならいいのですけど、女の方はちょっと怖い。私も下を向いて挨拶をすれ違いました。

これを越すと鎌瀬という所、さっきの鎌瀬と同じ地名なんですけど相当離れております。鎌瀬橋という橋があります。私が歩いたのは左岸ですが、この鎌瀬橋で右岸にあった国道が今度は左岸に来るのです。私は逆に右岸の方に行きたいと思っているのですが、夕方だったせいか、車がもの凄くてとても歩ける雰囲気じゃないもんですから仕方なく車と一緒に広い国道の方を歩くことにしました。葉木橋という所まで歩きました。ここでやっとな右岸に渡りました。ここは坂本になります。坂本村。坂本駅に着いた時はまっくらすん（真っ暗）でした。女房が心配しとるから電話しようと思って携帯を使うのですが、NTTは使えるが、あんたのこれは使えんよと通りすがりのおじさんが教えてくれました。会社によつ

使えない機能があるんだなと知ってがっくり来ました。肝腎な時に役に立ちませんでした。

此处で懐中電気（懐中電灯のこと）を買うにも店がもう閉まっていた。まだ人の気配はあるのですが、閉まっていた店の中には入れませんでした。この時期歩くのに懐中電気を持って来なかったのは大失敗でした。だからもう真っ暗闇。僅かに通る車のライトしかないわけです。反対側の国道を通れば車はいっぱい通るのですが、今度は生命が危ない（笑い）。大体こんな時間に歩いて来る馬鹿なんて誰もいないわけですからね。皆歩いている人間など考えもしませんから、返って事故を誘発するようなもんですから、仕方なく暗いなかをとぼとぼ歩いて行きました。

中谷橋という所に着くと、今度は暗すぎて足元もはっきりしない状態なんです。仕方がないので危険覚悟で左岸の国道側に行きました。西部大橋でやっとな大丈夫だと思いました。八代市なんです。八代の光が見えて来た時、私は昔見た映画を思い出しました。翼よあれがパリの灯だ、と（笑い）。私は自分の足に「足よこれが八代の海だ」と言いながら歩きました。歩く前に調べたのでは54kmあったのです。だから途中で止めようとも思ったのです。今日は半分にして次ぎにまた半分歩こう、と。歩いた後測ったら、62km歩いたことになっていました。どうみても62km。これは2回測っていますから間違いありません。最初から62kmと判っていたら途中で止めました。54kmだから、まあいけんかならせんどかいということで歩いたわけです。本当に此处でやっとな、八代の灯が見えてきました。用水ダムを越えると上を通っている道路が出て来ます。それから3号線に出ます。八代も全く土地勘がないわけですから、一応八代駅を

一つの基点として、此处で終わりということにしました。

最後の行程は2月22日ということになりますが私の場合は4月3日に歩きました。62kmを一度歩いていきますから、三十数回というのは何とも思いませんでした。八代まで高速道を行き、八代駅前の駐車場をと思って行きましたら満杯でした。仕方なく駐車場を探して走って行きましたら労働金庫の駐車場がありました。休みの日ですから店は閉まっているのですが、駐車場が開いていたもんですから良からうと適当に思って無断駐車させて頂き、それから駅まで引き返して歩き始めました。

今度気が付いたのですが国道の3号とか10号などは100mおきに杭が立っています。そして1kmごとに門司から何kmと書いてあります。100mおきのものは場所によってはないのもあるようです。大体国道にはあります。最初からそれを知っておれば何度も走り回って距離なんか測る必要もなかったのにと思いました。八代を歩いていて気付きました。

西郷軍が歩いた道というのは、2月22日に関しましては距離の記録は問題になりません。既に戦闘が始まっていて、医者の一団ですから早く来てくれということがあったのでしょうか、久米の方は朝4時から活動しています。途中馬に乗って行ったり、いろいろ動き回っています。私が期待したような記録はほとんどない。つまり最後の日：2月22日、彼らはもう戦闘状態に入っているわけです。西郷軍についてはほとんど書いてない。西郷さんがどうしたかも、ほとんど判らない。ただその中の地名と

して川尻とか小川とか宇土とか出て来ますからそれを頼りに宇土を経由して川尻に行けばいいかなということ。道筋も鹿児島街道である3号線を歩けばいいだろうということで歩きました。3号線はよく走っておられると思うのですが今度は歩道を注意して見て頂けませんか。歩道のない3号線があちこちなんです。これはけしからん話だと思います。道は先ず人のためにあるべきですから、天下の3号線に歩道が無い所があるというのはまことにけしからん。

これも私が地元でないので判らんのですが、3号線沿いに両脇にずーっと小さな道があるのです。当然なことですね。広い所ですから。これを歩くべきだったなと思いつつも3号線をちょっと無理して歩きました。歩道が片っ方だけというのがありますから、あつちに渡ったりこつちに渡ったりでした。

そうしながら歩いて、宇土、小川。小川は彼らが休憩した所です。小川町までが12.6km。ここにキロ数やら距離のないのがありますが、私がまだ再実測してないのです。車を使ってやりますけど計測してないのです。建設省の表示は間違いないと思うので一応こうしてあるのですが、私の車でやると3kmぐらい走ると若干ずれが出るのです。車のタイヤのつぶれ具合なのかどうか判りませんが、距離というのは私の場合もいい加減な部分があります。マラソンコースを測るような計器を使ったわけではありません。此处はもう一遍測って正確なのを作ろうとは思っております。小川町が大体半分の所だと思います。彼らが朝4時に出て、此处で休憩しています。大体6時半頃なんです。中食を食ったというのですが、朝食だったのではないかなと思います。そのように私は解釈しております。その後彼らは馬で行動していますが、

私はこの二本足でずーっと歩きました。

現在国道3号線は熊本に近づくにつれてよく整備されており、昔の道路がどうなっておるのかさっぱり判りません。川尻に入りますと、昔の町並みが残っております。お寺も沢山あります。川尻のどこかに病院を置いて治療に当たったと思います。歩いた時間は6時間ぐらいです。人吉・八代、それから八代・熊本の時間についてはよく判りません。えびのからもそうです。西郷軍が歩いた時間と私の時間とは、鹿児島県内では大体一致するのじゃないかと思いません。それ以後についてはルートがはっきりしませんので正確には出しにくい。

私の今回の目的は川尻まで歩くことでした。これで一応、先祖への義理は済んだと考えております。負けた戦いの跡を辿るのはもうちょっと枯れた年齢になってからと思っております。ちょっとまだその気にはなれません。もし次にやるとしたら、東京まで歩きます。つまり西郷は東京まで行きたかったのじゃないか。それを果たすために東京まで歩いて行きます。参勤交代については旧記雑録に割合に詳しく書いてあります。どこに泊まったとか書いてありますので、これを辿れば東京まで行けるのじゃないかと考えています。まあ体力がもつかどうかは判りません。

それから加治木隊のことやらその他資料をあげてきました。いろいろご意見を頂ければと思っております。

〔質疑応答〕

平田 これだけのことを実際にパソコンでデータの整理をされておられるので、判り易い話でした。遠慮なく質問して下さい。

い。表に試歩数とあるのは、これは万歩計を付けて歩いたのですか？

上野 万歩計を付けて歩きました。

平田 右側の分歩数というのは？

上野 これは私が試しに考えたもので1分間にどれ位のスピードで歩いているかを示すものです。

平田 1分間にどれ位という数値。

上野 計算でちょっとおかしいものもあります。最後の6日目に1分間：57とありますが、いくらなんでも変。計算間違いかなと自分でも思っています。大体1分間に121歩が私の基準です。130歩で歩くとなると、きついです。心臓がちょっともたないです。120歩から122・3歩が理想的というところですよ。

平田 もう時間がありませんが、8ページの表についてちょっと説明して下さい。

上野 この表はこういうことです。県史第3巻くらいになりますか、近代編は。そのページが示してあります。出典1というのは、県史のことです。それから日付ごとに県史の記述をこういうふう表にしてみました。日付がばらばらになっているのは、見て頂ければ判りますが戦場の場所が揃ってあります。吉次・木留を揃えました。熊本と高瀬を揃えました。川尻を揃えました。田原坂関係を揃えました。木葉(この)関係を揃えました。それぞれの戦いをどの隊が関わったかを県史によってまとめました。隊1というのは1番大隊です。これはどこの人たちでしょうか。2番大隊が隊2になります。

●印は薩軍です。薩軍の隊属番号。政府軍もそんな順番になっているようです。政府軍の1番大隊であれば、それは○印。そして加治木隊とあるのは、その戦いで戦死者の15.3%が此処で死んだの意味です。

平田 『国分郷土誌』に私は加治木隊・国分隊の戦死率を出しておきました。西南之役では加治木隊と国分隊が第一線で戦ってその死傷率は一番高いのです。それを補充して下さったと思うのです。これは良い表が出来ました。

上野 米軍では10%の死者が出たら、敗戦ということを知りました。10%死者が出るということは相当数怪我をしている。戦闘不能だと聞いたことがあります。専門家じゃないのでそれ以上のことは言えませんが。

平田 加治木隊・国分隊はこんな数字です。15%を越えています。

西田？ 歩き方のコツなんですけど、例えば加治木から栗野まで歩くとします。車は加治木に置いて栗野に行って。帰って来る時は？

上野 私の場合は、鹿児島から出る時は女房がたまたま出る日があり、それに合わせました。加治木から出る時は家から歩いて行って、横川から汽車に乗って帰って来ました。

西田？ 八代の場合はどうしたのでしょうか？

上野 八代は高速道で八代まで行って、あつ、人吉から八代へ歩く時は人吉に車を置いて八代から引き返したのです。JRをうまく使ってやって行きました。

西田？ 時間的なものは測ることは出来たんですけど、これは大変だなと思って聞いていましたけど。

上野 やっぱり二人か三人で歩くのが良いですけど。一人ではいろいろと大変です。人吉から舟が出ない時はJRである

所まで行って、それから歩いてもいいかなと思います。舟に乗ったつもりですね。62kmを歩くのはちょっとお勧め出来ません。

西田？ 私もよく歩くのですが、出発点に帰って来るのが大変なので、どうするのかなと思って聞きました。

永田 大隊が移動する時、先発隊が到着したのと最後尾が到着したのとは相当なずれがあります。昔の計算ですと、大体、一人一人の間隔は銃器を担いで1m20cm。1m20で4千名の大隊だったら24kmでしょう。それに輜重隊が付く、大砲隊が付く。一人で行く場合はそれだけの時間だけど、大隊が動く場合は相当な時間がかかったのじゃないかな。それに食事の時間とか休憩が加わる。そこら辺まで人数等を計算してみたら、いい資料が出来るのじゃないかなと思います。

上野 はあ、それで判りました。何故2時頃。2時頃ならもっと先まで歩けばいいじゃないかと私は思いましたが、最後尾が来るまでには相当時間のずれがあるから、先頭が2時に着いても最後尾はやっぱり5時か6時になる。そうすれば判りますね。何故2時頃歩くのを止めるのかなと思ったのは、そう考えればいいわけですね。道も狭いし。

永田 2列縦隊で行けるとしたら、かなりの道ですよ。山道だったら、1列でしょう。

上野 多分、1列だと思います。

永田 そうすると、1m20の間隔で普通に行けるかどうかの問題ですね。中隊とか大隊移動の場合はそこを掌握するのが難しい。峠を越す時間などを調べて頂ければ、またいい資料が出来るのじゃないかと思えます。

上野 他に日誌の類などはないものでしょうか。もしあれば教えて下さい。私がもう一度、

この道でやりたいのは、私が歩いた道を皆が分担して、ある日一斉に歩いて、何時間かで達成するというのが一つと、それぞれ自分の郷土があるわけですから郷土隊の跡を辿って歩いてもらう。若い人たちにこれも是非やって欲しいなと思います。

平田 従来、郷土史でも従軍日記というのは大抵収録してあります。それでもまだ相当洩れていると思います。

上野 それは是非欲しいですね。

平田 それから薩軍に関係した人たちのことはほとんどの郷土史にはあげてあるでしょうが、西南之役を鹿児島で考える場合、親子兄弟が敵味方に分かれている例が多いわけです。そう言った所の資料はなかなか出て来ない。

永田 血涙西南戦争史とかいうのが限定版で100冊ぐらい出てるのではないですか

平田 薩南血涙史ですか、あれにはそんなに細かいことは載っていない。

永田 分厚いですよね。

平田 厚い本です。

永田 これは図書館にありますか？

平田 あると思いますよ。

上野 薩南血涙史ですね。

永田 100冊の限定版じゃなかったですかね。

平田 復刻されましたよ。(戦袍日記と混同。戦袍日記は100冊限定版。薩南血涙史は復刻)

西田 自衛隊が編纂したのがありますね

永田 新編西南戦記です。

西田？ それを私は持っています。

上野 私が持っているのは、こういう表を作った方がおられます。戦闘があった場

所について、どういうふうを書いてあるか、何ページに書いてあるか、と。県立図書館にあるのですよ。図書館の方が作られたのですかね。

これは非常に便利なものです。一応コピーを取らせてもらっているのですが。

平田 県立図書館では西南之役関係のものは専用の書棚があって一カ所にまとめられています。鹿児島にとっては目玉の資料でしょうからね。

上野 やっぱありますね。平田盛二日記、中郷史。何と読むのですか。

福元 中郷(ちゅうこう)

平田 これは、木場さん。川内市が復刻しましたよね。平田盛二日記は。(川内市史料集。西南之役編に収録)

上野 西南戦争のことを書いておられるのでしょうね。

平田 内容は詳しいよ。

上野 従軍日記は宮之城町史の中にもあるのですかね。

永田 戦死者の名前は亡人録には載っているわけでしょう。

平田 何ですか？

永田 亡人録。西南戦争のものは図書館にはあるのですかね。

平田 戦死者ですか？

永田 はい。

平田 戦死者はどうだろうか。靖国神社が刊行した政府軍関係者ののはあります。薩軍の場合は百周年記念の時に出した戦没者名簿があります。それでも未だ洩れがあるようです。

上野 それで思い出したのですが、私はよく加治木の町を歩くもんですから、たまたま墓に行く用事があって、入った所の墓に一人の名前があったのです。明治十年・・・ひよつと

したら、これはじゃつどと思ってですね、その名前をメモしてパソコンで見てもたら名前があったのでデータを書き込みました。戦死という形で、ですね。だから町史にないものが未だある。加治木には古い墓が残っているので、あれを一斉に調べたら墓そのものが相当な資料になるんじゃないかと思うのですけど。

平田 それは、そうですね。私も墓地を回ってますけど。今のうちに墓碑銘をリストアップしておかなければと思います。

永田 もうだいぶ改葬されたのじゃないですか。

西田 この二十年間にだいぶ片づけられた。

木場 もう駄目だ。

平田 もう駄目ですかね。まだありますよ。

木場 田舎の辺に行けば、まだあつかも知れん。

永田 もう土の中に埋まっています。将来発掘すれば出て来るかもしれない。

平田 国分には戦死者の墓で藪になっているのが相当あります。そういうのも探し出してメモを取る必要がある。これは鹿児島県の郷土史を調べる者の宿命かも知れません。放置しておけない問題です。それをリストアップして一人一人がどこでどういう死に方をしたかを調べるのが、大切なことだと思うのです。

上野 日清・日露に限っては割合どこの郷土史もいろんな資料をあげています。西南之役に関しては、どこで死んでいるということについて加治木郷土誌は相当詳しいのじゃないですか。他は県史をそのまま

写したのじゃないかと思うのが相当な形になっています。

平田 さっきもちょっと言いましたが、親子兄弟が敵と味方に分かれた。結局、西郷が恩赦で許されるまでは薩軍に参加した人たちは冷や飯を食わされたはずですよ。こういう例もあるのです。お前が村に居ると皆に迷惑をかくって、と言って勘当されている。負け戦さを語りたくないというのも多く、薩軍に参加した人の記録は残っていないのです。戦死者の実態も把握されていない。そこら辺を歴史家が飛び込んで行って資料を得なければ、ただの上滑りの西郷崇拜が宣伝される歴史になっている。それでは本当の歴史理解にならないのじゃないかなと思っています。そういうことを言うとな「わいが何をいうか」というような雰囲気もあります。

「お前が居ると皆が迷惑する」というので勘当の形で出て行った、それは事実だと思うのですよ。そう言ったことまで調べなければ西南之役の分析は出来ないと思うのです。

永田 従軍させられる時のいろんな軋轢から何から出したら、やっぱり戦後もきびしいものがあつたでしょう。

平田 他県の人とは違って鹿児島の人たちは西南之役そのものに対して、いろんな意味でこだわりがあると思うのです。それが出て来ないと真実の把握は出来ない。こう言った科学的なデータを積みあげて、隠れた苦しみを掘り出して行くことが必要だと思います。そう言った意味でも今日の話は参考になりました。どうも有り難うございました。

# 歩者路北上熊本



平成11年6月13日(日)  
場所：互助組合会館  
提起者：上野堯史  
(鹿児島県立鹿児島豊学校高等部教諭)

目 次

- 1 「久米清太郎出陣日記」より……………P 1  
(「鹿児島史学第39号」久米雅章氏論稿より)
- 2 「久米清太郎出陣日記」の北上路程……………P 2
- 3 西南の役, 2月9日~22日……………P 3  
(「鹿児島県史第4巻」より)
- 4 上野, 薩軍北上路を歩く路程等……………P 4  
「久米清太郎出陣日記」の1, 2日目(2月17日, 18日)  
上野, 薩軍北上路を歩く路程等……………P 5  
「久米清太郎出陣日記」の3, 4日目(2月19日, 20日)  
上野, 薩軍北上路を歩く路程等……………P 6  
「久米清太郎出陣日記」の5日目(2月21日)  
上野, 薩軍北上路を歩く路程等……………P 7  
「久米清太郎出陣日記」の6日目(2月22日)
- 5 西南の役, 加治木隊(六番大隊)の熊本での戦い……………P 8  
(「鹿児島県史第4巻」より)
- 西南の役, 加治木隊(六番大隊)の戦い……………P 9  
(「加治木郷土誌」P237~P245より)
- 西南の役, 加治木隊隊別戦死場所と数……………P 10  
(「加治木郷土誌」P237~P245より)
- 6 明治期「輯製二十万分一図」一部……………P 11  
(平凡社「鹿児島地名辞典」より)

久米清太郎出陣日記

二砲隊長

田代五郎	桂正助	柴山四郎兵衛	黒木幸助	河野吉	竹下覚之助	柏正助
仁礼直助	伊藤惣助	桑波田景風	野崎源一	讚良健蔵	八東三次郎	田原吉之丞
井上幸之助	森山与八郎	別府平八郎	矢野清八	桑波田兵輔	四番	
野崎英助	弟子丸繁馬	重信甚之丞	本田仲之丞	大山三太	有川仁平太	四元幾
平岡萬之助	南甚蔵	桑波田幸助	関十助	妹尾市郎	坂元盛一	益山彦助
「大迫新次郎	上野藤太	濱田助太夫	関山新九郎	重信彦一		
隈元彦助	川上平七郎	草野寛二	菱刈良之介	有馬彦七	川上雄吉	肥田木正石
梅北伊八郎			衛門 圖師安彦	仁礼幸蔵	谷山雄吉	小牟田
			彦治	税所四郎次	頼川清助	

壹番砲車

土師六郎	川畑要助	重久七郎右衛門	讚良休蔵	仁礼吉之助	三原卯一郎	佐藤四郎
左衛門 宮里新蔵	三原雄五郎	大野喜三太	永田雄七	東郷平吉	岡山盛助	平田吟助
メ十七	いち木彦	野元彦二	堀千彦	安藤喜三	渋谷重彦	

二砲車

永田研吉	和正之丞	平直之助	藤田七左	二番砲隊長	小隊長田代五郎清文	半隊長桂宗右衛門正助
衛門 木脇喜之助	時任武一	河野幸之丞				
メ十	谷山新八	町田次兵衛	春田藤一郎			

○分隊長餅原正之進 ○分隊長柴山四郎兵衛景成

(西南役出發直前加世田区長)  
(副区長西郷小兵衛南洲翁末弟)

病院医師

坂元正蔵	四元雄介
------	------

病院掛

井上英武	染川實信	久米清太郎
------	------	-------

夫卒

桜島藤野	萬右工門	萬五郎	蔵市	善太
上町ノ亥之助				

丁丑二月十日半天  
今日、春成兼致・有馬純意・拙者三人列二面、川邊街道  
通行鹿兒島へ出校、  
同十一日  
滞在、  
同十二日  
今日九時比鹿兒島打立、八時比戸長所へ着シ候處、同列  
中別盃ノ央ニ而候、

三番砲車

野崎源一	讚良健蔵	八東三次郎	田原吉之丞
矢野清八	桑波田兵輔		

本田仲之丞	大山三太	有川仁平太	四元幾
関十助	妹尾市郎	坂元盛一	益山彦助
関山新九郎	重信彦一		

菱刈良之介	有馬彦七	川上雄吉	肥田木正石
衛門 圖師安彦	仁礼幸蔵	谷山雄吉	小牟田
彦治	税所四郎次	頼川清助	

讚良休蔵	仁礼吉之助	三原卯一郎	佐藤四郎
永田雄七	東郷平吉	岡山盛助	平田吟助
安藤喜三	渋谷重彦		

小隊長岩元平八郎恒成	小隊長田代五郎清文
半隊長讚良清蔵	半隊長桂宗右衛門正助

同十三日雪

今日早朝、親類中ヲ招キ別盃ライタシ、戸長所へ揃出發  
ス、昼三時比鹿兒島問屋着、大混雜ノ事、

同十四日大雪

今日日本營ヨリ、大砲隊二番隊病院掛被命、同掛三人井上  
英武・染川實信・拙者、上医院ニテ夫桜島藤野村ヨリ五  
名取調、諸道具仕合置候事、

同十五日

今日壹番大隊ヨリ二番マデ四千人、伊集院筋出兵ス、又  
病院本営内ニテ道具調、二時比ヨリ松原神社下大門口料  
理屋へ、宇田越右工門・同源蔵・同弥七殿同伴差越、酒  
肴等給リ、問屋へ止宿ス、

同十六日

三番大隊・四番大隊迄四千人、加治木街道行、  
今日モ病院へ出張、夫ヨリ井上英武同道ニテ廣馬場鱈屋  
へ行、煙草屋ニテ取入、石燈爐通ヨリ諸方二行、問屋へ  
帰ル、晚十一時比、松原通ニテ短筒六眼鏡取入、六円二  
十五銭價、

同二月十七日晴

今日朝六時比、問屋林安次郎宅ヨリ出立、上病院ヨリ船

月	日	天候	時	分	行動	場所	久米清太郎関係	種別	事件内容
2	15								1番・2番大隊, 伊集院筋出兵
	16								3番・4番大隊, 加治木街道出兵
	17	晴	6	0	出発	林安次郎宅	問屋林安次郎宅より出発	陸行	
	17	晴	8	0	出帆	上新地の濱	上新地の濱より出帆	船旅	
	17	晴	?	?	出発	磯濱	西郷, 桐野ら200人	陸行	
	17	晴			出帆	重富	?西郷, 桐野ら200人	船旅	
	17	晴			上陸	加治木	数万人見物す	陸行	
	17	晴			宿泊	加治木	宿屋森山加兵エ	陸行	
	17	晴	12	0	宿泊	加治木	久米等止宿	?	
	17	晴	15	0	宿泊	加治木	西郷, 桐野ら200人止陣宿	?	
	17	晴							5番大隊2000人, 伊集院筋出発
	18	小雨風	8	0	出発	加治木	宿屋森山加兵エ	陸行	
	18	小雨風	?	?	休憩	加治木	大門司坂上で休憩, 西郷・桐野	陸行	
	18	小雨風	?	?	休憩	溝辺		陸行	
	18	小雨風	14	0	宿泊	横川麓	山元弥右エ門殿方へ止宿	陸行	
	18	雪	?	?	宿泊	横川麓	夕方より降雪		
	19	雪	8	0	出発	横川麓	宿屋山元弥右エ門, 本営も	陸行	
	19	?	?	?	休憩	栗野麓	原田六左エ門殿宅	陸行	
	19	?	14	0	宿泊	吉田町	東郷熊助宅へ止宿	陸行	
	20	晴	6	30	出発	吉田町	東郷熊助	陸行	
	20	晴	9	0	休憩	人吉の大畑町		陸行	
	20	晴	14	0	宿泊	人吉町	源島重兵衛宅へ止宿	陸行	
	21	晴	?	?	出発	人吉町	源島重兵衛	陸行	
	21	晴	8	0	出発	人吉町	西郷も, 護兵は陸行	船旅	
	21	晴	16	0	宿泊	八代町	牧武次郎宅へ止宿	船旅	
	22	晴	4	0	出発	八代町	牧武次郎	陸行	
	22	晴	?	?	昼食	小川宿	本田武記	陸行	
	22	晴	?	?	宿泊	宇都	病院宿取る	陸行	
	22	晴							この日早朝より熊本城下戦闘開始

番号	出典	ページ	月	日	時刻	分類	戦いの場所	事件	備考
43	1	934	2	9		政府	東京	各鎮台に命令	
46	1	925	2	12		私学校	鹿児島	県令に上京趣意書	西郷・篠原・桐野ら
49	1	934	2	12		政府	東京	三条に戦略書提出	
55	1	927	2	13		私学校	鹿児島	歩兵5大隊、砲兵2隊	200×10=1大隊
56			2	13		私学校	鹿児島	作戦会議	
59			2	14		私学校	鹿児島	6・7連合隊先鋒発つ	
60	1	935	2	14		政府	小倉	小倉14連隊半大隊発つ	
61			2	14		政府	東京	熊本城固守命ず	
62	1	929	2	15		私学校	鹿児島	1番隊発つ	西目街道一市来到着
63	1	929	2	15		私学校	鹿児島	2番隊発つ	東目街道一加治木到着
64	1	929	2	15		私学校	鹿児島	6・7大隊加治木発	横川到着
65	1	927	2	15		政府	東京	県令, 熊本に通告す	
66	1	929	2	16		私学校	鹿児島	3番隊発つ	西目街道
67	1	929	2	16		私学校	鹿児島	4番隊発つ	東目街道
68	1	932	2	16		政府	京都	大久保到着	
69	1	932	2	16		政府	京都	京都御前会議	大久保到着す
73	1	929	2	17		私学校	鹿児島	5番隊発つ	篠原・永山・池上も
74	1	929	2	17		私学校	鹿児島	西郷、砲隊発つ	西郷・桐野・村田も
87	1	934	2	20		政府	神戸	征討軍団発つ	神戸, 2/22博多
88	1	929	2	20		私学校	熊本川尻	6・7連合隊川尻着	川尻
89			2	20		私学校	熊本小川	2番隊	小川
90			2	20		私学校	熊本田之浦	4番隊	田之浦
91			2	20		私学校	熊本人吉	西郷・砲隊	人吉
92			2	20		私学校	熊本日奈久	1番隊	日奈久
93			2	20		私学校	熊本田之浦	3番隊	夜, 田之浦
94	1	936	2	20		政府	熊本	警視隊600入城	合計3400か
95			2	20		政府	熊本川尻	川尻夜襲	別府隊21日午前
96	1	929	2	20		私学校	熊本川尻	別府隊, 小衝突す。21日午前	
97	1	929	2	20		私学校	熊本	鎮台夜襲撃退	川尻
98	1	929	2	21		私学校	熊本	1番隊・2番隊到着、宣戦	
99			2	21		私学校	熊本	森岡隊勝利	坪井川
100	1	934	2	22		政府	博多	征討軍団到着	
101	1	940	2	22		私学校	熊本川尻	西郷軍13000集結	川尻, 歩7大, 砲2, 軍夫1200
102	1	940	2	22		私学校	熊本	熊本総攻撃~2/24	段山, 漆畑

第1日目(月 日 曜日) ……史実は1877年2月17日

地点	k m	経過*	試歩数	試歩時間	経過時分	分歩数
私学校跡	0		0	12:55 PM	0:00	
鹿駅	0.76	0.76	1010	1:06 PM	0:11	92
八坂神社	1.71	0.95	2277	1:19 PM	0:13	97
祇園洲	2.14	0.43	2844	1:25 PM	0:06	95
磯天神	3.18	1.04	4225	1:37 PM	0:12	115
休憩	3.52	0.00	4673	1:52 PM	0:09	0
磯御殿	3.77	0.25	5004	1:56 PM	0:04	83
旧花倉病院	5.41	0.58	7191	2:17 PM	0:08	96
三船病院下	6.72	0.61	8937	2:41 PM	0:09	90
竜ヶ水駅下	7.58	0.13	10079	3:12 PM	0:09	19
竜ヶ水休憩	7.6	0.00	10111	3:24 PM	0:08	0
休憩	11.04	0.06	14699	4:18 PM	0:05	16
449Km着	12.78	1.14	17021	4:45 PM	0:16	95
重富陸橋下	14.53	1.75	19353	5:07 PM	0:22	106
重富駅前	15.13	0.60	20157	5:16 PM	0:09	89
思川橋西	15.94	0.81	21240	5:26 PM	0:10	108
休憩	15.94	0.00	21240	5:28 PM	0:02	0
青木水流公園	16.79	0.69	22376	5:40 PM	0:10	92
休憩	16.79	0.00	22376	5:45 PM	0:05	0
和田ラーメン	17.62	0.83	23481	5:56 PM	0:11	100
休憩(食事)	17.62	0.00	23481	6:26 PM	0:30	0
443Km着	19.48	1.86	25966	6:48 PM	0:22	113
別府川西	19.99	0.51	26652	6:54 PM	0:06	114
440Km日経前	22.9	2.91	30533	7:33 PM	0:39	100
網掛川東	23.1	0.20	30800	7:35 PM	0:02	134
自宅	24.57	1.47	32757	7:59 PM	0:24	82

第2日目(月 日 曜日) ……史実は1877年2月18日

地点	k m	経過*	試歩数	試歩時間	経過時分	分歩数
加治木本町	0	0.00	0	1:25 PM		
蒲田通りこうか(店)	0.4	0.40	452	1:29 PM	0:04	113
加治木町役場	0.65	0.25	869	1:33 PM	0:04	104
青雲(塾)前交差点左折	0.95	0.30	1175	1:36 PM	0:03	102
愛宕神社	1.1	0.15	1432	1:39 PM	0:03	86
加治木中前春日橋	1.8	0.70	2284	1:47 PM	0:08	107
加治木温泉病院前	2.15	0.35	2801	1:52 PM	0:05	103
高井田	2.3	0.15	3241	1:54 PM	0:02	220
竜門司坂入口	2.78	0.48	3641	2:01 PM	0:07	57
毛上バス停	4.65	1.87	5514	2:20 PM	0:19	99
休憩	4.65	0.00	5514	2:35 PM	0:15	0
加治木国際ｺﾞﾙﾌ	6.4	1.75	7996	3:03 PM	0:28	89
2里塚バス停	8.7	2.30	11159	3:36 PM	0:33	96
休憩	9.4	0.00	12082	4:02 PM	0:17	0
40号蒲生線入口	11.25	1.85	14662	4:28 PM	0:26	99
第2有川橋	13.25	2.00	16719	4:48 PM	0:20	103
溝辺町役場	13.8	0.55	18041	5:02 PM	0:14	94
溝辺十文字	15	0.80	19794	5:21 PM	0:12	89
休憩	15	0.00	19794	5:42 PM	0:21	0
久留味川橋	17.8	2.80	23656	6:22 PM	0:40	97
馬渡川新深川橋	20.5	2.05	27417	6:58 PM	0:24	117
丸岡公園入口	21.25	0.75	28537	7:08 PM	0:10	112
二石田交差点	22.05	0.80	29555	7:18 PM	0:10	102
横川ｲﾝﾀｰ入口	22.8	0.75	30582	7:28 PM	0:10	103
横川Aﾌﾟｰﾄ	23.2	0.40	31039	7:33 PM	0:05	91
金山橋	23.35	0.15	31291	7:36 PM	0:03	84
役場入口	23.6	0.25	31564	7:39 PM	0:03	91
			6:14			

第3日目(月曜日) ……史実は1877年2月19日

地点	k m	経過*	試歩数	試歩時間	経過時分	分歩数
横川町役場	0	0.00	0	8:35 AM		
横川駅前	0.3	0.30	368	8:38 AM	0:03	123
横川駅前2分休憩	0.3	0.00	368	8:40 AM	0:02	0
山之口交差点	1.7	1.40	2305	8:57 AM	0:19	102
栗野町標示	2.2	0.50	3010	9:04 AM	0:07	101
ツツヅツ工場前	2.8	0.60	3799	9:12 AM	0:08	99
会田鉄橋下	4.6	1.15	6202	9:36 AM	0:16	100
坂元橋	5.25	0.65	7123	9:45 AM	0:25	37
川添入口道路下	6.5	1.25	8755	10:02 AM	0:17	96
合庁前	6.8	0.30	9175	10:05 AM	0:03	140
合庁前2分休憩	6.8	0.00	9175	10:07 AM	0:02	0
栗野役場	7.2	0.40	9669	10:13 AM	0:08	62
綾織工業団地入口	9.35	1.25	12912	10:47 AM	0:21	105
川添神社栗野側	12.15	0.85	16453	11:22 AM	0:35	39
川添神社栗野側休憩	12.15	0.00	16453	11:30 AM	0:08	0
竹中池公園入口	14.05	1.90	19063	11:57 AM	0:27	97
北緯32度	14.8	0.75	20071	12:07 PM	0:10	101
吉松町役場	16.2	1.40	21937	12:27 PM	0:20	93
吉松町役場休憩	16.2	0.00	21937	12:42 PM	0:15	0
吉松麓バス停	17.1	0.90	23108	12:54 PM	0:12	98
鶴丸温泉・駅入口	18.4	1.30	24695	1:10 PM	0:16	99
鹿児島・宮崎元標	18.95	0.55	25612	1:18 PM	0:08	115
亀沢バス停	19.8	0.85	26745	1:30 PM	0:12	94
えびの市京町	21.5	1.70	29155	1:56 PM	0:26	93
				5:21		

第4日目(月曜日) ……史実は1877年2月20日

地点	k m	経過*	試歩数	試歩時間	経過時分	分歩数
えびの市京町	0.00	0.00	0	10:02 AM		
寿屋	0.40	0.40	781	10:10 AM	0:08	98
ナガトモ	1.10	0.70	1667	10:18 AM	0:08	111
休憩	1.10	0.00	1667	10:21 AM	0:03	0
西郷	3.10	2.00	4317	10:47 AM	0:26	102
徳満橋經由徳満	4.00	0.90	5150	10:55 AM	0:08	104
臥肥街道合流	5.70	1.70	10442	12:40 PM	0:32	108
観望神社入口	7.10	1.40	12354	1:02 PM	0:22	87
後平橋終り	9.10	0.35	15866	1:40 PM	0:06	90
えびの展望橋	10.50	1.40	17252	1:54 PM	0:14	99
加久藤神社	11.55	0.75	18865	2:13 PM	0:09	90
加久藤神社	13.50	1.95	21558	2:40 PM	0:27	100
かいろうん橋	16.20	2.70	25176	3:06 PM	0:26	139
最初の人家(鯉あり)	18.40	2.20	27300	3:36 PM	0:30	71
馬油販売店手前	21.25	2.85	32533	4:30 PM	0:54	97
休憩	21.25	0.00	32533	4:36 PM	0:06	0
大畑(おぼこ)交差点	23.15	1.90	33018	4:43 PM	0:07	69
ジヤスコ	27.15	4.00	37483	5:30 PM	0:47	98
休憩	27.15	0.00	37483	5:36 PM	0:06	0
221・219交差点陸橋	27.30	0.15	37766	5:39 PM	0:03	94
ツツ弁当先高速下	29.30	2.00	40414	6:07 PM	0:28	95
東間下交差点	29.90	0.60	41194	6:21 PM	0:14	56
人吉城	31.35	1.45	43043	6:35 PM	0:14	132
				8:33		



地点	km	経過*	試歩数	試歩時間	経過時分	分歩数
萩原町八代駅	0		0	10:59 AM		
3号線へ出る			341	11:02 AM	0:03	114
門司まで228km表示			686	11:05 AM	0:03	115
219・3号交差点			910	11:07 AM	0:02	112
松橋21*表示			1160	11:09 AM	0:02	125
西富町交差点			2228	11:18 AM	0:03	111
宮地町			2712	11:22 AM	0:04	121
松橋19*表示			3607	11:30 AM	0:08	112
八代IC入口			4868	11:42 AM	0:06	164
門司まで224km表示			6227	11:55 AM	0:07	111
門司まで221km表示			10428	12:32 PM	0:03	143
宮原町表示	7.4		10660	12:34 PM	0:02	116
門司まで219km表示			13214	12:56 PM	0:11	122
竜北町表示	9.5		13473	1:01 PM	0:02	57
小川町	12.6		17448	1:29 PM	0:01	161
小川町役場交差点	14.1		19447	1:47 PM	0:05	102
松橋町立豊福小	19.3		26284	2:57 PM	0:25	113
矢部・三角交差点	21		28926	3:25 PM	0:06	128
信号待ち			28926	3:28 PM	0:03	0
門司まで207km表示			29583	3:34 PM	0:06	110
三角・城南交差点			30459	3:42 PM	0:08	110
門司まで203km表示			34673	4:20 PM	0:13	97
うるごがわばし			35556	4:28 PM	0:08	110
宇土市新松原町交差点	27		36023	4:33 PM	0:05	93
富合町陸橋			38520	4:59 PM	0:12	101
富合町志々水	29.85		39648	5:09 PM	0:09	108
はまどかばし			40665	5:21 PM	0:12	85
みどり川橋口	31.3		41271	5:27 PM	0:06	101
川尻へ左折	31.7		42020	5:33 PM	0:06	125
新町橋			42769	5:40 PM	0:07	107
川尻町	32.8		43244	5:44 PM	0:04	119
川尻駅			44539	5:57 PM	0:13	100
				<b>6:58</b>		116,0928

番号	出典	年	月	日	時刻	分類	戦いの場所	戦いの名称	隊1	隊2	隊3	隊4	隊5	隊6	隊7	隊8	隊9	加治木隊	事件	備考
127	1	945	2	26		私学校	熊本吉次													
136	1	946	3	3		政府	熊本吉次	田原坂の戦い1	●											
138	1	946	3	4		政府	熊本吉次	田原坂の戦い1続き	○											
161	1	947	3	12		私学校	熊本吉次	田原坂の戦い4		○										
166	1	947	3	13		私学校	熊本吉次	田原坂の戦い4												
128	1	945	2	26		私学校	熊本木留		●					●						
215	1	952	4	1		政府	熊本吉次・木留	吉次・木留の戦い1		●				●	●					
216	1	952	4	1		私学校	熊本吉次・木留	吉次・木留の戦い1		○										
217	1	952	4	1		政府	熊本吉次・木留	吉次・木留の戦い1		○										
221	1	952	4	2		政府	熊本吉次・木留	吉次・木留の戦い1		○	○									
222	1	952	4	2		私学校	熊本吉次・木留	吉次・木留の戦い1												
107			2	23		私学校	熊本吉次峠	吉次・木留の戦い1												
118	1	941	2	26		熊本隊	熊本高瀬													
120	1	943	2	26		政府	熊本高瀬													
121	1	944	2	25		私学校	熊本高瀬	高瀬の戦い				●								
122	1	944	2	25		私学校	熊本高瀬	高瀬の戦い	●											
123	1	944	2	25		私学校	熊本高瀬	高瀬の戦い		●				●	●					
124	1	945	2	26		私学校	熊本高瀬	高瀬の戦い			●									
236	1	942	4	8	04:00	政府	熊本川尻													
134	1	945	3	3	夜明け	政府	熊本田原	田原坂の戦い1												
137	1	946	3	4		政府	熊本田原	田原坂の戦い1続き	○	○										
139	1	946	3	4		私学校	熊本田原	田原坂の戦い1続き	●											
140	1	946	3	4		私学校	熊本田原	田原坂の戦い1続き	●					●	●					
142	1	946	3	6		政府	熊本田原	田原坂の戦い2	○											
143	1	946	3	6		政府	熊本田原	田原坂の戦い2		○										
141	1	946	3	6		政府	熊本田原	田原坂の戦い2			○									
145	1	947	3	7		私学校	熊本田原	田原坂の戦い3												
146	1	947	3	7		政府	熊本田原	田原坂の戦い3												
148	1	947	3	8		私学校	熊本田原	田原坂の戦い3												
149	1	947	3	8		政府	熊本田原	田原坂の戦い3												
157	1	947	3	11		私学校	熊本田原	田原坂の戦い4												
158	1	947	3	11		政府	熊本田原	田原坂の戦い4	○	○	○									
160	1	947	3	11		政府	熊本田原	田原坂の戦い4	○	○										
167	1	947	3	13		政府	熊本田原	田原坂の戦い4												
168	1	951	3	14		政府	熊本田原	田原坂の戦い4												
169	1	948	3	14		政府	熊本田原	田原坂の戦い4二俣				○								
170	1	948	3	14		私学校	熊本田原	田原坂の戦い4												
186	1	949	3	20		政府	熊本田原	田原坂の戦い5陥落												
187	1	949	3	20		政府	熊本田原	田原坂の戦い5陥落												
104	1	943	2	22	19:00	私学校	熊本木葉	植木・木葉の戦い					●							
105	1	943	2	23		私学校	熊本木葉	植木・木葉の戦い												
106	1	943	2	23		私学校	熊本木葉	植木・木葉の戦い												
135	1	946	3	3		政府	熊本木葉	田原坂の戦い1	○					●						
15.3%																				
16.1%																				
0.8%																				
15.3%																				
4.0%																				

1999/3/29

西南戦争加治木隊調べ 1 「加治木郷土誌」 作成：上野堯史

	負傷	負傷死	病死	自殺	戦死	その他	合計	参加数	戦死率	備考
全隊, 含む幹部	21	15	5	4	157	5	207	900	17.4%	別府他
1 番小隊	2		1	1	10		14	101	9.9%	
2 番小隊	2		3		23		28	103	22.3%	
3 番小隊	6	3		1	16		26	101	15.8%	
4 番小隊	3	2			13		18	100	13.0%	
5 番小隊	4	3	1		20		28	103	19.4%	
6 番小隊	1	1			12		14	113	10.6%	
7 番小隊		3			33		36	110	30.0%	
8 番小隊	2	3			12		17	105	11.4%	
私学校外					1		1	6	16.7%	
医師								3		
赤隊補充兵								7		
別働隊								12		
その他					15		15	15	100.0%	
全隊, 除く幹部	20	15	5	2	155		197	879	17.6%	

史書博士：加治木郷土誌編纂委員会



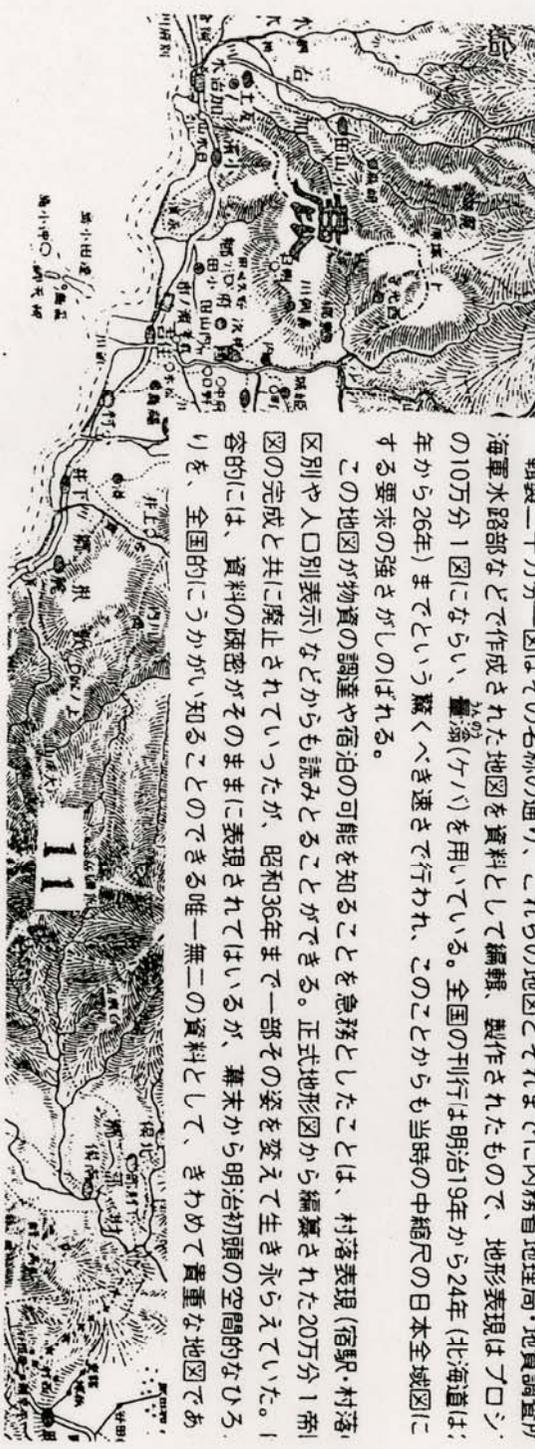


輯製二十万分一図解説

輯製二十万分一図は、明治初期における日本の代表的な地図の一つである。この地図の製は明治17年(1884)、日本では正式測量がようやく緒についたばかりの時期に、参謀本部陸軍測量局(後の陸地測量部)によって着手された。当時あった伊能忠敬の地図は、陸地の輪郭と主要街道だけであり、幕府の国絵図は村の位置と距離が主な表現であって、そのままでは使用耐えないものであった。

輯製二十万分一図はその名称の通り、これらの地図とそれまでに内務省地理局・地質調査所海軍水路部などで作成された地図を資料として編輯、製作されたもので、地形表現はプロジの10万分1図にならぬ、量縮(ケバ)を用いている。全国の刊行は明治19年から24年(北海道は、年から26年)までという驚くべき速さで行われ、このことから当時の中縮尺の日本全域図にする要求の強さがしのばれる。

この地図が物資の調達や宿泊の可能を知ることができることを急務としたことは、村落表現(宿駅・村落区別や人口別表示)などからも読みとることができる。正式地形図から編纂された20万分1帯の完成と共に廃止されていたが、昭和36年まで一部その姿を変えて生き永らえていた。内容的には、資料の疎密がそのままに表現されているが、幕末から明治初頭の空間的なひろりを、全国的にうかがい知ることのできる唯一無二の資料として、きわめて貴重な地図である。



I. 第 66 回例会 平成 11 年 9 月 5 日 (日) 於教職員互助組合会館和室

(出会者) 青柳俊二・池田 純・上野堯史・打越和郎・小川秀直・小山田 稔・川野雄一・小園公雄・木場武則・坂本 誠・永田典男・西田春人・肱岡修一郎・平田信芳・松田 誠・三善喜一郎 (計 16 名)

II. 大日本地名辞書読会 P. 1745~P. 1747

〔問題となった地名および事項〕 米良・調殿・日向国分寺・三納城と稲積城・妻万神社・『鹿児島県の歴史』(山川)

米良

平田 今日読んだのは日向国府の所在地に関係する所でした。薩摩国や大隅国と比較して何か気付いた点があると思います。遠慮なく疑問点を出して下さい。

米良という所は元々は日向国に属してますが、江戸時代には肥後国に所属して人吉の相良氏が支配していました。

小園 先日、NHKのニュースで出ましたよ、米良が。明治のいわゆる廃藩置県の際に米良の当主が村民たちに平等に土地を与えた、と。その屋敷も現在残っているしその銅像もありました。しかし、やっぱり相変わらず谷間に形成された村であって、村に住む人たちも少なく困っているような状況が放送されました。

平田 過疎の状況をね。

小園 やっぱり過疎の地域で九州の尾根の部分：九州山脈の中心部にありますからね。此处を西郷軍は通過したみたいです。

平田 そのこと：丁丑之役のことが後半に書いてあります。ここにはいわゆる市房三山、石堂山とか天包山など高い山がありますからね。

調殿 (つきどの)

小園 この調殿というのは、調所 (つしよ)。つまり税を集める役所を意味しているのじゃないですかね。調所氏・税所氏というのがあってしょう。調所氏というのは国の調度品を調達する・・・

平田 それが調所に訛っているわけだね。

小園 それと関係がないのかな。

平田 租納の殿舎の義とす、と最後の方に書いてあるでしょう。

小園 ああ、租納の殿舎の義。

日向国分寺

平田 穂北郡については、高千穂の北という意味と寿 (ことほぎ) の「ほぎ」から来た「ほぎのた」という二つの説があるようですが、それについては判りません。三宅は、みやけ：屯倉でしょうね。此处が日向国府の所在地です。此处には日向国分寺が現存しています。五智如来を本尊としているとのこと。それと妻高校の敷地が国分尼寺跡になります。国府・国分寺・国分尼寺がセットで確認出来る所です。大隅国府を考える時、日向国を参考にする必要があるのでないかと思えます。

### 三納城と稲積城

平田 1747'-'の左の方に三納郷の説明があります。これは 699年：7世紀の終りに「大宰府に命じて三納城と稲積城を修させた」という有名な記事があります。今までは北九州の方に稲積城と三納城を比定する説があったのですが、当時は隼人に対する警戒が一番重要な時期ですから三納はやっぱり日向国に、稲積城は大隅国に稲積郷というのがありますからそこに置かれたと考えるのが筋の通る話だと思います。そして三納城を中心に発達したのが日向国府になり、稲積城から成長して行くのが大隅国府になったと考えるべきだと思います。ただし、国分市の近くに稲積城があったに違いないのですが、どこになるかはまだ探し出せておりません。これは鹿児島県の者が手分けして探し出さなければ恥をかく遺跡だと思います。ところが稲積城跡を死にもの狂いで探そうという感覚がないのですよね。私も暇があれば国分・溝辺・横川・牧園、この範囲にあることは間違いないと思います。それから発達したのが大隅国府と考えます。稲積城とともに見逃せないのが三納城です。

小園 あれは大鏡ですかね。載っているのは、神託集に載っている？

平田 これは続日本紀。

小園 続日本紀に載ってますかね。とにかく大隅国が出来たのが 713年でしょう。三納は別として、稲積を牧園の中津川辺りに一応求めているでしょう。ルートと関係があるかも知れないと考えています。例えば肥後国・薩摩国から大隅国へ入るルート

平田 うん、それと関係がある。

小園 私は国分から大隅大川原を通って行く道も一つのルートだと思っているのですが、大伴旅人が来たルートは肥後国を経由して来たと思います。肥後の方に駅路というよりも車道というか軍道。そういう名前が最近話題になっている。車路というもの。

平田 車路(くるまじ)でしょう。

小園 あゝ車路。それが軍の移動に結び付いている。そうすると、大伴旅人は薩摩の方から日向国を通って来たのじゃないか。大口・えびの方を経由して下って来た。稲積城は既に出来上がっておったと考える。中村先生は曾君が勢力を張っておった所だから、私がいう嘯吟郡を通して行くルートではなくて、こちらの方が近かったのじゃないかと稲積に結び付けて話しておられる。

平田 今話が出ましたが、稲積城を探すのは牧園か溝辺か横川か。そこら辺りに置くのは、日向国との連絡も取り易いし、肥後国との連絡も取り易い。薩摩国にもつながるし、国分にもつながる。そういう場所に稲積城は置かれたに違いないと考えます。

上野 和氣清麻呂が流されますね。和氣神社のある所がそうであるか、どうかは別にして、あの神社は昭和に造っていますから。和氣清麻呂を世話した人が確か稲積老となっていましたよね。それからすると牧園町は有力になるのじゃないかと思う。

小園 和氣神社に僕が小学生の時に角力とりに行ったのですよ。

平田 あゝそうですか(笑い)。

小園 戦時中に、昭和16年頃。昭和18年だったかな。

平田 問題はあれなんです。大隅国桑原郡に八つの郷があるでしょう。その中に仲川郷と

稲積郷と、二つ出て来るわけですね。牧園町に中津川という地名があるから、牧園町に二つの郷を比定するのは少し強引だ、ということ。そこが欠点なんです。

小園 鹿児島県には稲積という地名は、二・三カ所あるのじゃないかな。

平田 うん、稲を積んだような形の地形地名。一番いいのは鹿児島県でどういう形を稲積と呼んでいるかを把握すること。稲を積んだ形。加治木の蔵王岳。あの山は形からいうと、そんな形だがなあと思うんですね。

小園 律令政府が支配体制を徐々に拡げていく拠点としては、やっぱり大宰府に近い所とか日向国に近い所を選ぶでしょうからね。突然、阿多郷にもって来たりするはずはないと思うのです。

平田 それはそうです。稲積老の世話になったということは事実ですが、問題は仲川郷と稲積郷の二つを牧園町に求めてよいかということ。そこがとくに栄えた所で交通の要地であれば、二郷があっても不思議ではないのですけど。

小園 中津川というのは、もう一カ所あるでしょう。

平田 うん、永野の方にね。あちらも鶴田・宮之城につながるルートですからね。交通に便利な所です。

小園 調べるためには、やっぱり、まず地名。

平田 まず地名だろうけど。

小園 史料があれば最高なんですけどね

平田 最近でも北九州で古代の山城が見つかったりしますからね。稲積城は鹿児島県の人たちがどこかで探さなきゃなら

いものだと思います。

### 妻万神社

平田 平群郷というのは平群一族が移って来た所。平群氏とつながりがある人々が南九州に遠征して来て、そのまま住み着いたことによって生まれた地名と考えてよいでしょう。今日、読んだところで気付いたことはそんなことです

小園 調殿のところにある地頭前掃部頭殿は中原親能のことですね。

平田 そうです。同じ人物です。薩摩国国田帳にも出て来る人物です。

小園 これは「つま」と読まないで妻万さいまんと読むんですな。

平田 さあ、どうだか。日向国の一宮は都濃神社です。私は行ったことがないので、どなたか都濃神社をご存知の方はおられませんか。都万神社が大きく書いてあるのは不思議だなとは思いますが。

上野 前回話題になった二字でもって一字を表すと言われませんでしたか。あの・・・

平田 都於郡とか穎娃とか。

上野 穎娃とか可愛とか。あれからすると妻は一字で「つま」。それで十分ですよ。妻にさらに「万」の字を付けている。

平田 あゝ、妻万ね。

上野 わざと二字にしてある。

小園 ここは日向国の駅の所在地？

平田 当然、日向国の駅路が通っているはず

です。小園 神社と官道との結び付きというものが最近指摘されているようです。

### 『鹿児島県の歴史』(山川)

平田 先程寄郡(よりごうり)と読みましたが、最近刊行された『鹿児島県の歴史』の古代の部分は日隈さんが書いたと思うのだけど。

小園 いや、永山さんでしょう。

平田 永山氏？寄郡（よせごうり）と仮名を振ってあるので、また「よせごうり」が出て来たなと感じたのですが。

小園 中世は日隈さんだろう。

平田 ああ、そうか。

小園 新しい事柄がいっぱい出ている。例えば古代・中世の鉄のタタラとかファイゴの羽口が出て来た白樫野遺跡のことが出て来る。金峰町教育委員会の知り合いに電話して資料を送ってもらったのですが、出たことは出たんだそうです、その層から

他の当時の陶器と青磁・白磁とかと。

平田 白磁でしょう。持躰松付近から出たのは。

小園 宋磁と言いましたね。白樫野遺跡から出た、と。

平田 タタラが？

小園 はい、タタラとファイゴが出た。他に陶器とか並んで出たと言います。タタラの良い資料だと思います。

平田 今後も製鉄資料が沢山出て来るでしょう。今日は二人、問題提起をしますので地名辞書の方はこれで打ち切ります。

## 出雲国風土記にみえる里程について

青柳 俊二

青柳 みなさん、資料をお持ちでしょうか。地図とこれです。

平田 4通りあります。5月16日付けのものは、彼が島根県文化財課に送って返事が来ております。その返事に基づいてさらに論考を重ねたものもあるのですが、膨大な分量になるので印刷はしませんでした。地図、出雲国風土記の引用、里程を計算したものの、5月16日付けのもの、4通りです

青柳 資料が若干足りないようで、ない人があるかも知れません。

平田 そうですか。次回には届けます。それではお願いします。

青柳 青柳です。これは県立図書館から借りて来た本で、昔の物差しが3本入っています。赤いこれは象牙で作ってあって、象牙の上に染色してそれをまた彫り込んでそして又別の色を着けて磨く撥緞のやり方で作ってあるようです。長さは29.8cmと、

29.6cm。これは30.7cmということです。29.8cmと29.6cmのものはいわゆる天平尺になります。30.7cmのものは装飾用で長さには意味がないと説明されています。いわゆる天平尺というものが大事に保存されています。この本に載っているのはこの3本だけですが、正倉院には全部で14本保存されていて、撥緞尺が8本あるということです。その中に30.2cmとか30.3cmとか曲尺を前後するような尺もあるわけです。一応本を回しますので見て下さい。

地図の3枚目を見て下さい。碁盤の目状の図が入っています。これは1町を100畝に分けた図です。1畝というのは1反の十分の1です。10畝で1反、10反で1町という計算です。

ところが「畝」というのは奈良時代とか平安時代の公文書類には出て来ないのです。例えば300歩＝1反である場合には、1反200歩とか1反〇〇歩という表現で、「畝」という単位は使われないのです。おかしなことに現在の歴史

学の解釈ではそれにこだわっています。要するに「畝」というのはなく「反」があるのだから、と。そして1町の中身は10個に分かれなければならないというのです。

最近、古い時代の田圃が発掘されて畦を検出する例がいくつも出て来ました。これは群馬県の大八木遺跡で、火山灰で埋まった跡からきれいに畦が出て来たと言われていています。此処では100畝割というのが出ています。

『出雲国風土記』はご存知の通り、和銅六年(713)風土記を作って上申せよということで全国的に取り組まれた中で、唯一完全なものとして残っています。出雲国風土記がいつ出来たかという、2枚目の真ん中あたりに「天平五年二月三十日勘造、秋鹿郡人神宅臣金太理、国造帯意宇郡大領外正六位上勲十二等出雲臣廣嶋」。これから判るように天平五年(733)、和銅の勅が出てから20年ぐらいて出来たという経過があります。

実は「二月三十日」という日付の問題があります。天平五年二月三十日という日付はなく二月二十九日までだったということで、出雲国風土記というのは偽書というか後から国造家が自分たちの権威付けのためにでっちあげたものではないかとの推測がされて論争になっています。これは山陰新聞の昭和27年6月23日の記事ですけど、

「風土記は偽書にあらず、承服し難い藪田説」ということから風土記論争が始まります。藪田さんという人が、風土記はでっちあげて後から作った本だと言出したのですが、最終的には藪田さんが自説を引っ込めて集結します。だいぶ議論されていま

す。これも見て下さい。

次に地図を見て下さい。此処に島根市があります。ここに島根半島、宍道湖、中海があります。島根郷は島根半島側と本土側の両方にまたがっています。島根市街地というのは宍道湖を埋め立てたみたいな感じで広がっています。その東のはずれにあるのが意宇平野です。ここに出雲国府跡とか国分寺跡があります。脇に㊦と記した所。山代郷があった所です。その正倉跡が知られています。その辺の説明は縦書きの資料にあります。出雲国風土記の中から意宇郡の記事や付近の名所を選出して抜粋してあります。一応位置関係は大体判ってもらえたものとして、その場所を当たっておきます。

〇がしてある数字。3行目に「意宇の森」というのを太字で表してあります。意宇の森は、この地図では㊦になります。小さな高塚と言いますか、この辺で見かける「モリ」みたいなものです。大草郷、大草町という名前でも残っています。㊦はこれで見ると「出雲国山代郷正倉跡」になります。この正倉跡はだいぶ早く発見されて地図にも載っているし、遺跡は現地に保存されています。

次に黒田駅。黒田駅は後から言いますけど、郡家と同じ場所になります。地図上の位置をいうと、説明を付けていませんが、㊦の場所です。出雲国府と出雲郡家、それから黒田駅は同一郷、同じ場所になります。

次に新造院一所というのが二つ出て来ます。新造院というのは要するにお寺のことです。

「建立嚴堂無僧」とか「建立嚴堂住僧一軀」とか、書いてあります。場所を地図で見ますと、一つは、㊦山代郷北新造院。これは来美廃寺と書いてあります。㊦の辺りをみまると、来美という地名があります。此処に寺跡があります。

もう一つの新造院の場所は⑥です。

次に「神奈備山」というのが地図にあります。それと「神名樋野、郡家西北三里一百廿九歩、高八十丈、周六里三十二歩」。

(東有松、三方竝有茅)という記事があります。此处に茶臼山とあります。⑩になります。高さ171.5m。そんなに高い山とは思えないのですが、171.5mの山なんですよ。

次に⑪。「嶋根郡境、朝酌渡。四里二百六十六歩」という朝酌渡になります。ここで一番最初の文章に帰ります。

「玖郡」。郷陸拾貳、里一百八十一、余戸、余戸というのは郷を構成しない余った人たちを一まとめにするとか、五十戸に足りない人たちを余戸とする制度があります。それが肆。次に駅家が陸：六つ。神戸が漆：七つ。神戸に属する里が十一、ということです。

玖郡は、意宇郡・嶋根郡・秋鹿郡・楯縫郡・出雲郡・神門郡・飯石郡・仁多郡・大原郡の九郡になります。

さっき言った朝酌渡の関係で言えば、意宇郡にある出雲国府から朝酌渡を渡って嶋根郡・秋鹿郡・楯縫郡など嶋根半島側にある郡に通じます。最初の地図で言えば、嶋根郡・秋鹿郡・楯縫郡の方面に行く時の渡し場ということです。今も此处に橋は架かっていなくて、小さな渡し舟があって細々とやっているという感じです。それが朝酌渡です。

それと○印の付いた最初の文章「前件一郡、入海之南、是則国廓也」。此处に廓があるということか、それとも郡との国廓ということなのかよく判りません。入海とは

中ノ海のこともし穴道湖のこともしようです。

この地図に書いてある出雲国分寺も出雲国府も発掘されたのは戦後に入ってからです。国分寺の方が少し早く、奈良国立博物館の石田茂作さんを中心とする調査団が来て発掘したようです。山代郷正倉跡というのは早くから出ていたようです。出雲国府も国分寺の後に戦後に入ってから発掘されました。発掘された地区というのは、地元の郷土史家で恩田清という人が江戸時代の水帳：元禄四年の意宇郡大草村検知帳をみて「こくてふ」という小字があることに気づき、これは「国庁」ではないかと言われたのをきっかけに教育委員会がこの辺を発掘して国庁跡が出たということです。遺跡は保存されています。

今日の主題の一つに「十字街」というのがあります。その前に出雲国風土記の全体構成に触れるのを忘れていましたので、それを説明します。最初に出雲国風土記の全般的なことを書いた部分があります。それから郡関係の記事、最後に「卷末通度」という部分があって、各郡の道のりを一まとめにして記してあります。

ちょっと見ていきます。「自国東堺、去西廿里百八十歩、至野城橋、長三十丈七尺、広二丈六尺(飯梨河)又西廿一里、至国庁意宇郡家」『』をしてあるのは北以下ですが、これは私が考訂のまねごとをして勝手に入れた部分です。

「北十字街、即分為二道」、次は二段書き：二段註です。(一正西道、一枉北道)、枉は曲がるという意味です。ここで十字街というのが出て来ます。この地図で言いますと、こちらから来ます。国の東の堺から野城橋を渡ってずーっと来ます。出雲国府に来ました、此处で二つに分かれます、ということです。一つは北に

向かいます。さっき言った朝酌渡を渡って嶋根半島側に行く道です。もう一つはそのまま真っ直ぐ西へ行く道です。要するに、国府辺りで真っ直ぐ西に行く道と北に行く道が分かれるということです。

小園 ちょっと、質問。いいですか。十字街という町がある。町に間違いはないですか。「ちまた」、分かれ道のことじゃないですか。

青柳 これは「ちまた」と書いてあるものもあります。この字を使ってあるものもあります。

平田 「ちまた」の方がよさそうですね。

小園 はい、進めて下さい。

青柳 読み方がいけなかったかもしれませんが。街(まち)を街(ちまた)と読めば間違いはないでしょう。十字街の位置を考えるのにどういう記事があるかという、正西道というのが出て来ます。北に曲がる道について説明した後に、正西道と書いてあります。

平田 後から4行目ですね。

青柳 はい。後から4行目です。これに「自十字街、一十二里、至野代橋」とあります。十字街が西に向かう道の起点であることを示しています。ところが、さっきの「又西二十一里、至国庁意宇郡家、北十字街即分為二道」について「又西二十一里、至国庁意宇郡家、北十字街」と一くくりにして、十字街という場所が国庁意宇郡家を代表する場所みたいに従来は解釈されて来ました。まあ誰が見てもそう思うかも知れないですけど。しかし、いろいろ調べてみて国庁・郡家を十字街で代表させるわけにはいかない、という結論になりました。

それがどうしてか、ということが今日のテーマです。

それで起点の場所がどこかということです。地図に⑩とある辺りだろう、と思います。ここに八雲立つ出雲国風土記の丘資料館のパンフレットがあります。回しますから見て下さい。

さっきの読み方で私の場合、「至国庁郡家」と「北に行つて十字街」と分けて読みます。明らかに違うということです。「北に行つて十字街」、これは距離は示されていませんけど、そういうことです。あくまでも東から北道は、国庁・郡家に行くということです。それから又北に向かうということです。北に向かって十字街で二つの道に分かれるということです。

いろいろ言いたいこともあります、話題を変えて里程の問題を説明したいと思います。

「出雲国風土記里程記事単位に対する見解」ということでレジュメを出しておきました。読んでいきます。

『出雲国風土記』冒頭に記された、国之大体東西137里019歩、南北183里193歩という里程数値は、同書の本文・卷末通度の記事から集計されたものと一致しない。これについては既にいくつかの解決策が提示されて来たが、これらは私の納得するものではなかった。私独自に考えた結果、以下のような見解を見るに至ったので報告する次第です、ということです。

それで問題は「国之大体、首震尾坤、東南山西北属海、東西137里019歩、南北183里193歩」という数字です。この数字は今までの里程研究の中で問題になっていて、南北183里193歩はれっきとした間違いだというのが通説です。岩波の古典文学大系『風土記』でも、秋本さんという方が考訂されています。それでは横に200里〇〇歩と直してあります。その数値が合わな

いことがはっきりしているので書きませんでした。

何と合わせるべきかということについて東西・南北の里程記事の照合という所から始めます。「137里019歩、183里193歩」という数値があげられています。南137里019歩と照合するものは何かというと、まず「E41里180歩」というのがあります。これは国東境から野城駅を通過して黒田駅：国庁・郡家に行く道です。それから「隠岐道、去北34里140歩、至隠岐渡、千酌駅」この道が南北のうちの北に当たる部分です。そして「正西道、自十字街～至玉造街、即分為二道」「正南道～至国南西界」「惣去国程166里257歩」というのが、南に当たる部分です。

それで、34里140歩+166里257歩=200里397歩、これは201里097歩になります。しかし実際は南北183里193歩しかないわけです。だから間違いだというわけで、岩波の古典文学大系では200里〇〇というのがあがって来ます。

今度は「惣去国程」を眺めてみます。2枚目を出して下さい。2行目に「南西道・飯石郡家・惣去国程、一百六十六里二百五十七歩也」、これは十字街への道のり、いわゆる道程と言っておきます。南北の道については「183里193歩」が間違いだということになっております。

ところが東西も合いません。東西は137里019歩ですけど、さっき言った東境から黒田駅までの41里180歩と十字街からの166里257歩を足しても合いません。これは148里124歩になります。11里以上違います。いずれも違うということです。この場合、

変なことで、通説では2枚目の13行目の国西境に至るまでの西の道の惣去国程106里234歩が間違いで、90里台の数字が正しいとのことであげてあります。

私が考えるに、この記事は出雲国風土記の1行目に出て来る文章です。いくら間違いだと言っても写し間違えることがあり得るだろうかと思えます。「惣去国程」にしてもそうです。こんな大事な数字を簡単に間違えるだろうか、ということです。私の常識で言えば、これが間違いだというような言い方は何か風土記を冒読するような、あるいは風土記を伝えて来た人達を冒読する内容じゃないかと考えます。

ただ実際には問題があります。もし同じ単位で長さが同じだったとしたら、そういうことはあり得ないわけです。数値が違う以上、間違いだと考えざるを得ない。何か間違っている。合計というのは合わなければならないから、どこかに間違い求める必要がある。100+100=200にならなければいけないのだから、どうしてもですね。それが150になるわけがないのだから。長さの単位が同じでだったら、ですね。

それで私は総説にある単位と郡の記事とか巻末通度にある里の単位と長さが少し違うのではないかと、そういうことを考えました。それならばどちらも正しいと考えられるわけです。惣去国程も正しいし、東西南北も正しい、と。その辺から検討を始めました。

A4横書きの1ページ中程に《「東西」「南北」計算経過の復元案》というのがあります。これを見ます。全体では次のような関係が見られます。「115,412歩」というのは何かというと、東西・南北を合わせたもの、320里212歩です。これを1里=300歩で計算した場合、96,212歩になります。ただし、1里=360歩でした場合には

115,412歩になります。

前後しますけど、1里=300歩というのは大宝律令の中に「凡そ度地は五尺を以て歩と為せ、三百歩を以て里と為せ（凡度地、五尺為歩、三百歩為里）」（雑令）という規定があるわけです。別の表現をすると、1里=180丈というのがあります。それを5尺で割った場合は、1里=360歩となります。そういうようなやり方を隋や唐ではしております。国際的な見方でしたら、115,412歩ということです。

また巻末通度とか郡のいろいろな記事の中では1里=300歩法が採られていることが判ります。記事を詳細に見て頂ければ300歩を超えるような里・歩はほとんど出て来ません。一つか二つ出て来るけど、それは何かの間違いだろうと思えます。頻度的に300歩を超える歩は統計学的に比定されるということです。実際に合計が計算出来るところでしてみると360歩法でなく300歩法がぴったり計算が合います。

それで私は最初の東西・南北だけは1里=300歩法でされているのではないかと考えます。そこで115,412歩というのを採りあげました。115,412歩はどういう数字かというと、1ページの右側の一番下、E+N+S+W=349里221歩、これを300歩法ですると104,921歩になります。その数を1.1倍して11歩を加えたものが115,412歩です。③の104,921歩は今の104,910歩と11歩を足したものです。無理に分けるとすれば分けられる数値です。

これを東西と南北について分配することが出来ます。えーと下に書いてあります。自分でも判らなくなりました。（笑い）。

ちょっと難しい、ややこしい計算です。

平田 計算はいいから。  
青柳 この結果、東西137里019歩および南北183里193歩の算出経過はつぎのように推定されるということで、41里180歩+106里244歩に国庁と十字街までの距離：1里030歩を足すと149里154歩になります。これが44,854歩①です。これを加工して1.1倍したら、東西137里019歩になります。下も同じです。N34里140歩+S166里257歩、今度は逆に1里030歩を引くと60,067歩となって、これを1.1倍していくと66,073歩になって、南北183里193歩になります。

1.1倍という数値がかかわるのですが、問題は どうしてそうなるかということです。田圃の模式図を見たら私の意図は判って頂けると思えます。これは畦です。中に田圃があります。一定の割合があつて、田圃が11・畦が1の長さで幅がとられているから、このようになります。1.1倍というのはどういうことかという、これは300歩です。それに田圃の畦が計算されずから1.1倍になるということです。11:12という関係が逆にひっくり返って1.2倍されて1.1倍の関係になる。そういうのがあるんじゃないかと考えているわけです。今の段階ではこういう計算が成り立つことを提示すればよい。それ以上は知っている人、判る人に考えてもらえばよいということを出しているわけです。以上です。

平田 相当難しい計算が入っていますが、先を急ぎましょう。要するに300歩=1里と360歩=1里のどちらで計算して表記したかという問題です。私も以前尺・里に首を突っ込んだことがありますから、簡単に整理しておきます。天平尺が出てきましたが、天平尺の1尺は29.7cmこれを6/5倍したもの：29.7cm×6/5=

35.6cm、これが高麗尺になります。日本の尺は6/5倍という伸び方をしますが、中国の尺は5/4倍という伸び方をします。これで伸びたのが鯨尺になります。それと11/10という伸び方、1割増のもの。租の2束2把とか庸の2丈2尺というのも1/10伸びています。これは以前から疑問に思っているのです。何故あのような発想が出て来るのか、と。やっぱり損耗率を考えて10%プラスしたのだらうなとは思いますが、それから最近の鎌倉市の発掘調査例によると、鎌倉時代の初めに11/10伸びた尺度で町作りをしているのではないかという発掘結果が出ています。鎌倉時代にも尺の伸びが11/10あったことが考えられます。出雲国風土記の解釈では数値が間違いとされているけれども、青柳さんは間違いじゃなく計算の仕方が違うのではなかろうかとの問題提起だったのです。そうですね。

青柳 はい、そうです。

平田 質問はありませんか。

永田 出雲のことで、松江の付近であるような気もするし、こっちの方にも出雲が出て来るので。そのところを、もう一遍教えて下さい。

青柳 何ですか。

永田 2枚目の地図。下の端の方に「出雲郷」というのが出ておりますし、……

平田 東出雲町、出雲郷。

青柳 これは出雲郷（あだかい・あだかえ）と読みます。

永田 出雲郷（あだかい）ですか。出雲郷（あだかい）とこちらの出雲（いづも）とは関係はないのですか。

青柳 「いづも」というと出雲郡のこと

ですか。出雲郡は、宍道湖の脇に出雲大社がありますけど、あの辺りのことです。

永田 これは風土記の丘があったりするあの付近になるわけですね。

青柳 はい、そうです。

永田 私も出雲のタタラに関心があるので……

青柳 出雲国造が此処に住んでいました。風土記の丘というのは国造館跡辺りにあります。

永田 現在、出雲大社を受け継いでいるのは出雲国造家ですよ。

青柳 ああ、ずーっとですね。しかし途中で移っている。

永田 途中で移っているのが、どうも変だ。

青柳 移されたという感じですが。歴史書によると出雲国造の力があまりにも大きくなりすぎて中央から嫌われた。そして最終的には移されたようですよ。

永田 結局移されても出雲大社を支配するのは国造ですよ。

青柳 千家とか北島家などの社家が代々受け継いで来ているようです。もともとは国造家由来しているわけですが、詳しいことは知りません。

永田 私も出雲を自動車で案内なしに走り回りました。風土記の丘や神原神社古墳とか出雲の古墳を見ましたが、北の方は全く判らないのを見ていません。

青柳 ああ、国庁辺りをですね。

平田 残り時間が少なくなりましたからこれで終わらしましょう。ちょっと休憩します。

## 日高姓の分布

平田 信芳

説明部分の録音なし（スイッチ入れ忘れ）。レジュメ

にもとづいて再現。質疑応答部分は録音あり。

6月27日（日）、鹿児島テレビ：K T Sの「We love 九州」という番組で「消えた鹿児島さんを探せ」が放映されました。その経緯はここにおられる池田純さんにK T Sのディレクターが鹿児島の面白い名字を尋ねたのが契機となって、4月初めにそのディレクターの訪問を受けました。お目当ては西郷さんのルーツだったようですが、一通り話を聞いた後どうもうまくまとまりそうにないとぼやくのです。その時、そうだな、鹿児島県に鹿児島・薩摩・贈嶽という名字がない。鹿児島姓が福岡・大分・大阪にあることは新聞で気付いている。県立図書館に行って、全国の電話帳に当たってみたら手がかりがつかめるかもと、送り出したのです。1時間ほど遅れて図書館で再び彼と合流しました。その時、久留米に80軒ばかり鹿児島・鹿子島という名字があることを知らされました。

そこで本格的に全国の電話帳から鹿児島・鹿子島・籠島さんを拾い始めました。それと併行して「旧記雑録前編」「新田神社文書」、山口隼正氏の論文「嫡流国分氏」などからデーターを引き出し、鹿児島氏の系図を整理してみました。それが配布したB4の資料になります。右側に(1)藤内康友、(2)康村、左側に鹿児島氏の系図と(3)康弘、(4)康邦とあります。私のノートは片面ノートで右側に書きます。追加・補足は左側に書くので、コピーは右・左の順

序が一見妙な具合になります。

電話帳で確認した「鹿児島」姓にもとづいてその分布図を作りました（ノートに記した分布図を提示）。福岡県が最も多く、大分と大阪にも分布が見られます。この二つの分布図によって「鹿児島」姓と「鹿子島」姓はルーツが同じだと判断出来ます。

鹿児島氏の系図に話をもどします。(1)藤内康友、藤内は藤原内舍人（うどわり）の略。この史料は30年ほど前に薩摩国分寺文書を整理したことがあったので早くから気付いていました。源頼朝に従って奥州藤原氏征討に参加した鹿児島康友という人物が鹿児島郡司だった、と。その鹿児島氏がどのようにして消えてしまったのか疑問のままでした。系図を整理してみると鹿児島氏は本来惟宗姓。島津氏初代忠久も初めは惟宗姓ですから、どこかで関連があるでしょう。鹿児島康友は平忠澄・忠重と鹿児島郡司職を争っています。鹿児島郡司職をめぐる源氏・平家の対立です。

2代目の鹿児島太郎康村は矢上盛澄と鹿児島郡司職を争っています。源氏の将軍は3代で絶えて執権北条氏の時代になりますが、矢上氏は北条氏と気脈を通じた勢力と考えられます。

3代目の鹿児島小太郎康弘は平忠重・忠光と争います。忠重・忠光が承久合戦では京方に付いたと訴えますが、北条政権は辺境の問題に消極的だったのでしょうか。康弘は嫌気がさしたのでしょうか。その後出家しています。

4代目の康邦は矢上盛澄後家と鹿児島郡司職

をめぐって争っています。それが弘長元年(1261)のことです。以後、鹿児島氏は史料上から消息を絶ち、矢上氏が鹿児島を支配したとみられます。

1341年、島津家第5代貞久が肝属兼重ら南朝勢力と結び付いた矢上氏を討ち、東福寺城・尾頸小城・催馬楽城を攻略します。矢上氏の没落は鎌倉幕府の滅亡によって北条氏という後ろ盾を失ったことがその背景に考えられます。3月に末吉町で話を頼まれましたので末吉町の電話帳を調べましたが、矢上姓が末吉町に多く見られたのには驚きました。矢上氏は末吉に配置転換になったのでしょうか。降伏した後、島津氏に敵対する伊東氏に備える前線に送られたのかも知れません。矢上氏没落後は足利尊氏と提携した島津氏が勢力を伸ばすことになるわけですが、鹿児島氏の覇権の推移は中央政界の変動と連動していると考えてよいでしょう。

系図を見て下さい。康友の次男友久の子孫が国分氏を名乗って薩摩国分寺領を支配します。さらに友久の次男重兼が執印姓を名乗ります。いわば三男家に当たります。執印氏は新田神社を支配します。国分氏・執印氏の子孫は現在につながっていますが長男家の鹿児島氏は消えてしまっているのです。このデータをKTSに送ったことが「消えた鹿児島さんを探せ」のテーマになって展開したのです。

KTSのディレクターがパソコンで鹿児島・鹿子島さんの電話番号・住所を引き出してくれました。NTTのデータでは氏名から電話番号・住所まで引き出せるようになっているらしいです。国民総番号制が

話題になっていますが、個人情報のインプットは着々と進んでいるようです。

それは兎も角として、パソコンで引き出した鹿児島・鹿子島さん達が高良大社およびその周辺寺院付近に固まっていることを見付け出してくれました。そこでKTSのスタッフは第1次の取材に北九州および東京に出かけます。その時、「鹿児島」姓の中で「康」の字がある人は注意せよと助言しました。その時の取材の成果は鹿児島徳治さんが手がけた仕事でした。昭和63年(1988)に鹿児島徳治さんは全国の「かごしま」姓の人たちにアンケート調査を実施して、そのルーツ調べを試みたのです。その結果が『鹿児島姓ルーツの探求』という本になっています。そのコピーをKTSのディレクターから貰いました。アンケートのまとめもあります。二つとも回しますから見て下さい。

なお鹿児島徳治さんは越後：新潟の出身ですが、現在は東京に住んでおられます。越後の鹿児島姓は大阪商人の鹿児島さんから派生したものです。さらに越後の人たちが東京に働きに出て、東京に広がったものと考えます。

以上のような段取りを経て福岡県取材に同行することになりました。最初の日、KTSのスタッフが取材撮影している間に、私は久留米市図書館で久留米市・福岡県の鹿児島姓についての資料を探しましたが皆無に近い状態でした。高良大社は筑後国一宮で歴史は古いのですが、文献史料は薩摩に比べると月とスッポン。島津家が保管して来た古文書・史料の量はもの凄いと実感しました。鹿児島県は本当に歴史の宝庫です。鹿児島氏の史料だけでも12~13世紀のものが旧記雑録に十数点みられるわけですが、久留米市にはそんな古いものはありません。

高良大社でその史料編纂に当たっている方と

薩摩とのつながりをいろいろ語りました。ほとんどが島津氏の九州制覇時の話でしたが、何気なく鹿児島さんの先祖は高良大社の社家の一つで、その屋敷跡が中腹に残っているとされたのは、ひょうたんから駒でした。権力闘争に敗れて薩摩国から逃れた鹿児島氏の安全な避難場所は高良大社だったと推定出来るからです。中世において独立した勢力を保ち得たのは宗教勢力であったことにも結び付きます。

鹿児島さん探しは、島津以前の鹿児島の歴史に手がかりを与えてくれることになりました。鹿児島姓の話はそれくらいにして本題の日高姓の分布に移ります。

全国の電話帳で鹿児島さんを探していた時に鹿児島県と宮崎県にやたらに日高姓が多いことに気付きました。と同時に、それぞれの県で特徴的に見られる姓があることにも気付きました。鹿児島姓の分布図を作成してみて、従来人々が重宝がって来た系図は作画的なものが混入する場合もあったが、姓氏・名字の分布現状は意図的操作はあり得ない、と。あるがままの姿は何らかの歴史を秘めている、とを知りました。

各県の電話帳から市町村別に日高姓を拾いあげて作成したのが配布した「日高姓の府県別頻度」と「日高姓の分布図」です。全国で「日高」姓を14,415例拾いあげました。その40%が宮崎県・鹿児島県に集中しています。

「日高」姓のルーツを探ると、頼朝や義経の叔父に当たる源十郎行家が始まりで、その子孫が紀伊国日高郡を領有して日高を名乗ったといわれます。和歌山県の電話帳では日高郡日高町に「日高」姓が見当たら

ないことが鹿児島県に鹿児島さんがいないことと共通していて興味をもちました。ただし日高姓は和歌山県内に80軒ほどあります。鹿児島県のようにゼロではありませんが、宮崎県の約4,000、鹿児島県の約2,200と比較すれば、本質の地は微々たる数です。

「日高姓の分布図」を見ると大半が海に近い所に住んでいることに気付きます。海の民、これが第一の特色になります。紀州の熊野水軍に結び付くと直観的に考えます。宮崎県・鹿児島県を初めとして関門海峡一帯・博多付近・壱岐・対馬・平戸・五島、それに屋久島・種子島に集中していることは、倭寇の根拠地・倭寇の子孫を連想させます。

そこで、唐人町を『日本地名総覧』(角川)から拾い出して列挙しました。左側のダッシュの付いた番号は、右側の地名の解説として各県地名大辞典から書き抜いたものです。7.長崎県福江市唐人町の解説が7'になります。「天文9年(1540)、明人王直が通商のため来航して出来た」ことを述べていますが、明人王直は史書に倭寇の王：ボスと書かれている有名な存在です。唐人町が倭寇と結び付く端的な例：証拠になります。

それから、17.島根県広瀬町唐人谷。17'に「尼子氏は彼らをここに住まわせて軍需品の貿易を行かせた」とあります。尼子氏が倭寇と結び付いていたことを物語ってくれます。

ここでまた「日高姓の分布図」に戻ります。島根県を見ると山の中に日高姓の大きなドットが見られます。海岸から離れているのは、京都・大阪の淀川流域は別として、島根県だけの現象です。大きなドットが三つあります。左から順に石見町・瑞穂町・羽須美村を指します。

石見町は言わずとも知れた石見銀山の所在地で

銀・銅の産地。瑞穂町・羽須美村は玉鋼の産地、夕夕製鉄が盛んだった所です。此処に日高氏が乗り込んでいるということは倭寇という名の私貿易船：私貿易商人は銀および鉄を重要な交易品とみなしていたことが推定されます。

この一年間、永田・小園両先生の夕夕製鉄の話、永田先生・青柳さんの出雲の話など、いろんな角度で眺めて来ましたが、「日高」姓の話も結果的にはこれらの話と結び付くものになりました。

愛媛県の大きなドットは伊予三島で伊予水軍の根拠地です。愛媛県の場合、「日高」姓の府県別頻度表を見て貰うとすぐ判りますが、「飛鷹」姓が突出しています。飛鷹を名乗る特別な意味あいがあったのかも知れませんが、「日高」を隠すための作りのような気がします。

なお「唐人町」の分布図も作りましたが大半は九州に集中しており、その中の半分は鹿児島県にあります。このことは全く、灯台下暗しでした。鹿児島県の唐人町は、鹿児島県地名大辞典（角川）および鹿児島大百科事典から拾い出しました。

唐人町は古い町ですが、その表現を嫌って呼び名が消えつつあるのが歴史的現実のようです。現段階できちんと調べておくことが必要だと感じました。唐人町と言えば倭寇。倭寇すなわち海賊と連想する人が多く、どうもイメージが悪いようです。16～17世紀に世界を駆け回った商人たちは、取引が順調に行けばそのまま商人で通し、取引がうまくいかなければ海賊に化ける。このことは世界共通の現象ですから吾々は名称にこだわりませんが、まあ水軍と表現

しときましよう。

伊予水軍の河野氏・越智氏、松浦水軍の松浦氏、その他古来水軍に連なる宗像氏・村上氏・渡辺氏・九鬼氏などの全国分布も電話帳をもとに探っていくと面白いテーマになりそうです。

今日取り上げた鹿児島氏・日高氏は、ともに権力闘争に敗れて本貫の地を離れた存在です。鹿児島氏は社家から商人になって、福岡・大分・大阪・新潟・東京へと拡がっています。日高氏は東日本では尾張・三河の海岸地帯、常陸国霞ヶ浦一帯に拡がっていますが、主なる活動舞台は西日本です。西日本の重要な港を支配して海の民としてエネルギッシュな活躍をした痕跡を、「日高」姓の分布は雄弁に物語っていると思います。

〔質疑応答〕

小園 日高で思い出すのは、中之島に油津の海賊を焼き殺したという伝説があるようです。そうすると日高山伏は生粋の薩摩人になる？

平田 日高山伏は天台宗の行者。山伏の日高氏は島津氏に降伏してからは、隠密として動くわけです。

小園 武岡の山伏？

平田 鹿児島県の日高さん達は、麓郷士が多い。川野氏は帰ってしまったのですが、河野・越智・宗像・松浦など、水軍に関係する名字がどのような分布をしているかを調べると、なおはっきりして来るのでしょうか、日高は熊野水軍の子孫を代表する名字だと思います。

上野 熊野水軍の南下は海賊の話ですが、喜界島とか奄美大島にある平家伝説は、平家の人達が船を漕いだはずはないから誰かが乗せて来たはずだから、その人達とのつながりは考えられませんか。乗せて来た人達が帰れずに住み着いたとなれば、その人達が日高姓になる。

平田 そこら辺りは判りませんが、日高姓の分布というのは面白いテーマだから、いろんな所の言い伝えを集めたら何か手がかりがつかめるかも知れませんね。

小園 この前、鹿児島市の「小園」姓を調べたら、180軒ありました。

平田 鹿児島市の小園姓が？

小園 ほとんどが川辺・知覧の出身ではないかな。加世田の方には字名もあるのだけど。

平田 名字の場合は、鹿児島県内だけでドットを付けるのではなく、日本全国を眺めてみたら何らかの手がかりが得られるということ、鹿児島さん日高さんで感じました。

小園 鹿児島では「こぞの」というのだけれども、東京の人は「こぞの」と読まないで「おその・おその」と言っています。「いや、私は“こぞの”です」と一々言わなければならない。

上野 もともとは川辺ですか。

小園 大体、川辺・知覧・加世田。

上野 鹿児島県の名字は、私の上野にしてもそうですが、南薩とくに川辺・知覧辺りの名字が県内全域にあるような気がする。それはルーツが川辺・知覧なのか、それとも偶々そうなのかは判りませんが、どうもそんな気がするのですけど。

平田 島津は家臣を散らばらしていますね。とくに角麓にはどこでも有名な名前がある。例えば有馬・有村・伊地知・市来などは皆散らばっています。県下全域にある名字は島津に負けて各地にばらばらに飛ばされたことを示しています。それでもドットを打ってみると、やはり濃厚に出て

来る部分があります。どんな姓を見ても、そこが本拠地だと見当が付きます。今日出て来た矢上氏はさっきも言いましたが、末吉に移されています。鹿児島市ではあまり見かけませんので、矢上は負けてあつちに移ったということが判ります。

小園 南北朝の頃、船で来て東福寺城に攻め込んだ・・・

平田 うん、熊野水軍がいる。

小園 矢上も入っていたのではないかな。

平田 源平合戦や南北朝の争いに、鹿児島の連中は皆、一所懸命で、どっちかに付いているわけです。勝った方に付いた方が後々支配者となるわけです。

小園 その選択が難しいわけですからね。

平田 負けた方の子孫は冷や飯を食わされることになる。

小園 兄弟喧嘩もしている。

池田 そうですね。兄弟で両方に分かれたりしますよね。

平田 それは薩摩だけでなく、日本中全部、そうですよ。日本の合戦は親兄弟みんな分かれて、どっちかが生き残って領土を残すようになっている。（笑い）

今回は、誰か話をお願い出来ませんか。小川さん、何かないですか。

池田 私が不動寺について話します。

平田 次回は池田さん、その次に小川さんに頼みましょう。今日はこれで終わります。

## 《「東西」「南北」と巻末通度記事との照合》

総説「国之大体、首震尾坤、東南山、西北属海。東西 137 里 019 步。南北 183 里 193 步。」

東西 137 里 019 步 + 南北 183 里 193 步 = 320 里 212 步

『1 里=300 步』法の場合、96,212 歩-①

『1 里=360 步』法の場合、115,412 歩-②

本文（各郡記）及び巻末通度（『1 里=300 歩①』法）において、（東西+南北）に相当するものを構成する要素（部分）となる 4 個の里程記事を選定する。

一本文・意宇郡一

「通道。通国東堺手間 41 里 180 步。」

E 41 里 180 步

一巻末通度・駅路案内一

（「至黒田駅。即分為二道。（一正西道、一渡隠岐国道也。）」）

「隠岐道、去北 34 里 140 步、至隠岐渡、千酌駅。」

N 34 里 140 步

一巻末通度・通道案内一

（「正西道、自十字街」～「至玉造街。即分為二道。（一正西道、一西南道。）」「正南道」

～「南西道」「至国南西堺。（通備後国三次郡。）」）

S 166 里 257 步

「惣去国程、166 里 257 步也。」

（「正西道、自十字街」～「玉造街」～「至国西堺。（通石見国安農郡。）」）

「惣去国程、106 里 244 步。」

W 106 里 244 步

E + N + S + W = 349 里 221 步

(1 里 = 300 歩、104,921 歩①)

## 《「東西」「南北」計算経過の復元案》

この (104,912 歩①) は、(96,212 歩-①) と、また (115,412 歩-②) とも合致していない。しかし、(115,412 歩-②) の場合は、「1 里=360 歩」法における歩②単位の大さが、巻末通度の『1 里=300 歩①』法のもの（歩①単位）とは相違するという可能性が留保されている。そこで、(104,912 歩①) と (115,412 歩②) との数量的関係は如何にということ調べてみよう。

全体では、つぎのように厳密な数量関係がみられる。

① 104,921 歩 = (104,910) 歩 + 11 歩、

② 115,412 歩 = {(11/10) \* 104,910} 歩 + 11 歩、

式②は、東西と南北について、分配することができる。

② 115,412 歩 = 東西 { (11/10) \* 44,850 } + 4 ) 歩 + 南北 { (11/10) \* 60,060 } + 7 ) 歩、

これによって、式①を、東西相当分と南北相当分とに、分配する。

① 104,921 歩 = E + N + S + W

= { (E 12,480 歩 + W 32,044 歩) + 330 歩 } + { (N 10,340 歩 + S 50,057 歩) - 330 歩 }、

= { (E ~ W) 44,524 歩 + 330 歩 } + { (N ~ S) 60,397 歩 - 330 歩 }、

= { 44,854 歩 } + { 60,067 歩 }、

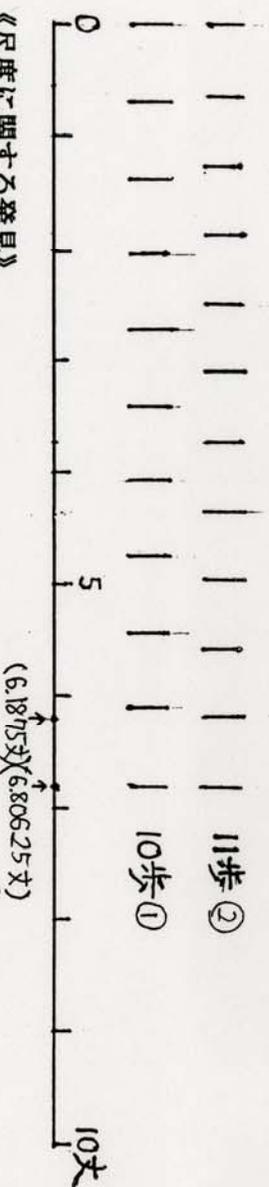
= { 44,850 歩 } + 4 歩 + { 60,060 歩 } + 7 歩、

この結果、出雲国風土記における算出経過はつぎのように推定される。

(E 41 里 180 歩 + W 106 里 244 歩) + 《J 1 里 030 歩》 = 149 里 154 歩 (44,854 歩①)  
 [(11/10) \* 44,850] 歩 + 4 歩 = 49,339 歩② = 東西 137 里 019 歩  
 (N 34 里 140 歩 + S 166 里 257 歩) - 《J 1 里 030 歩》 = 200 里 067 歩 (60,067 歩①)  
 [(11/10) \* 60,060] 歩 + 7 歩 = 66,073 歩② = 南北 183 里 193 歩

つまり、総説と本文・巻末通度との間に、11 歩② = 10 歩① という換算率の存在が認められる。

(歩①の長さを 2 m 丁度と仮定した場合、歩②の長さは 1.8181...m ということになる。)



《尺度に関する発見》

平井進氏により、出雲国風土記において旧尺度系からの換算が行われている、という可能性が指摘された(平井進「周の尺度システムと三国時代の朝鮮半島、古墳時代の日本」1996)。平井氏が挙げるところの4個の例は、

- 神門水海、(郡家正西 4 里 050 歩。) 周 35 里 074 歩。(神門郡)
- 山口郷、郡家正南 4 里 298 歩。(嶋根郡)
- 手染郷、郡家正東 10 里 260 歩。(嶋根郡)
- 野城駅、郡家正東 20 里 080 歩。(意字郡)

以上の文から採られているようだが、「その相互間に厳密な整数比関係が存在していること」が報告されている。新井宏氏は、これを歩一歩の換算関係としてとらえ、以下のよう整理された。また自ら出雲国風土記を搜索して、類例を数多く検出されている。(未発表論文「出雲風土記の里程に現れた古韓尺/新井宏」)

天平尺里歩	換算計算	古韓尺の歩	古韓尺の里
35 里 074 歩	10574 歩 / 0.88116	12000 歩	40 里
4 里 298 歩	1498 歩 / 0.88118	1700 歩	
10 里 260 歩	3260 歩 / 0.88108	3700 歩	
20 里 080 歩	6080 歩 / 0.88116	6900 歩	23 里

整数比関係の存在とその有意性に関するところは、私も躊躇なく賛同するが、新井氏の整理における天平尺の位置づけには服従できない立場にある。むしろ以下のような位置づけが、私には、好都合である。

風土記本文里歩	換算計算	天平尺の歩	天平尺の里
35 里 074 歩	10574 歩 / 0.88116	12000 歩	40 里
4 里 298 歩	1498 歩 / 0.88118	1700 歩	
10 里 260 歩	3260 歩 / 0.88108	3700 歩	
20 里 080 歩	6080 歩 / 0.88116	6900 歩	23 里

これを基に、この換算を丈一歩にわたるものとして捉え直し、以下のように整理した。

風土記本文里歩	換算結果	天平尺 10 尺の丈	表見換算率	原里
1 里 = 300 歩①		〔天平尺歩〕 = 0.6 丈	歩①/丈	1 里 = 180 丈
35 里 074 歩	10574 歩	7200 丈 (12000 歩)	1.46861	40 里
4 里 298 歩	1498 歩	1020 丈 (1700 歩)	1.46862	5 里 120 丈
10 里 260 歩	3260 歩	2220 丈 (3700 歩)	1.46846	12 里 060 丈
20 里 080 歩	6082 歩	4140 丈 (6900 歩)	1.46859	23 里

### 1. 換算率および換算手順

結論をいえば、原データから本文・巻末通度歩への理想換算率 (歩①/丈) は、1600/1089 である。(1 歩① = 0.680625 丈)

$$\{(0.80/0.99) * (10/11)\} / 0.5 = 1600/1089 (= 1.4692378)$$

原データから総説歩への理想換算率 (歩②/丈) は、『11 歩② = 10 歩①』という換算関係から、160/99 と計算される。(1 歩② = 0.61875 丈)

$$(0.80/0.99) / 0.5 = 160/99 (= 1.6161616)$$

なお、換算前の里法は、1 里 = 180 丈 とするのが、地図製作事業への応用に、適当だと思われる。換算率 (里/里) は、800/1089 (本文里)、80/99 (総説里) と計算される。

$$(80/99) * (12/11) = 320/363 (= 0.8815426)$$

実行換算手順では、3 つの計算分節が順次行われる。各分節における所定換算率は、以下の I、II、III、である。

(原数値) 1089 丈 → 1306.8 → 1568.16 → 1,600 歩 (結果)

$$\textcircled{1}(6/5) \quad \textcircled{2}(6/5) \quad \textcircled{3}(100/99)$$

### 2. 換算手順の実行

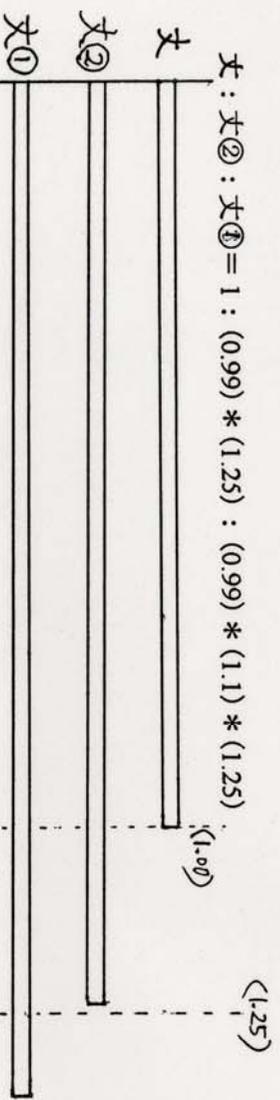
換算手順を上記の実例において示す。

$$\begin{array}{ll} 7200 \text{ 丈} + 720 + 720 = 8640 & \textcircled{1} \quad 1020 \text{ 丈} + 102 + 102 = 1224 \quad \textcircled{1} \\ 8640 + 864 + 864 = 10368 & \textcircled{2} \quad 1224 + 123 + 123 = 1470 \quad \textcircled{2} \\ 10368 + 103 + 103 = 10574 & \textcircled{3} \quad 1470 + 14 + 14 = 1498 \quad \textcircled{3} \\ 1057 \text{ 歩} = 35 * (300) + 74 = \text{「} 35 \text{ 里 } 074 \text{ 歩} \text{」} & 1498 = 4 * (300) + 298 = \text{「} 4 \text{ 里 } 298 \text{ 歩} \text{」} \end{array}$$

同様に、2220 丈 → 3260 → 「10 里 260 歩」

### 3. 基礎的な尺度関係

歩②及び歩①がいずれも「0.5 丈為歩」という規則に従っているものと仮定し、換算率から、各丈の長比を逆算した。丈：丈②：丈①＝8800：10890：11979  
長比を図示するに当たって、比例式はつぎのように整理される。



丈②及び丈①は二次的な尺度であることに注目して、私はひとつの見通しを立てた。「1 丈(高麗法)＝1.25 丈(1 丈＝天平尺 10 尺)」という基礎的な尺度関係があり、これにより条里地割の外形が測定される。その内部構造の測定には、水田計画に適合するモジュール尺(而尺作長大、以 250 歩為段者、亦是高麗術云之。)が用いられる、という見通しである。→図( )

備考 メートル法換算値(天平尺 1 尺の長さを 29.60cm と暫定して基準にした。)

原データ 1 丈＝2.960 m (天平尺 10 尺) 1 丈(高麗法)＝3.70m (12.5 尺)

条里地割 1 歩(「高麗 5 尺」)＝1.85m (6.25 尺) 1 里＝666m (2250 尺)

総説 1 歩②＝1.8315m (6.1875 尺) 1 里②＝659.34m (2227.5 尺)

本文・巻末通度 1 歩③＝2.01465m (6.80625 尺) 1 里③＝604.395m (2041.875 尺)

#### 里程記事関係事項年表

(前漢) 長沙国図(長沙馬王堆 3 号墓より出土)

(西晋) 裴秀(223 - 271)「禹貢地域図序」において、製図六体を提示。

「分率・準望・道里・高下・方邪・迂直」

646 大化 2 年(改新の詔) 凡田長 30 歩、廣 12 歩為段、10 段為町。

段租稲 2 束 2 把。町租稲 22 束。

652 白雉 3 班田既。凡田長 30 歩、為段。10 段為町。(段租稲 1 束半。町租稲 15 束。)

681 (天武 10) 遣多羅嶋使人等、貢多羅国図。

683 (天武 12) 遣諸王五位伊勢王・大錦下羽田公八国・小錦下多中臣連大嶋、

判官・録史・工匠等、巡行天下、而限分諸国之境界。然是年、不堪限分。

684 (天武 13) 遣淨廣肆廣瀬王・小錦中大伴連安麻呂、及判官、録事、工匠等、於畿内、

令視占應都之地。是日、遣三野王・小錦下采女臣筑羅等於信濃、令看地形。

將都是地勢。

- 684 (天武 13) 三野王等、進信濃國図。  
701 大宝 1 (大宝令施行)  
凡度地、量銀銅穀、用大者。凡度地、5 尺為步。300 步為里。(雜令)  
凡田、長 30 步、廣 12 步、為段。10 段為町。段租稻 2 束 2 把。町租稻 22 束。(田令)  
凡諸道須置駅者。每 30 里置 1 駅。若地勢阻險、及無水草処、隨便安置。不限里數。  
702 大宝 2 始頒度量于天下諸國。  
706 慶雲 3 遣使七道、始定田租法。町 15 束。及点役丁。  
713 和銅 6 (慶雲 3 年 9 月 10 格) 宜(收)段租 1 束 5 把。町租 15 束。主者施行。  
始制度量・調庸・義倉等類 5 条事。語具別格。  
713 和銅 6 年 2 月 19 日格) 其度地、以 6 尺為步。→注 1  
713 頒下新格并權衡・度量於天下諸國。  
713 (風土記?撰進の命) 畿内七道諸國郡郷名、着好字。其郡内所生、銀銅彩色  
草木禽獸虫等物、具綠色目、及土地沃瘠、山川原野名  
号所由。又古老相伝旧聞異事、載于史籍言上。  
720 養老 4 頒尺樣于諸國。  
724 神龜 1 (出雲臣廣嶋神賀辞奏上) 出雲国造從七位下出雲臣廣嶋、奏神賀辞。  
733 天平 5 『出雲国風土記』完成  
734 天平 6 天平 6 年七道檢稅使算計法 (2700 寸・2800 寸・3200 寸、道別 3 様の穀科法)  
738 天平 10 令天下諸国造国郡国造。  
776 宝龜 7 宝龜 7 年畿内并七道檢稅使算計法 (穀科法 2800 寸)  
796 延曆 15 (再度国郡図の制作を命じる) 勅。諸国地圖事迹疎略。加以年序已久文字  
闕逸。宜更令作之。夫郡国郷邑駅道遠近、名山大川形態広狭、具録無漏長  
925 延長 3 (諸国に風土記本の搜索提出を命じる) →注 2  
927 延長 5 『延喜式』完成。凡度量權衡者、官私悉用大。但測畧景、合湯藥、則用小者。  
其度地以 6 尺為步。以外如令。  
(中世) 京間 (曲尺 6 尺 5 寸) が建物の間取り (建築モジュール) に用いられる。  
1594 文祿 3 島津領国内検地実施 (太閤検地)。「5 間・60 間、1 反事。但、あせ・井ミそ  
除之。」(1 間を 6 尺 3 寸と定める)  
1597 慶長 2 細川本『出雲国風土記』・細川幽斉の家臣が江戸内府御本を書写する。  
(近世) 享保検地では、曲尺 6 尺 1 分の間竿を用いる。300 步(坪)を 1 段とする。  
注 1 答。幡云。令 5 尺為步者、是高麗法用、為度地令便。而尺作長大、以 250 步為段者、  
亦是高麗術云之。即以高麗 5 尺、准今尺、大 6 尺相当。(令集解・田令 1 解説)  
注 2 太政官符 五畿七道諸国司 (類聚符宣抄)  
応早速勘進風土記事  
如聞、諸国可有風土記文。今被左大臣宣。宜仰国掌令勘進之。若無国底、探求部内、  
尋問古老、早速言上者。諸国承知。依宣行之。不得延廻。符倒奉行。  
参議左大弁從四位兼行讃岐権守源朝悦 外從五位下行左大史阿刀宿祢忠行  
延長三年十二月十四日

出雲国風土記

国之大体、首震尾坤、東南山、西北風海。東西一百三十七里二十九步。南北一百八十三里一百九十三步。

一百步

七十三里卅二步

得而難可誤

老細思枝葉、裁定詞源。亦山野濱浦之处、鳥獸之棲、魚貝海菜之類良繁多、悉不陳。然不獲止、粗举梗概、以成記趣。所以号出雲者、八束水臣津野命詔、八雲立、詔之。故云八雲立出雲。

合、神社 參百玖拾玖所。

老百捌拾肆所(在神祇官)

貳百老拾伍所(不在神祇官)

玖郡。 鄉 陸拾貳。(里二百八十一。) 余戶 肆。 馭家 陸。 神戶 漆。(里二十一。)

意宇郡。 鄉 老十老。(里三。) 余戶 壹。 馭家 參。 神戶 參。(里六。)

嶋根郡。 鄉 捌。(里廿四。) 余戶 壹。 馭家 壹。

秋鹿郡。 鄉 肆。(里二十二。) 神戶 壹。(里一。)

楯縫郡。 鄉 肆。(里二十二。) 余戶 壹。 神戶 壹。(里壹。)

出雲郡。 鄉 捌。(里廿三。) 神戶 壹。(里二。)

神門郡。 鄉 捌。(里廿二。) 余戶 壹。 馭家 貳。 神戶 壹。(里壹。)

飯石郡。 鄉 漆。(里一十九。)

仁多郡。 鄉 漆。(里一十二。)

大原郡。 鄉 捌。(里廿四。)

右件郷字者、依靈龜元年式、改里為郷。其郷名字者、被神龜三年民部省口宣改之。

(神道大系・古典編・風土記 田中卓校訂)

『卷末通度』

自国東堺、去西廿里一百八十步、至野城橋。長三丈七尺、廣二丈六尺。(飯梨河。) 又西廿一里、至国庁意宇郡家。北『1里 30步』<sup>注1</sup>十字街、即分為二道。(一正西道、一柱北道。)

柱北道、『自国庁意宇郡家』去北四里二百六十六步、至郡北堺朝酌渡。(渡八十步、渡船一。)<sup>注2</sup>又北一十里一百卅步、至島根郡家。自郡家去北一十七里一百八十步、至隱岐渡、千酌馭家濱。(渡船。) 又自郡家西一十五里八十步、至郡西堺佐太橋。長三丈、廣一丈。(佐太川。) 又西八里二百步、至秋鹿郡家。又自郡家西一十五里一百步、至郡西堺。又西八里二百六十四步、至楯縫郡家。又自郡家西七里一百六十步、至郡西堺。又西一十里二百廿步、至出雲郡家東邊、即入正西道也。惣柱北道程、九十九里一百十步之中、隱岐道一十七里一百八十步。

正西道、自十字街西一十二里、至野代橋。長六丈、廣一丈五尺。又西七里、至玉造街。即分為二道。(一正西道、一正南道。)

正南道、一十四里二百一十步、至郡南西堺。又南廿三里八十五步、至大原郡家、即分為二道。(一南西道、一東南道。)

南西道、五十七歩、至斐伊河。(渡廿五歩、渡船一。)又南西二十九里一百八十歩、至飯石郡家。又自郡家南八十里、至国南西堺。(通備後国三次郡。)惣去国程、一百六十六里二百五十七歩也。

東南道、自郡家去廿三里一百八十二歩、至郡東南堺。又東南一十六里二百卅六歩、至仁多郡比比理村、分為二道。一道、東八里一百廿一步、至仁多郡家。一道、南卅八里一百廿一步、『備後国堺遊託山。』

正西道、自玉造街西九里、至來待橋。長八丈、廣一丈三尺。

注3 『又西一十三里、至郡西堺。』

又西廿三里卅四歩、至『出雲郡家東邊、即合枉北道、為一道。』

注4 『又西卅歩、至出雲郡家。』

又自郡家西二里六十歩、至郡西堺出雲河。(渡五十歩、渡船一。)又西七里廿五歩、至神門郡家。即有河。(渡廿五歩、渡船一。)自郡家西三十三里、至国西堺。(通石見国安農郡。)惣去国程、一百六里二百卅四歩。

自国東堺、去西廿里一百八十歩、至野城駅。又西廿一里、至黒田駅。即分為二道。(一正西道、一渡隱岐国道也。)隱岐道、去北卅四里一百卅歩、至隱岐渡千酌駅。又正西道、卅八里『卅歩』、至宍道駅。又西卅六里二百廿四歩、至狹結駅。又西一十九里、至多岐駅。又西一十四里、至国西堺。

意宇軍団、即属郡家。／熊谷軍団、飯石郡家東北廿九里老百八十歩。／神門軍団、郡家正東七里。／馬見烽、出雲郡家西北卅二里二百卅歩。／土椋烽、神門郡家東南一十四里。／多夫志烽、出雲郡家西北一十三里卅歩。／不自枳美烽、嶋根郡家正南七里二百一十歩。／暑垣烽、意宇郡家正東廿里八十歩。／宅伎成、神門郡家正南卅一里。／瀬崎成、嶋根郡家東北一十九里一百八十歩。

天平五年二月三十日勘造、秋鹿郡人神宅臣金太理  
国造帯意宇郡大領外正六位上勲十二等出雲臣廣嶋

(細川本を底本にした。程の脱失及び誤写が疑われるところを、積極的に補訂した。)

注1 総説『東西』『南北』の算出の際移項される数は、『1里030歩』である。

注2 駅案内「隱岐道、去北 四里一百四十歩、至隱岐渡千酌駅。」の内訳は、嶋根郡記「通意宇郡堺朝酌渡一十一里二百廿歩之中、海八十歩。」に基づいている。ここで「去北一十里一百卅歩」は、朝酌渡と『佐太橋』との地図上の位置関係(方位)を純粹に表現しただけのことであり、特別に駅道なるものがあるとは信じ難い。

注3 細川本「至來待橋長八丈廣一丈三尺又西廿三里卅四歩至郡西堺出雲河(渡五十歩、船一)又自郡家西二里六十歩至郡西堺出雲河(渡五十歩、船一)」

「廿三里卅四歩」の始点は「來待橋」であるとされてきたが、郡堺を程の区切りとする通道記事の常例に素直に従い、意宇・出雲郡堺を始点と考えるのがよいと思う。脱文(來待橋く意宇郡西堺)の可能性が非常に高いと考えて、これを復元した。

意宇郡記「通出雲郡堺佐雜崎卅二里卅歩」から、『1里030歩』(国庁意宇郡家く十

字街)と二八里(十字街)来待橋)の合計二九里〇三〇歩を引いた一三里が、来待橋から意宇郡西堺までの程である。

注4 この区間(意宇郡西堺)出雲郡家東辺(出雲郡家)に相当する出雲郡記通道記事は、諸本とも「通道・通意宇郡堺佐雜村一十三里六十四歩」である。私は、一三里〇六四歩を正数とする。

注5 細川本「惣去国程一百六里二百歩卅四歩」田中卓氏(神道大系本)は、馭道案内に基づいて「但し、実数八九七里二九歩ヲ是トスル如シ。」と注する。

注6 諸本とも「又西廿六里二百廿九歩至狭結駅」であるが、三六里二二四歩を正数として訂正した。「至安道駅」にも『卅歩』を補足したので、黒田駅即ち国庁意宇郡家十字街(国西堺)の通道程は、一〇七里二五四歩が正しいという見解になる。

備考 正西道「惣去国程一百六里二百卅四歩」の信憑性。

私が信奉する「惣去国程一百六里二百卅四歩」という記事は、従来の解釈においては、不当な扱いを受けてきた。これには、正西道における二三里相当の脱文(注3)の認否と、十字街の位置づけという問題がある。私に言わせれば、田中氏いうところの「実数・九七里二二九歩」こそ信憑性のないものである。ただこの側面で決着を付けようとするれば、煩雑な議論になるので、深入りを避け、つぎに述べる別の側面で解決をはかりたい。

(国東堺)国庁意宇郡家)四一里一八〇歩と、正西道「惣去国程一百六里二百卅四歩」との、合計一四八里二四歩は、総説「東西一百三十七里一十九歩」を一一里余りも上回る。このことも、従来の解釈において「二百六里二百卅四歩」の認知を拒否する理由に挙げられている。私は、里歩単位の換算を介してこれらの数値は整合していることを証明することで、「二百六里二百卅四歩」が正嫡なることを明らかにしたい。

国庁・意宇郡家周辺の名所(意宇郡記より抜粋)

○所以号意宇者、国引 八束水臣津野命詔、八雲立出雲国者、狭布之稚国在哉。初国小所作。故將作縫。……中略……今者国者引訖。詔而、意宇杜爾、御杖衝立而、意恵、登詔。(所謂意宇杜者、郡家東北邊田中在塾、是也。困八歩許、其上有木以茂。)⑧

○大草郷、郡家南西二里一百廿歩。須佐乎命御子、青幡佐久佐日古命坐。故云大草。

○山代郷、郡家西北三里一百廿歩。所造天下大神大穴持命御子、山代日子命坐。故云山代也。即有正倉。⑤

○黒田駅、郡家同处。郡家西北二里有黒田村。土体色黒。故云黒田。旧此处有是駅。即号曰黒田駅。今東属郡。今猶追旧黒田号耳。①

○出雲神戸、郡家南西二里廿歩。伊佐奈枳乃麻奈子坐、熊野加武呂乃命、與五百津鉦、猶所取、而所造天下大穴持命二所大神等依奉。故云神戸。(他郡等神戸、且如之。)

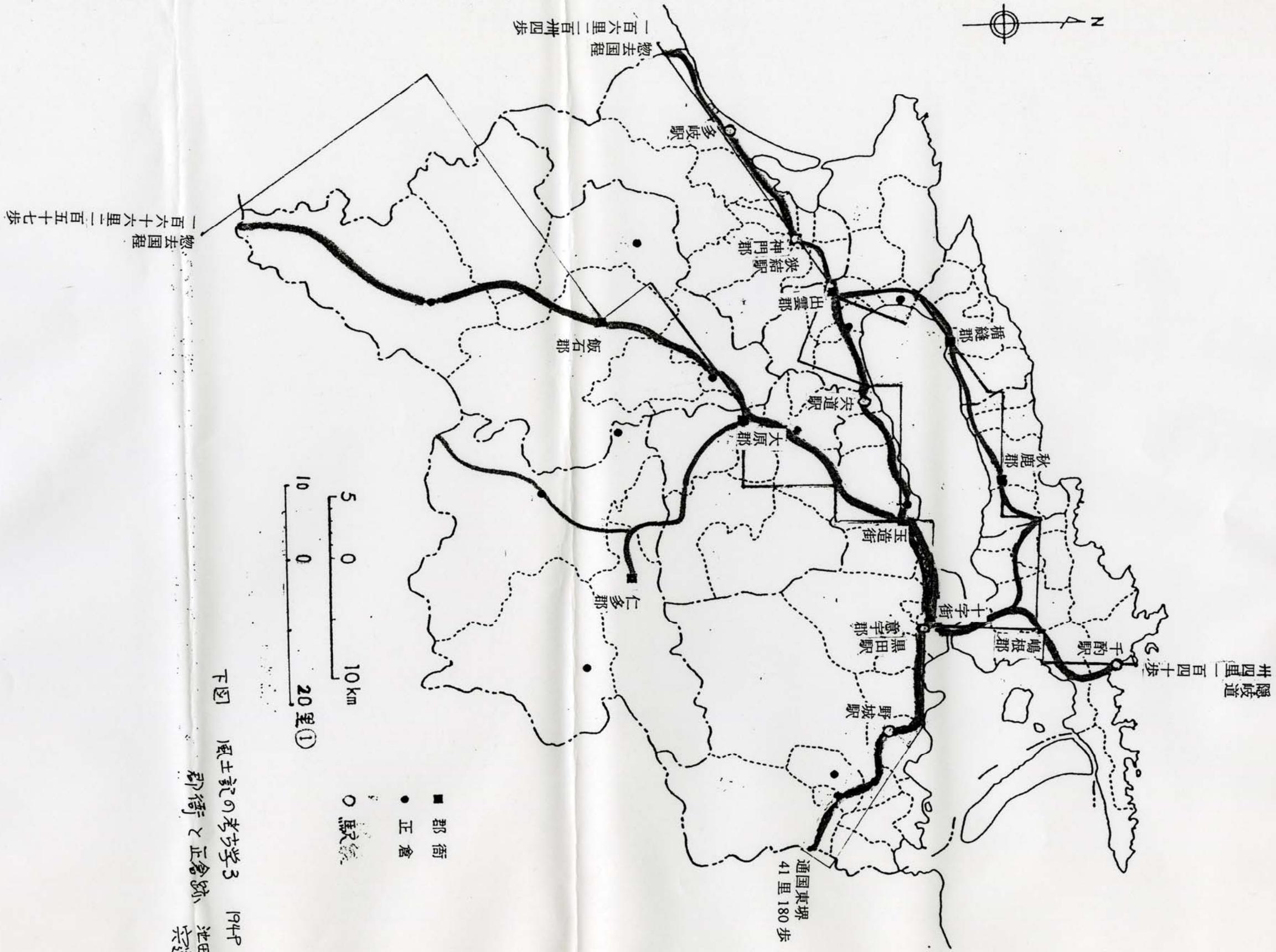
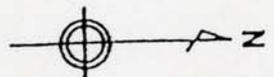
○新造院一所、在山代郷中。郡家西北四里二百歩。建立嚴堂也。(無僧。)日置君目烈之所造也。(出雲神戸日置君猪麻呂之祖也。)⑦

○新造院一所、在山代郷中。郡家西北二里。建立嚴堂。(住僧一軀。)飯石郡少領出雲臣弟山所造也。⑥

○神名樋野、郡家西北三里一百廿九歩。高八十丈、周六里卅二歩。(東有松。三方埤有茅。)

○通嶋根郡堺朝酌渡四里二百六十歩。

○前件一郡、入海之南。是則国廓也。



下図 風土記の考古学3 1944P 池田滿雄 宗道年弘  
 郡衙と正倉跡

隱岐道 卅四里一百四十步

通国東堺 41里180步

惣去国程 166里200步

惣去国程 166里257步

1/18,000

方格(里)縦横 666 m  
(2250 x 0.296m)

総説 1里 = 659.34 m  
本文表末通夜 1里 = 604.395 m 178

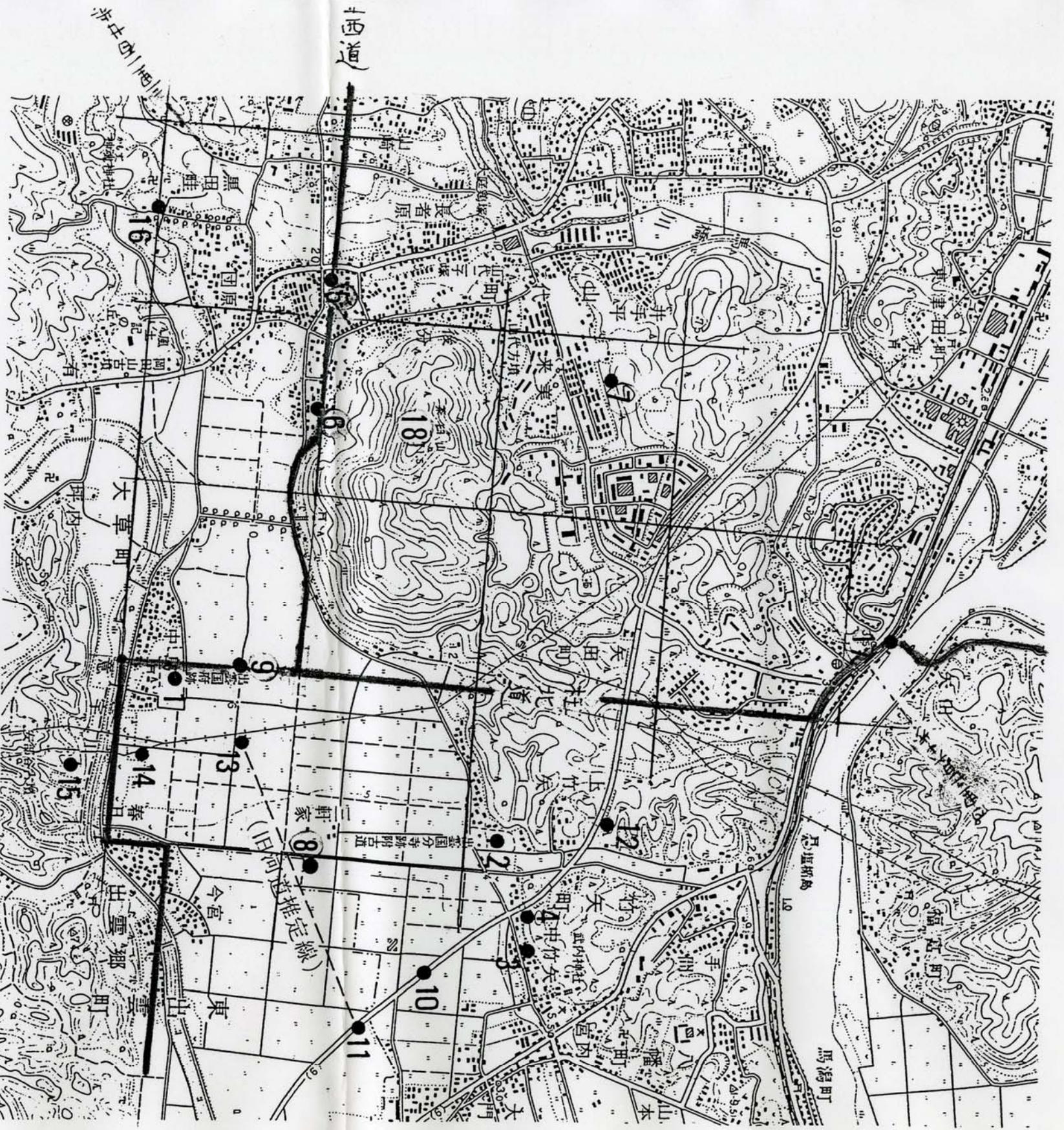
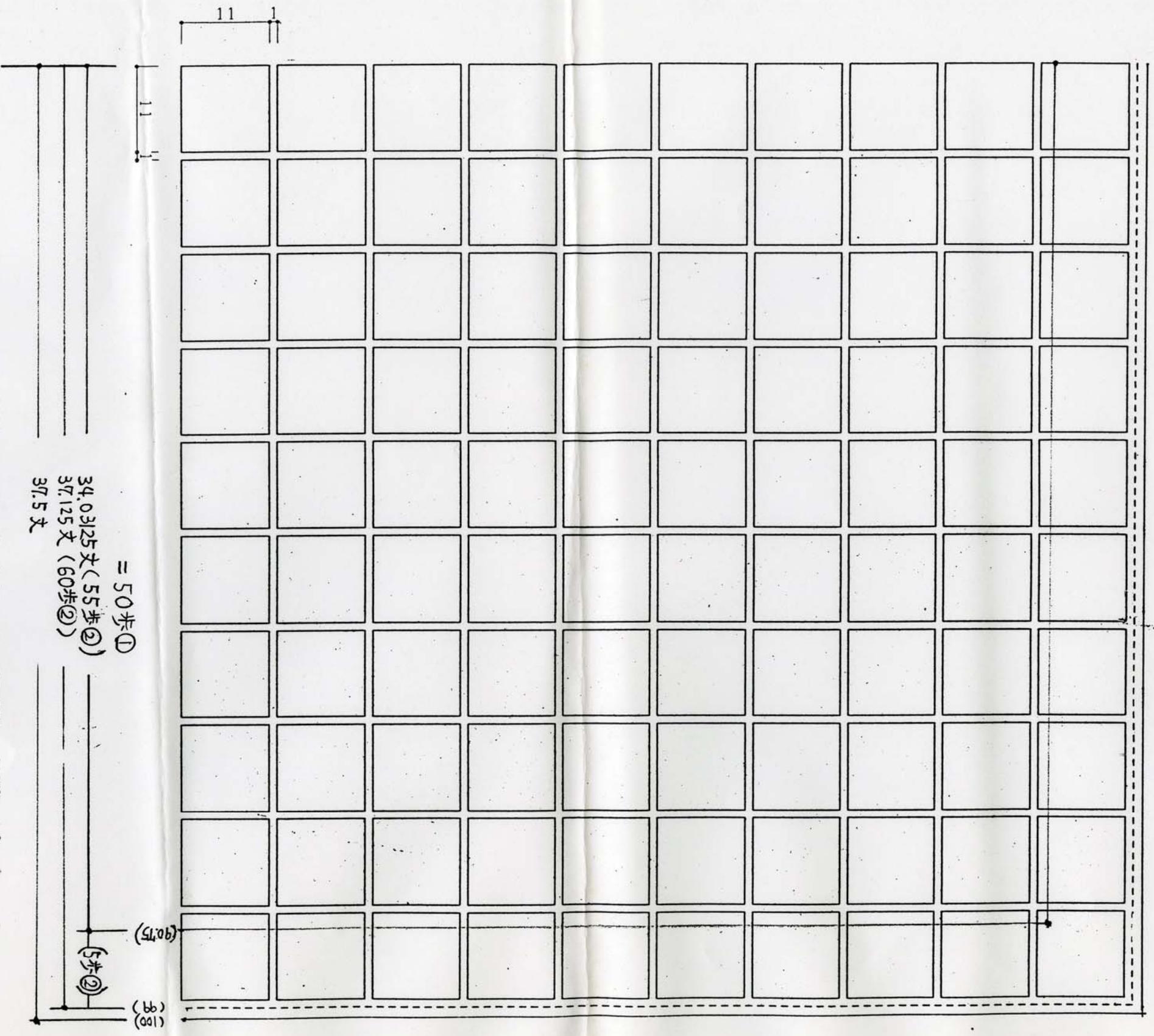


図1 出雲国府跡と周辺の遺跡分布図 (風土記の考古学 178p 出雲国府と周辺の遺跡 松江歴史)

- 1. 出雲国府跡 2. 出雲国分寺跡 3. 出雲国分尼寺跡 4. 国分寺瓦窯跡
- ⑤ 出雲国山代郷正倉跡 ⑥ 山代郷南新造院 (四王寺) ⑦ 山代郷北新造院 (来美廃寺)
- ⑧ 意字の杜 ⑨ 十字街 10. 布田遺跡 11. 夫敷遺跡 12. 才ノ峠遺跡
- 13. 神田遺跡 14. 大屋敷遺跡 15. 天満谷遺跡 16. 出雲国造館跡
- ⑰ 矢田の渡し (現在) ⑱ 神奈備山 (茶臼山) 171.5m

水田計画図(田1町)



1畝

## 《はじめに》

『出雲国風土記』冒頭(総説)に記された「国之大体、(首震尾坤、東南山、西北属海。)東西 137 里 019 歩。南北 183 里 193 歩。」という里程数値は、同書の本文・巻末通度の記事から集計されるものと一致しない。これについては、すでにいくつかの解決策が提示されてきたが、これらは私が納得できるものではなかった。私独自に考えた結果、以下のような見解をみるに至ったので、報告する次第です。これに歴史的な価値があるか否かを判別していただければ幸いです。

(テキストには「神道大系『風土記』田中卓 校訂」を用いた。)

## 《「東西」「南北」と巻末通度記事との照合》

( 図 1 )

## 総説「出雲国風土記

国之大体、首震尾坤、東南山、西北属海。東西 137 里 019 歩。南北 183 里 193 歩。」

(東西) 137 里 019 歩  
+ (南北) 183 里 193 歩  
= 320 里 212 歩

『1 里=300 歩』法の場合、96,212 歩 ①

『1 里=360 歩』法の場合、115,412 歩 ②

巻末通度(「1 里=300 歩」法)において、{(東西) + (南北)} に相当するものを構成する要素(部分)となる里程記事を選定する。

「自東堺去西 20 里 180 歩、至野城駅。又西 21 里、至黒田駅。」 E 41 里 180 歩  
(「即分為二道。(一正西道、一渡隠岐国道也。))」  
「隠岐道、去北 34 里 140 歩、至隠岐渡、千酌駅。」 N 34 里 140 歩  
- 以上、駅路案内 -

(「正西道、自十字街」～「至玉造街。即分為二道。(一正西道、一西南道。))」「正南道」  
～「南西道」「至国南西堺。(通備後国三次郡。))」

「惣去国程、166 里 257 歩也。」 S 166 里 257 歩  
(「正西道、自十字街」～「玉造街」～「至国西堺。(通石見国安農郡。))」  
「惣去国程、106 里 244 歩。」 W 106 里 244 歩  
- 以上、通道案内 -

E + N + S + W = 349 里 221 歩

(1 里 = 300 歩、104,921 歩) ③

この数値③は、{(東西) + (南北)} 320 里 212 歩 (96,212 歩) ① とは合致していない。したがって、① は、③の相手として、適当ではないと判断される。

この数値③は、また、{(東西) + (南北)} 320 里 212 歩 (115,412 歩) ② と合致していない。しかし、この場合は、「1 里=360 歩」法における「歩」単位の大きさが、巻末通度の「1 里=300 歩」法のそれとは相違するという可能性が留保されているので、② が③の相手として適当か否かの判断はまだできない。

そこで、②と③との数的関係を調べてみよう。

## 《「東西」「南北」計算経過の復元案》

全体では、つぎのような関係がみられる。

② 115,412 歩 = {(11/10) \* 104,910} 歩 + 11 歩、

③ 104,921 歩 = {104,910} 歩 + 11 歩、

式②は、「東西」と「南北」について、分配することができる。

② 115,412 歩 = (東西) <{(11/10) \* 44,850} + 4> 歩  
+ (南北) <{(11/10) \* 60,060} + 7> 歩、

これによって、式③を、「東西」相当分と「南北」相当分とに、分配する。

③ 104,921 歩 = E + N + S + W  
= {(E 12,480 歩 + W 32,044 歩) + 330 歩} + {(N 10,340 歩 + S 50,057 歩) - 330 歩}、  
= {(E ~ W) 44,524 歩 + 330 歩} + {(N ~ S) 60,397 歩 - 330 歩}  
= {44,854 歩} + {60,067 歩}、  
= <{44,850 歩} + 4 歩> + <{60,060 歩} + 7 歩>、

この結果、「東西 137 里 019 歩」および「南北 183 里 193 歩」の算出経過はつぎのように推定される。

(E 41 里 180 歩 + W 106 里 244 歩) + J 1 里 030 歩 = 149 里 154 歩 = 44,854 歩③

→

{(11/10) \* 44,850} 歩 + 4 歩 = (東西) 49,339 歩② = 「東西 137 里 019 歩」、

(N 34 里 140 歩 + S 166 里 257 歩) - J 1 里 030 歩 = 200 里 067 歩 = 60,067 歩③

→

{(11/10) \* 60,060} 歩 + 7 歩 = (南北) 66,073 歩② = 「南北 183 里 193 歩」、

したがって、『11 歩② = 10 歩③』という換算関係において、② は、③ の相手として、適当である、と判断される。

## 《2つの問題点》

「東西」および「南北」の算出経過を、私はこのように推定した。この推定には2つの

問題点がある。ひとつは、

『③ 10「歩」が、② 11「歩」になる。』という換算率の歴史的根拠。  
である。もうひとつは、

『1里 030歩 (330歩) ③』が移転される理由。  
である。

前者については簡単に説明しがたいので後回しにして、後者から先にとりあげたい。

◆ 『1里 030歩 (330歩) ③』が移転される理由。 ( 2 ) ( 3 )

駅路案内における「黒田駅」での接続と、通道案内でこれに相当する部分を対照する。  
( 2 )

(通道案内)

自国東堺……、又西 21 里、至国庁意宇郡家北十字街、即分為二道。(一正西道、一北道。)

北道、去北 4 里 266 歩、至郡北界朝酌渡。(渡 80 歩、渡船一。)……

正西道、自十字街西 12 里、至野代橋。長 6 丈、廣 1 丈 5 尺。又西 7 里、至玉造街。  
即分為二道。(一正西道、一正南道。)……

(駅路案内)

自東堺去西 20 里 180 歩、至野城駅。又西 21 里、至黒田駅。即分為二道。(一正西道、一渡隱岐国道也。) 隱岐道、去北 34 里 140 歩、至隱岐渡、千酌駅。又正西道、38 里、至宍道駅。……

ただし、「又西 21 里、至国庁意宇郡家北十字街、即分為二道。(一正西道、一 枉北道。)」には、句読点の置き方にやや問題があると、私は感じている。「又西 21 里、至国庁・意宇郡家。北十字街、即分為二道。(一正西道、一 枉北道。)」と改めた上で、論を進める。

まず、通道案内における 2 つの「惣去国程」の始点がどこであるかを考えてみると、「正西道、自十字街西 12 里、至野代橋。」という記述からして、「十字街」とであると断定してよい。他方、「枉北道」の始点は「国庁意宇郡家」と考えられる。駅路案内における「隱岐道」も同様である。さかのぼって、通道案内における「野城橋」から「去西 21 里」の至点はどこかという「国庁・意宇郡家」と考えられる。「去西 21 里」の至点は万が一にも「十字街」ではありえない。これが私の譲れぬ信念であって、それ故に句読点にけちをつけたのである。なお、黒田駅は「郡家同処」にある(意宇郡)。

以上の見解を視覚的に表現すると、図(1)ようになる。

「東西」「南北」の計算についていえば、「黒田駅」と「十字街」とはある程度の距離をへだてているので、『E + W』にその距離を加える(「東西」)、あるいは、『N + S』からその距離を差し引く(「南北」)、という操作が必要である。

『1里 030歩 (330歩) ③』が移転される理由については、とりあえず以上のように説明しておく。ただし、「十字街」が「国庁・意宇郡家」の北『1里 030歩 (330歩) ③』のところに必ず存在する、という主張をしているつもりは無いことを念のために述べておく。

それでもなお、「十字街」の实在位置については気にかかるのであるが、そのことよりも、「十字街」と「国庁・意宇郡家」「黒田駅」とが別個の位置にあるという理解に、考古学的な知見を借りず、テキスト読解そのものを通して、到達するところに意義があると考えているわけである。

◆ 『③ 10「歩」が、② 11「歩」になる。』という換算率の歴史的根拠。

この問題にまともに答えようとするればおおごとになるので、ここでは手近なところで決着をつけてみたい。② の『1里=360歩』法は、いわゆる『条里地割』の 1 里辺長 (360歩) に相当する里歩法である。そうすると、③ の『1里=300歩』法は、直接には『条里地割』に適合しないということになる。したがって、とりあえず、② の 1 里については、640m ほどの長さであるというように把握してみてもよいだろう。

(『坪』ブロックを 6 行 6 列並べたものが『里』ブロックであり、1『里』ブロックの 1 辺は、 $360 * 6 \text{尺} = 2,160 \text{尺}$ 、が基本である。天平尺を 29.6cm として、 $360 * 6 * 29.6 \text{cm} = 639.36 \text{m}$ 、と計算される。)

しかし、天平 5 年当時、出雲国においてどのような『条里地割』が行われていたのかは不明である。② の『1歩=360歩』法といえども、当時の『条里地割』には適合しなかったのではないか？ それが一歩の証拠に、② の『1里=360歩』法は、総説「東西」「南北」に封じ込められているのではないか。だからといって、『1里=300歩』法が適合する『条里地割』として、1 里辺長が、 $300 * (11/10) * 6 * 29.6 \text{cm} = 586.08 \text{m}$ 、というようなものを想像するのも気が重い。

そこでつぎのように考えてみたい。

1『里』ブロックの 1 辺が、 $363 * 6 \text{尺} = 2178 \text{尺}$ 、になるような『条里地割』であれば、

1『里』 = 363 歩② = 1 里 003 歩②。または、1『里』 = 330 歩③ = 1 里 030 歩③。

というように、②と③のどちらでも 1『里』の長さを整数的に表現することができる。私が、1『里』 = 330 歩③ = 1 里 030 歩③、というものを希望するのは、「東西」「南北」の計算で移転した『330歩③』と同じ長さであるからである。ほんとうは、『条里地割』の 1『里』を移転したのではないか、という想像に魅力を感じている。

なお、②と③という 2 つがある歩単位の尺度は、とりあえずひとつで足りる。

1歩② = 6 尺。 1歩③ = 6 尺 6 寸。

このような理解の類例には(時代が違うが)、「京間 1 間 = 曲尺 6 尺 5 寸」がある。

この一元的な尺度のもととなる「ものさし」としては、「天平尺」が最も適当であると思われる。つまり、「1歩②」が基本的なもので、「1歩③」は実際の必要から派生したものと位置づけられる。

しかし、2 つの歩単位の関係が一元的な尺度で整序される以前というものがあるとすれば、そこにおいて、このへんの塩梅がどうであったかは、よくわからない。あるいは、「1歩③」が「それ固有のものさし」により、例えば「10 尺」のように整数的に計られていたのかもしれない。なお「尺」ということがらに触れた責任上言及するが、「それ固有のものさし」とは、「出雲国風土記(本文・卷末通度)」の丈尺記事における「丈」「尺」をも規定するものである。というように腑分けするのが自然な成り行きであると思う。「令尺」というものに遠慮はあるのだが、山高記事と標高との比較から私の見たところでは、

「出雲国風土記」の「丈」「尺」は「令小尺(約25cm)」では長すぎるという印象を受ける。  
要するに、

「1歩③」は、「天平尺」で6尺6寸に相当するが、本来的には、出雲国風土記の本文・巻末通度における固有の『尺』により整数的に規定されている可能性がある。この点を追求する必要がある。

という現在の私の見解である。

#### 《私見解の「PR」》

2つの問題点の解決という課題は、納得できるところまで果たされていないが、そのことが、「東西」「南北」の計算にみられる整数的換算関係を『偶然』のものとして、無意味ならしめるものではない。この計算は、

簡単な数字による整数的換算関係に則っていること。

計算全体がやや複雑な構造をしているなかで、計算が規則正しくおこなわれていて、ごまかしがないこと。

古写本に存在する数値に手を加えていないこと。

という3点においては確かなものである。

#### 《終わりに》

『1里=360歩』法は、条里地割において合理的な里歩法であるが、日本の歴史資料においてその確実な使用例は、私の知る限り、皆無である。大宝令(雑令)には「凡度地、5尺為歩。300歩為里。(「5尺」は実際には令大6尺)」と定められているので、それからすれば異例になるわけである。このことはどうにもならないので弁解しない。ただし、当時の東北アジア世界においては、唐制の「5尺為歩。360歩為里。」が国際標準であったと考えられるので、『1里=360歩』という形式が日本にあっても怪しむに足りない。

私の見解は、結果として、1里(300歩)③ = 300 \* (11/10) \* 1.80m = 594m、ほどのものを、『出雲国風土記』の本文・巻末通度に、押し売りすることになる。従来手堅いものと考えられてきた約540mほどの1里を「方位里程記事」に入れた場合に、考古学的に確認された「名所」間の直線距離にも満たないことが多くあるのが実情であり、約1.8mの1歩(=6尺)は、何寸かはともかくとして『寸足らず』になっていると考えざるをえない。その意味では、「1歩③=6尺6寸」という私の見解は『寸足らず』を解消する方向に沿うものといえる。

もっとも、このような言い訳に多言を弄するのは本意ではない。2つの里歩法の共存というこの現象が歴史的事実であれば、古代尺度についての近代的常識のいくつかは廃棄され、その跡に新しい古代尺度の理念が描かれるだろう。同じことを「出雲国風土記」に即して言えば、方位里程記事の厳密な読解を通して「出雲国図」を髣髴する全体像が再現されるのではないかとひそかに期待している。

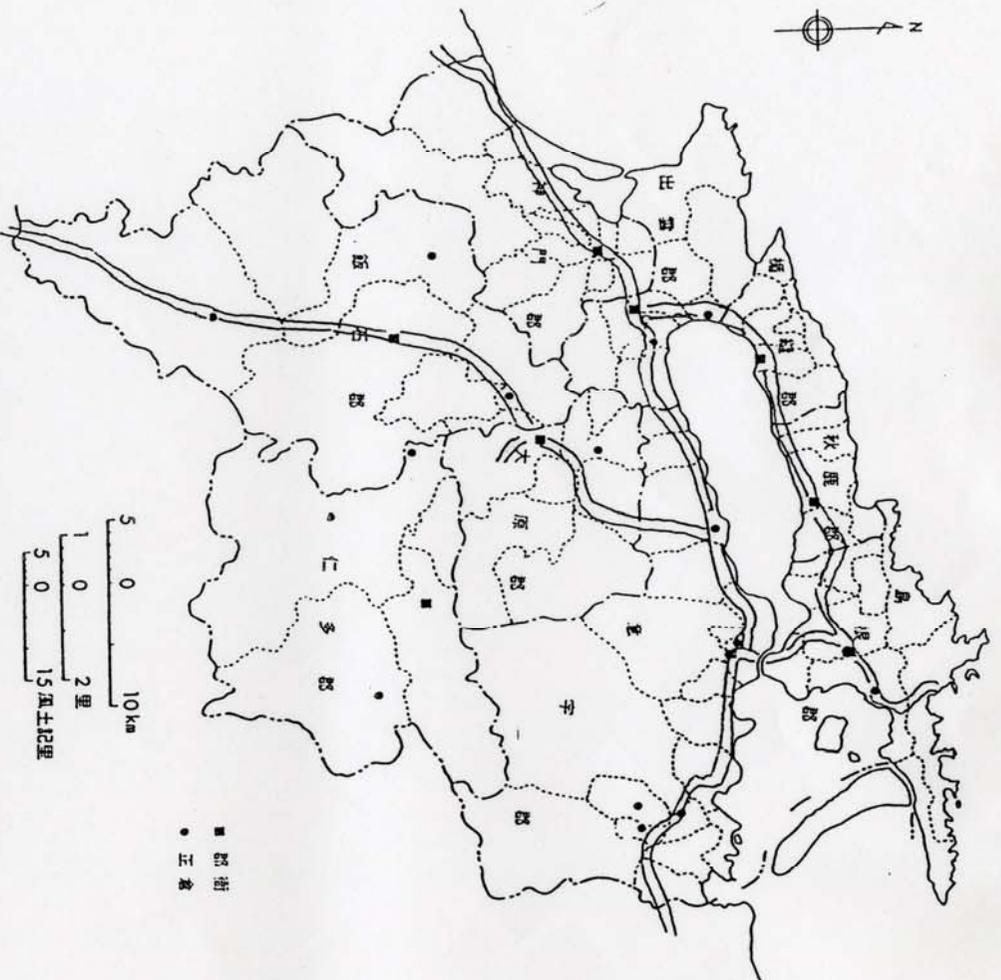
砥神嶋、高60丈、周3里180歩。(意宇郡)十神山 標高113.7m. 安来市  
神名槌野、高80丈、周6里032歩。(同)茶白山 標高171.5m. 松江市  
布自美高山、高270丈、周10里。(島根郡)嵩山 標高331.0m. 松江市

神名火山\*、高230丈、周14里。(秋鹿郡)佐太神社の裏山 120m. 松江市  
足日山、高170丈、周10里200歩。(同)朝日山 標高341.8m. 松江市  
女心高野、高180丈、周6里。(同)本宮山 標高279.4m. 松江市  
都勢野、高110丈、周5里。(同)十膳山 標高193.6m. 平田市  
神名槌山、高120丈5尺、周21里180歩。大船山 標高327.2m. 平田市  
(楯縫郡)

神名火山、高175丈、周15里060歩。(出雲郡)仏経山 標高366.0m. 斐川町  
出雲御崎山、高360丈、周9里165歩。(出雲郡)鼻高山 標高536.5m. 出雲市  
琴引山、高300丈、周11里。(飯石郡)琴引山 標高1013.6m. 頓原町  
石穴山、高50丈。(飯石郡)不明  
菅火野、高125丈、周10里。(仁多郡)城山 標高576.1m. 仁多町  
高麻山、高100丈、周5里。(大原郡)岩根山 標高198.2m. 大東町

(\* 倉本・細本作「高40丈」)

(図1)



風土記の考古学  
出雲国風土記の巻

図1 『出雲国風土記』にみえる郡衙と正倉の推定地 (註2補正)  
1 山国郷 2 舎人郷 3 山代郷 4 拝志郷 5 賀茂神戸 6 手染郷 7 漆治郷 8 美談郷 9 三屋郷 10 須佐郷 11 来島郷 12 三沢郷 13 横田郷 14 漆仁川辺 15 屋代郷

(図2)

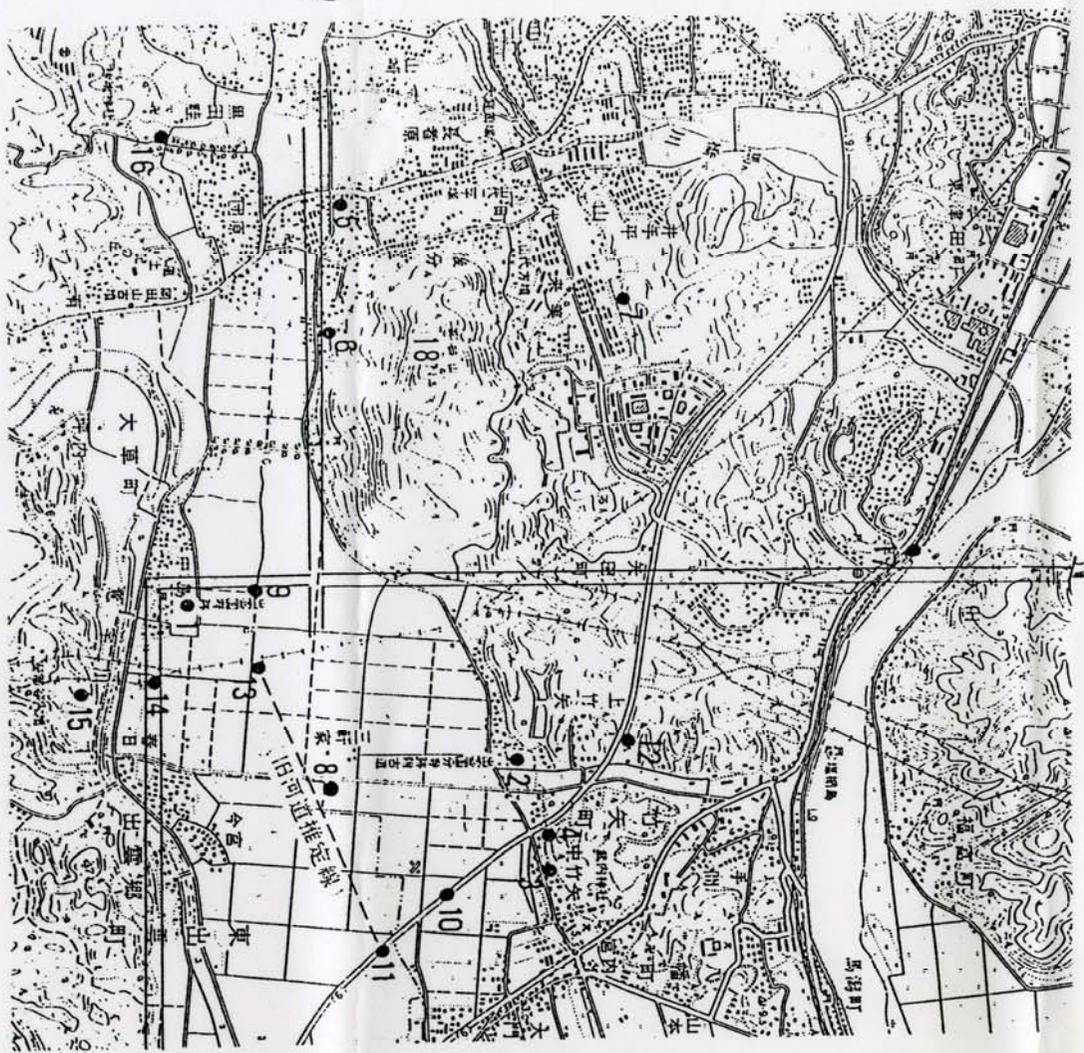


図1 出雲国府跡と周辺の遺跡分布図  
1. 出雲国府跡 2. 出雲国分寺跡 3. 出雲国分尼寺跡 4. 国分寺瓦窯跡  
5. 出雲国山代郷正倉跡 6. 山代郷南新道院(四王寺) 7. 山代郷北新道院(来美庵寺)  
8. 意宇の杜 9. 十字街 10. 布田遺跡 11. 夫敷遺跡 12. 才ノ峠遺跡  
13. 神田遺跡 14. 大屋敷遺跡 15. 天満谷遺跡 16. 出雲国造館跡  
17. 矢田の渡し(現在) 18. 神奈備山(茶臼山)

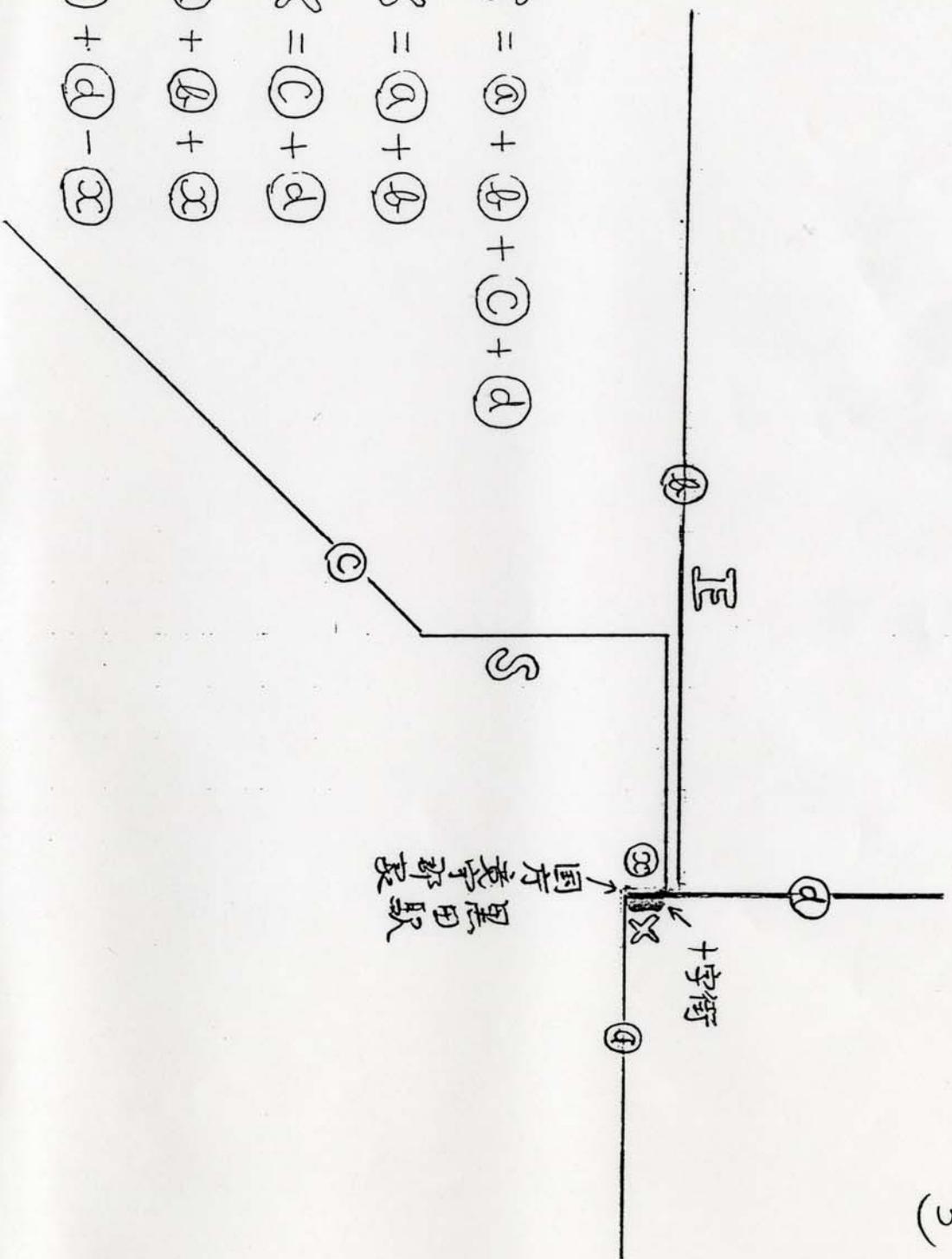
(図2)

出雲国

風土記の考古学  
出雲国風土記の巻

又西二十一里、至国方意宇郡家。  
北、十字街、即分為二道、一正西道、

(22) 3



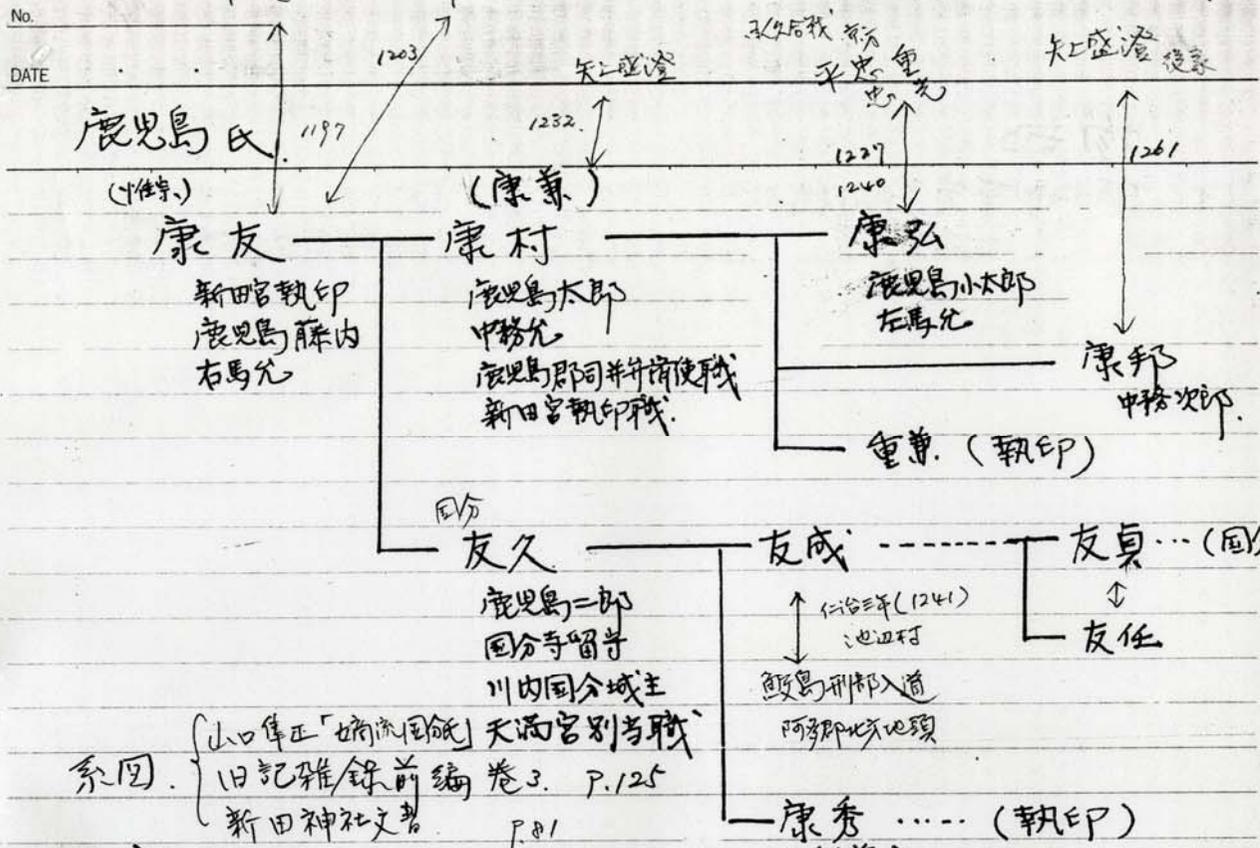
$$E + S = a + b + c + d$$

$$E - X = a + b$$

$$S + X = c + d$$

$$E = a + b + c$$

$$S = c + d - c$$



(3) 康弘

- (水引執印文書)  
薩摩國御家人鹿見島小太郎康弘申御郡司職事。訴狀遣之。如狀者。論人忠重・忠光等。承久合戰之時。為京方云々。……  
嘉祿三年十二月廿四日。 卷4. P.157
- 薩摩國御家人鹿見島小太郎康弘申。御郡司職越訴事。申狀其書如此。尋究子細。可被申沙汰使。謹言  
仁治元年七月三日。 泰時在御判 卷4. P.175

(4) 康邦

- (水引執印文書)  
薩摩國御家人中務次郎康邦与矢上左衛門尉盛澄後家相論。鹿見島郡司職并并濟使兩職事。散狀披見了。此事去二月中。可召進彼後家之由。被下關東御教書之間。相觸之處。于今不参之条。太自由也。……  
弘長元年四月五日 建仁二年 (No.189) 卷6. P.242  
他 同月七月 (No.634) 同月十二月 (No.664) 弘長三年九月 (No.665) 等。

(5) 時期未確認文書。

- 嶋津庄内鹿見島郡司并并濟使兩職事。康友与忠重召問兩方。任文書理。可沙汰付之由。先日令下知之處。件忠重不得裁許。令逃脱庄内之上。剩私用御米之条。罪即不輕之由。……  
卷6. P.248

(1) 藤内康友 藤原内舍人?

- 頼朝判  
薩摩國かこし子の藤内康友ハ。奥州へ御共して給暇。所令帰国也。かこし子の郡司職もとの知行さのみなすし申。可存其旨。依仰旨如此。仍執運如件。  
文治五年十一月廿四日。  
伊豆藤内殿 (天野遠景)  
(刑) 盛時奉  
旧記雜録前編 卷2. P.74
- 薩摩國牛屎院之内  
木崎十五町 名主前内舍人康友  
同国鹿見島郡之内 (據上即本社有地頭云々) 下司前内舍人康友 (地頭右衛門兵衛尉殿)  
府領社七町五段 (則此下必脱此字) 郡司前内舍人康友 (地頭右衛門兵衛尉殿)  
合二百四町五反 公領百九十七町 (島津御庄等即脱) (但不即司平忠純)  
建久八年 薩摩國同田帳

- 在御判  
藤内康友訴申。嶋津庄内鹿見島郡司并并濟使職事。……  
建仁三年十二月九日。 旧記雜録前編 卷3. P.101
- いよせめいにくさにもいせ給候へきよし事  
(承久三年辛巳) 七月廿日。 藤原在判

(2) 康村 (康友子。又康兼)

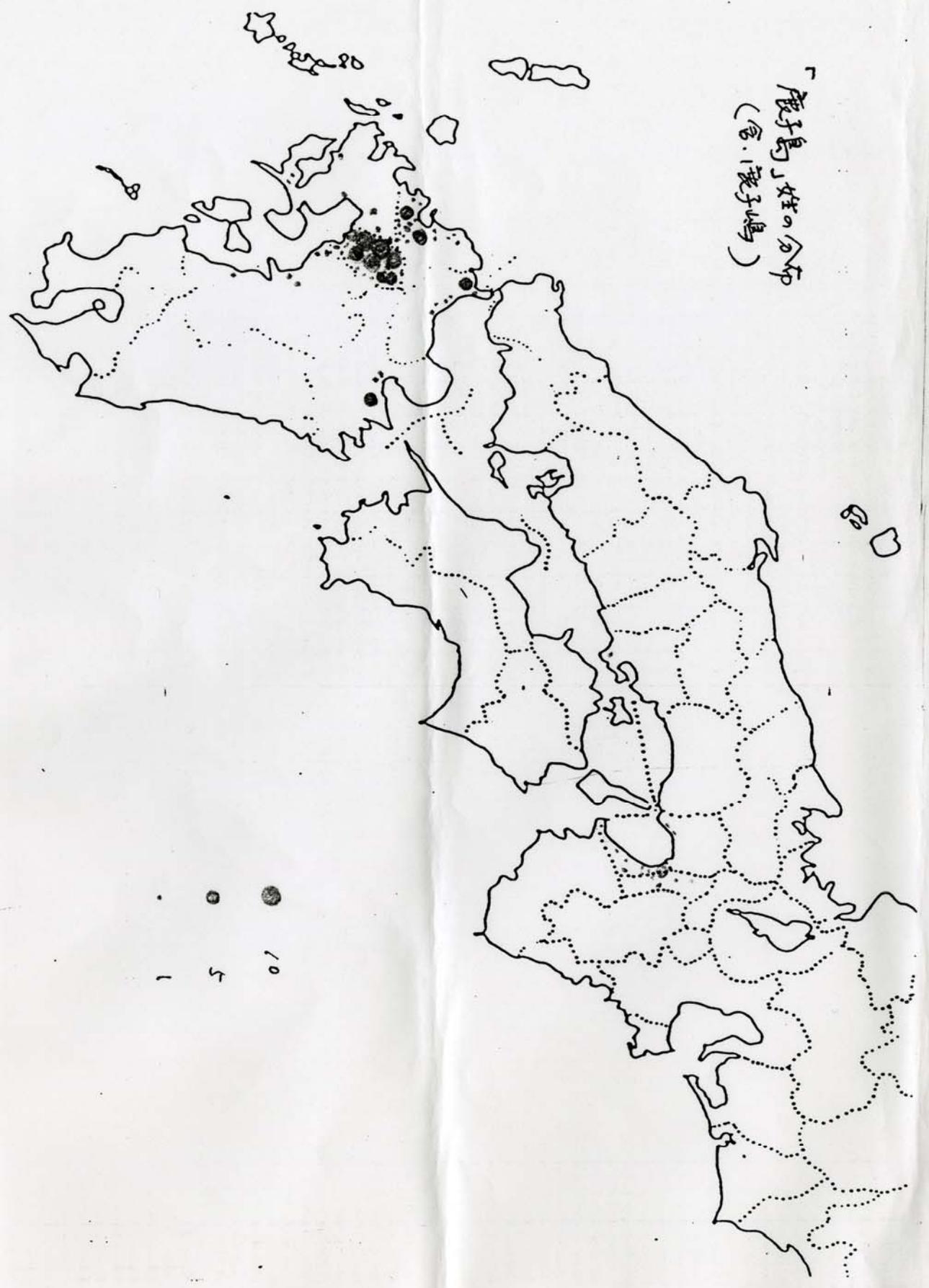
- 鹿見島中務丞康兼訴狀如此。郡司職事。為対決。可被召進矢上三郎盛澄之状。依仰執運如件。  
貞永元年閏九月八日 卷4. P.162
- (水引執印文書)  
薩摩國御家人中務丞康兼申鹿見島郡司職事。矢上三郎盛澄文令披露畢。而康兼訴狀如此。盛澄参之条。何様事哉。康兼令参向之時。盛澄可参会也。今度若及遲急者。就康兼訴狀。可有御成敗也者。依仰執運如件。  
天長元年六月廿八日。 旧記雜録前編 卷4. P.163

- (水引執印文書)  
薩摩國鹿見島郡司職事。論人矢上三郎盛澄参上之時。被召決兩方。可有御成敗之状。依仰執運如件。  
文曆二年九月十六日 卷4. P.170  
他 (No. 667) 文書。

「鹿島」姓の分布  
(含. 鹿島島)



「鹿子島」姓の分布  
(含. 鹿子島)





「高橋」姓の分布

5 東京都省略 (車動族?)

- [香川県] 10  
高松市(6) · 同分寺町(1) · 大洲市(1) · 長浜市(1)  
高瀬町(1) · 土庄町(水高1)
- [大分県] 314  
大分市(98) · 飛高15, 飛高3) · 扶間町(1) · 佐賀関町(2)  
別府市(22, 飛高2, 日鷹1) · 山香町(4) · 津久見市(6)  
臼杵市(44, 飛高1) · 真玉町(1) · 野津町(飛高1)  
三尊(10) · 竹田(1) · 朝地町(飛高1) · 宇目町(2)  
佐伯市(31, 飛高5) · 蒲江町(68, 飛高13)  
鶴見町(3) · 弥生町(2) · 米水津町(4) · 日田市(16)  
中津市(4)
- [鹿児島県] 2240  
鹿児島市(599) · 桜島町(4) · 十島村(40) · 吉田町(6)  
伊集院町(14) · 郡山町(1) · 東市来町(8) · 吹上町(8)  
松之町(17) · 指宿市(12) · 開聞町(1) · 喜入町(14)  
山川町(11) · 滝屋市(54) · 重水市(7) · 吾平町(11)  
内之浦町(3) · 大根占町(1, 植高2) · 甲良町(51)  
高山町(41) · 佐多町(45) · 田代町(3) · 根占町(2)  
東甲良町(22) · 有明町(1) · 大崎町(21) · 大隅町(5)  
志布志町(22) · 末吉町(5) · 貝木柳町(2) · 松山町(7)  
国分市(26) · 姪良町(53) · 加治木町(49) · 蒲生町(5)  
霧島町(2) · 栗野町(2) · 溝辺町(4) · 横川町(6)  
川内市(28) · 串木野市(14) · 市来町(3) · 入平町(2)  
祀谷院町(2) · 薩摩町(1) · 鶴田町(1) · 車形町(6)  
植込町(1) · 宮之城町(19) · 出水市(7) · 阿久根市(3)  
野田町(1) · 夏川町(10) · 杵崎市(50) · 加世田町(4)  
川辺町(4) · 坊津町(13) · 西之表市(446) · 中郷町(209)  
南郷町(114) · 一屋久町(316) · 上屋久町(148)
- [熊本県] 162  
熊本市(98) · 飛高1, 飛鷹2, 植高1) · 甲佐町(飛鷹1)  
益城町(4) · 菊陽町(10) · 合志町(4) · 西合志町(6)  
水俣市(2) · 芦北町(1) · 矢部町(肥高2) · 清和村(2)  
宇土市(4) · 大矢野市(5) · 小川町(1) · 中央町(1)  
豊野村(5) · 長陽村(1) · 本渡市(1) · 牛深市(1)  
菊池市(1) · 田水町(1) · 坂本村(1) · 竜北町(肥高1)

日高姓の府県別頻度

	白高	飛高	飛鷹	日鷹	松高	氷高	肥高	穂高	比高	比多賀	飛多下	
北海道	113	24					1	2				140
青森	10											10
宮城	25	1						1				27
岩手	12											12
秋田	17											17
山形	2											2
福島	21											21
茨城	116	1					15					132
栃木	64											64
群馬	22						2	6				30
埼玉	285	35	1		1		4	3				329
千葉	352	8	2				1	2				365
東京	620	8	4				5	3		3		643
神奈川	513	7	2				5	19		2		548
新潟	12							1				13
富山	8											8
石川	19			1								20
福井	8											8
山梨	14	1										15
長野	24											24
岐阜	80	1										81
静岡	119	1	1			1	1	3				126
愛知	600	1	2	4	1			5				613
三重	112						1					113
滋賀	64		1									65
京都	144		1	1	1	1		1				149
大阪	958	3	13	4	1	5	3	14				1001
兵庫	449	7	10	1			3	8			1	479
奈良	86											86
和歌山	80	1										81
鳥取	13											13
島根	281				2			2	5			290
岡山	63	1	2	2				1				69
広島	416	1	4		17			5				443
山口	214	2	1				1					218
徳島	17											17
香川	10					1						11
愛媛	165	107										272
高知	14											14
福岡	1078	1	12				4	10				1105
佐賀	113							1				114
長崎	367		1				2					370
熊本	162	1	6				3	1				173
大分	314	38	3	1								356
宮崎	3928											3928
鹿児島	2240							2				2242
沖縄	71											71
計	14415	119	197	14	23	8	51	90	5	5	1	14928



1' 朝鮮出兵の折、長宗武部元親に導いて土佐へ連れてこられた慶長道秋月の城主朴好仁ら30人が  
小内一豊入国後、浦戸から当地へ移住してきたと伝ふる。... 30人、渡世のため

豆腐商いの特権を与えられた。... 「唐人町の龍豆腐 晒布」 (高知県の地名)

2' 明使館 本町 — 東唐人町、横町 — 西唐人町、里門町 — 東唐人町  
1: 三分。

唐坊(とうぼう): 柳福村(あまの(水田)の別名 — 宗徳郡津屋崎町。  
(福岡県地名大辞典)

6' 天正15年明東の乱を避けて多数の明人が「郡城鎮」の民地内泊に入港し、明使  
領主北御時又は、この明人を安永の詔勅に住まわせた唐人町とされた。(高知県の地名)

唐船八重(とうせんやえ): 宮崎県東臼杵郡門川町

7' 天文9年明人王直が通商のため深江(福江)に来航。領主五島盛定が居住地  
を定めて接待した。 — 明人堂に卵塔形の石碑、王法童女・生津土の石碑

唐船三浦(とうせんのみづ): 五島列島福江島の北部に位置する。倭寇の根拠地。

9' 江戸末期の城下侍屋敷団に、七日町から西の二日町に通じる筋に唐人町が  
見える。熊風土記: 唐人町、朝鮮陣、時節連帰り、朝鮮人ヲ此処ニ被召置  
依テ唐人町ト云。(熊本県地名大辞典)

4' 如藤嘉明が慶長の役に連れ帰った唐人を城下造営の時に当地に居住  
させたといふと伝ふる。

大唐人、大唐人中二町、大唐人上二町、大唐人末新立町、小唐人町、表子町、南唐人町  
(愛媛県地名大辞典)

15' 「往古ハシイといふ唐人住ける故よへりともいひ。又寛永十七年某紙帖に一宮と  
いふ唐人作りものとし御扶持方ニ賜ハリ。当地に久しく逗留せよし」(知新集)  
(広島県地名大辞典)

17' 当時唐人といふは朝鮮人のこと。この唐人は富田城の瓦を焼かせたために  
住まわせた所である。尼子氏は、彼らにここに住まわせた。ひそかに軍需品の  
貿易を行わせていたといわれている。(島根県地名大辞典)

18' 唐人屋は慶長の役に、津和野城主吉見氏が捕虜として連れ帰った唐人  
(明人)李郎子について、陶器を焼いたことからこの名が出た。  
(島根県地名大辞典)

19' 「往古ハ今、長崎、如ク異國、船舟此津へ着岸せしキ。此所ニ唐人、旅館  
有テ、夫ハ至ル橋有リ所ナレバ」(敦賀雑記)。「和泉堺の唐門といふ唐物商人  
が来た、当地の川に架けた橋、唐門の橋が転転した」(敦賀志)  
(福井県地名大辞典)

### 唐人町

- 高知市西唐人町 (M.34) ・ 高知市東唐人町 (T.4.4)
  - 福岡市西唐人町 (M.34) → 福岡市中区唐人町
  - 鹿児島県国分市唐人町
  - 松江市唐人町 (宇佐市地名大辞典)
  - 福岡県八女市福島町唐人町 (24.4.4.6) 八女市福島町
  - 宮崎県新城市唐人町
  - 長崎県福江市唐人町
  - 熊本県玉名市伊倉唐人町  
伊倉: 唐人川の河口。中世には丹波津と称し、対明貿易の栄えた。
  - 熊本県人吉市七日町(唐人町)
  - 長崎県南高津町口之津町唐人町 — 南高津船着地 (長崎県の地名)
  - 大分市唐人町 (大分市付内町1丁目の一部。字名は成てこの通称地名は  
使用されず) — 大分県地名大辞典)
  - 大分県臼杵市唐人町(唐人町) — 唐人町(唐人町) — 唐人町(唐人町)
  - 佐賀市唐人町・唐人新町・唐人寺町  
文称: 慶長の役に鍋島直茂に従って道案内や物資の調達をした朝鮮人  
宗族一族が当地に居住し、荒物や呉服物の御用をうけたといふと伝ふる。  
唐津(かつ)・唐坊(とうぼう)・唐船山(とうせんざん)・唐船岬
  - 唐人名(とうじん)村: 織豊期の地名 — 高知県高毛市
  - 広島市中区唐人町
  - 神奈川県小田原市唐人町  
小田原北条氏の頃に中国人が集住してこの名に由来する。
  - 島根県能義郡広瀬町唐人谷(とうじんたに)
  - 島根県鹿足郡杵杵村唐人屋谷川(とうじんやにがわ)
  - 唐人小路(埼玉県川越市) } 戦国時代の地名  
唐人橋(福岡県筑紫郡)
- 3' 唐仁町 (市来町湊、玖津町久志、高山町波見、根占町北、唐屋高原)  
唐仁 (東牟婁町新川西、横川町上、名津原市小宿)  
唐人山 (阿久根市脇本、陶淵町十町、西之表、西之表)  
唐仁ヶ浦 (隼人町野久美田)、唐人ヶ浦 (西之表、西之表)  
唐人沼 (喜入町中名)  
唐仁原 (加世田市唐仁原)  
唐人道 (笠沙町片浦)  
唐人塚 (大淵町大浦、末吉町深川)

I. 第67回例会 平成11年12月12日(日) 於教職員互助組合会館和室

(出会者) 青柳俊二・池田 純・上野堯史・打越和郎・小川秀直・小山田 稔・  
川野雄一・小園公雄・木場武則・坂本 誠・永田典男・西田春人・  
肱岡修一郎・平田信芳・松田 誠・三善喜一郎・村山謙一・米原正晃

II. 大日本地名辞書読会 P. 1747~P. 1749 (計18名)

[問題となった地名および事項] 去飛・持躰松遺跡と薩摩国の荘園・南九州の天守閣・  
島津氏の参勤交代経路・高須経由の道・塵袋

去飛 (いぬとび・こひ)

平田 今日読んだところは美々津・細島・都於郡。伊東氏の本拠地です。何かありましたら出してください。

米原 去飛 (いぬとび) に補足されましたがもう一度お願いします。

平田 これは去飛 (こひ) と読むのが普通です。去飛駅というのが延喜式に出て来ます。「都濃」の草書体を写し間違えたのだらうという説が有力です。去飛 (いぬとび) では、ちょっと理解出来ないのです。

小園 去飛 (こひ) が普通の解釈ですからね。去飛 (いぬとび) というのはちょっとね。

**持躰松遺跡と薩摩国の荘園**

平田 今日の分の下調べをして気付きましたが、この辺りだけで荘園が六つ・七つと出て来るのです。日向国は薩摩国に比べると、やたらに荘園の数が多いのです。薩摩国の荘園のことは持躰松シンポジウムで意見を言おうと考えていたのですが、質問・意見の時間はありませんでした。持躰松遺跡近くの河口一帯には益山荘がありました。あのシンポジウムで感じたことですが阿多郡家を探すのが先決だと思うのです。

持躰松遺跡が出て来たことによって阿多郡家を突きとめる段階に来ていると思うのですが、遠回りして他所の事ばかり話をしていました。阿多忠景は阿多郡司になっているわけですから阿多郡家を探し出し、本拠地を抑えてから周辺で日宋貿易・日明貿易の基地としてどんな所が利用されたかということに展開して行くべきだろうと思うのです。

先程述べたように、万之瀬河口には益山荘があり、阿多郡の北側には伊作荘があります。北にのぼると老松荘、鹿児島湾に入ると荒田荘があります。薩摩国の荘園はほとんどが、湊をもっています。今まで荘園は開墾地で有力者に寄進するという説が強かったのですが、薩摩国の荘園の立地をみると、日宋貿易・日明貿易の基地としての役割があったのではないかという新しい切り口が出て来たように思います。その意味で持躰松遺跡というのは面白い問題提起をしたなと思います。

大隅国の荘園には始良荘があります。始良荘は肝属川沿いですが、鹿児島湾側の高須がその外港だったと思うのです。前回、唐人町をとりあげましたが、高須の唐人町は消えているとの話をしました。唐人町がある所は何かそう言っ

たつながりもありそうです。

日本で一番大きな荘園は島津荘。都城がその中心ですが、その外港は志布志であり内之浦だったわけです。

今日読んだ所では、『宮崎県の地名』を見ると、細島には日明貿易の船が来ていたとのこと、ポルトガル船も来ていた、と。細島周辺にも荘園があったので、荘園の跡を発掘して湊を探せば、持鉢松遺跡と同じような白磁・青磁・青白磁などが出て来る可能性があるなと思いました。そんなことが明らかになると日本史の見方もだいぶ違って来るのじゃないですかね。

小園 この前の持鉢松遺跡シンポジウムの感想を述べられましたが、考古学に基づいて中世史研究を兼ねた人たちが想定して論を張るわけですが、尚早論じゃないかと思うのです。というのは持鉢松遺跡で発掘された陶器類・破片類は本当に貿易によるものなのか、と。あの辺りは海が荒れて潮流が激しいから、博多に行く途中で難破したりあるいは寄港したり、場合によっては海賊に捕まって来たこともあるのではないか。破片があんなに集中しているということは交易によるものではなくて、ある時にたまたまあそこに壊れた陶器が捨てられてのじゃないかと思うのです。

交易というのはやっぱり需要と供給の関係ですから、阿多忠景が九州一円にその悪名を響かせた時期にそう言ったバック＝グラウンドをいくつ持っておったか。それがはっきりしない。また阿多郡の領域も明確でない。忠景が史料に載っているだけでも郡司であったことは想定されるし薩摩権守に任じておったことも記録にあるけれども

阿多を交易の中心地というふうには花火を打ちあげていいのか、と思うのです。

金峰町に対して申しわけないのだけでも、花火の打ちあげが終わってまた元の静けさに帰るというのではなくて、地道に阿多郡の領域を示し、居館を探し、忠景との関係などを調べて阿多郡さらに益山荘とか湊との関係が判って来るのじゃないかと思います。

私は村井さんの説を全部信用してるわけじゃないのです。否定もしませんが、どうも日宋貿易のルートであったというような形で固定して決めてかかるのはどうかなと思うのです。

平田 基本的には博多が拠点だということは間違いない。日明貿易の場合は堺と博多、二つの拠点があったわけです。そして細川氏と大内氏が争っていた。そのこともあって豊後経由のルートが活発になって来るわけです。

持鉢松シンポジウムで洩れていた点は、日宋貿易・日明貿易の主な商品は「硫黄」であったことに触れなかったこと。薩摩国の硫黄島と豊後国の鶴見岳、この二つが硫黄の産地なんです。それと霧島もあり得るかなと思いますが、それは置いときましょう。そうすると九州東海岸の交易ルートがあつていいと思うのです。また博多がやはり主だから薩摩から肥前・筑前へと向かうルートもあつていいと思うのです。

小園 今言われたような順調な貿易と考えると持鉢松遺跡を交易の拠点と考えるあゝ言った発想であれば、僕はちょっと早いのではないかと思う。やっぱり難破・海賊。それから行商によったかも知れないけど、あんなに一カ所にまとまるのは、やはり疑問。万之瀬河口は広いけれども船が座礁する心配もあるわけです。

平田 基本的な問題では、川内川では満潮時どこまで船が来るというのは判っていますが、

万之瀬川は潮がどこまで来るかということの説明は何もなかったのです。

それと発表されていないのだけど、有名な高橋貝塚は鉄斧が出て来たとか貝製品が沢山あったというので弥生前期の遺跡として知れていますが、遺物ケースを収蔵庫で片づける時に見たら、青磁も入っていたのです。その頃はあまり関心もなかったのですが調べもしませんでした。青磁も入っているから相当時代は下る頃まで高橋貝塚は続いていたのだなと思いました。

それと高橋貝塚は堀川と浦之名川の合流点に位置しているのです。川の合流点というのは私の経験からいうと大きな遺跡が沢山あるのです。そういう所は交通の要所になるわけですからね。高橋貝塚辺りが交易の一つの拠点であったとみてよいと思います。

小園 古代の人たちが住みやすい所はその続く時代の人達にも住みやすいわけですからね。戦乱で全滅したり、あるいは嵐によって埋まったとか工事によってつぶされたというようなことがない限り、普通は安定した居住地であったと思うのです。

平田 阿多は郡家だけでなく、あそこは阿多隼人の本拠地ですからね。もっと根元的なものを調べるべきだと思う。

小園 阿多隼人の根拠地というけれども実際に判っているのか。じゃーどの境域かということなどが具体的に判っていない。ただ阿多・阿多地方と概念的にわれわれはとらえているわけですね。

平田 うん、やっぱり阿多は。

小園 まあ、金峰町。

平田 金峰町？ 近世の阿多郡は阿多郷

・田布施郷・伊作郷まで入る。しかし伊作は古代では伊作郡。中世になると伊作荘、日置北郷・南郷と文献には出て来る。あれは本来日置郡のものを伊作郡が取り込んだと思います。あの辺の領域はよく判らないけれども、阿多郷というのは阿多郡の中心であったと思います。

小園 さっき言われた「荘と湊との関係」、海岸に入り組んだ所であれば、そこに人家があれば商業が成り立つのは当然ですが、それは不思議ですね。湊との関係で荘園がある、と。始良荘はちょっと離れて肝属川の上流ですね。

平田 ちょっと引っ込んでいる。

小園 例えば、桑原郡とか桑原郷というのがありますよね。私は定説に従って「郡」がいわゆる行政的に定めた所、その次に派生するのが「院」であろうと信じておりますがね。

平田 その次に「荘」が出て来るわけでしょう。「荘」は有力な社寺とか摂関家につながっているでしょう。摂関家が「荘」に拠点を置いて日宋貿易とか日明貿易の利益の吸い上げ口にしていたと考えると、九州とくに南九州の荘園は別の見方が出て来るということです。先程眺めた細島辺りは富高荘があった所です。九州の湊には荘園が付いているな、と。そんな匂いがします。

小園 老松荘はある地域を示す。しかし島津荘・正八幡宮領というのは方々に拡がって、郡・院・郷を抑えている。

平田 それはまた別の支配形態として考えればよい。

小園 面白い見方ですね。ただね、万之瀬川の流域に交易船が何故行ったのかが疑問です。普通に考えると錦江湾に入って国分に行く。国分に大隅国府があるわけですからね。あるいは川内に薩摩国府もあるわけですから。国分に運

んで行けば波も穏やかで良かったはずなのに、何故万之瀬川を通称の場としたか。国府にそういう責務があるわけですからね。

平田 話が飛び飛びになりますが、例えば日明貿易の場合、あの時代は臨済宗の坊さんが通訳に当たるわけですね。薩摩・大隅の臨済宗寺院をあげてみると、有名なのは志布志の大慈寺・山川の正龍寺ですが他にも伊作に多宝寺という寺があり高橋に紹聖寺があった。川内川河口の舟間島にも臨済宗の寺があった（臨江寺）。薩摩・大隅の場合、湊のある所に有力な臨済寺院がある。臨済宗の寺院が日明貿易に関わったというのは周知の事実ですから、当然考えられることです。薩摩国の場合、一番力があつた臨済宗の寺は伊集院の広済寺という寺です。伊集院の一字治城に島津貴久が一時期本拠を構えますが、これは広済寺を抑えたなど推定出来ます。広済寺の末寺が伊作の多宝寺です。そして伊作島津氏は加世田を支配しているわけですから広済寺・多宝寺それから阿多一帯の海外貿易の財力を掌握することによって島津本家を継ぐことが出来たと考えられるわけです。阿多地方や伊集院は昔から交易によって栄えておつた。ただ単に水田だけじゃないと持躰松遺跡から感じたのです。今日読んだことから少し外れて持躰松遺跡の話になりましたが、持躰松遺跡シンポジウムを聞いた人も多いと思いますので、そんな話も意味があるでしょう。他にありませんか？

#### 南九州の天守閣

小園 伊東氏の居城は？

平田 都於郡城。

小園 都於郡城ですか。綾城に天守閣を

建てたという話と、もう一カ所天守閣を造った城が宮崎県に出来たと聞きましたが都於郡城じゃないですかね。どうですか。

平田 さあ、宮崎県のことは全然知らないのだけど、可能性はあるね。

小園 その時分に天守閣があるのかないのかということですね。

平田 ああ、頼娃で五重の天守閣を造つたというのと関連しますね。

小園 頼娃の五層の天守閣は別にして、金の鯨鉾が見つかったというのはどこだったですかね。

平田 佐土原じゃないの？

小園 ああ佐土原だ。佐土原の話でした。

平田 佐土原城から金箔の瓦が出て来たのは秀吉の威光とからんでいるとの説が紹介されていました。

小園 思い付きで、どうも。伊東氏は伊豆の工藤祐経の子孫だということで、島津氏と似たような存在です。下向して来たということが『宮崎県史』にも書いてあります。五味先生が書かれたのですけれども。

#### 島津氏の参勤交代経路

上野 先程、細島が出て来ましたが、細島を島津氏が参勤交代の時に使った事もあります。初期にですね。細島まで行くルートはよく判らないのですが、どういうルートでしょうか。船だとすれば、福山に上陸して、それからどういうルートで。

平田 都城に出て。

上野 都城ですね。

平田 都城からどこへ行くのだろう。俊寛を連れて来たルートがあるのじゃないの。山を越えて、えーとあれはどこへ出るんだ。

小園 島津氏は細島まで船で行った時もある

のじゃないか、と思う時もある。

平田 細島まで？

小園 例えば牛根から上陸して福山の亀割峠から通山を通って都城に行く。そして都城の先の船迫ですかね、そこから大淀川を下って行く。そんなルートを聞いたような記憶があるのですが。

上野 そうすると、宮崎市に出たのですか。

平田 そうすると、赤江の湊あたりから乗船するの？

池田 今の国道10号線でしょうね。高城・去川関を越えて行く。

上野 高城・去川。大体10号線ですね。

池田 そうですね。

小園 やっぱり陸上を行ったんですね。

平田 それは海よりも安全。

小園 出水の方、米ノ津から行った経路もあるわけでしょう。

平田 細島や米ノ津の場合、御座船は迂回して待っていなければならない。

上野 鹿児島から船で佐多岬を回って行くというのは不可能なんでしょう。当時の技術では。

小園 そうかも知れませんね。潮流が激しいからね。

上野 難破する危険性がある。それを行かねばならん場合は一旦川内まで行き、川内からぐるーっと回って行ったのじゃないかと思うのだけど。判らんです。

平田 佐多岬で曲がることは出来ない。

上野 ずーっと遠回りして行く。

小園 あそこは潮流が激しいから。現在でも相当大きな船でも揺れるもん。

平田 殿様の船は参勤交代で冒険はしな

いだろうから。

上野 細島まで歩いて行ったという記録は沢山あるのです。問題はそこから先。船で行ったろうと思うのですが。

小園 殿様は駕籠でしょうからね。

上野 そうですね。

小園 下士は裸足で歩くのでしょうかね。

平田 そうすると、現在の10号線になって来る。福山から通山を経て都城に出る。都城から宮崎→佐土原というルートになる。それが一番安全なルートのようなだけだ。

小園 われわれは細島からというのは聞いていますけどね。その間のルートは考えなかったですけど。

小山田 去川関の所は「島津道」という碑が立っている。

平田 ああ、そうですか。

小山田 復元というのか、手入れされています。関所の所をちょっと歩けるのです。相当上の方から去川関まで。

上野 去川というのはどこにあるのですか。

都城の近く？

平田 もっと先。

小山田 10号線沿いの。

池田 高城。

小山田 高城の近くです。

池田 この高城じゃなくてもう一つの高城。

小園 ここに書いてあるのは？

平田 もっと、こっちの方。東諸県郡の方。

池田 高城が二つあるので、よく間違える。

小園 どの位の日程だったのですかな。細島まで行くとしたら。

平田 江戸まで59・60日だから。

小園 4～5日はかかったでしょうね。

平田 もっとかかっているよ。

池田 川内の木場さんが江戸時代の道中日記を自費出版されています。それに日付とか里程が書いてあります。

平田 上井覚兼日記の知識からいうと、上井覚兼は鹿児島を発ってまず桜島の白浜に行く。これで1日。白浜から敷根、これが1日。敷根から都城が1日。都城から宮崎が1日。それから教えると5～6日で行くのじゃないかな。

上野 じゃー、5～6日で歩いてみましょう。(笑い)

### 高須経由の道

納 宮崎に出る道で、こういうことを聞いたことがあります。鹿児島から高須に出て、それから山の中を通って行く。そして鹿屋に出て、鹿屋から肝属川を下って行くという話を聞いたことがあります。それと高山に屯倉があって、これは宮下と書いて「ミヤゲ」と読む。あの辺に道があったと聞いています。一時、大隅半島をぐるーと回るよりも肝属川を上って来て・

平田 高須に運河を造ろうという話。

納 高須につなぐ道を通そうという話を聞いたことがあるので、やはり昔もこういう道があったんじゃないかと思えます。

平田 高須から鹿屋を通って肝属川につなぐ路線は昔の人も考え付くことでしょうね。

小園 私は何かで見ましたよ。そのルート。鹿児島から高須に出て鹿屋に出る。

そうしてその家臣たちが出迎えたという史料を見たことがあります。だから・

### 塵袋

小園 もう一つ。1749ページの韓家郷というのは確か風土記にも出て来るのではないかな。

平田 あっ、そう。

小園 何かそんな気がして。それから、都濃皇神社の話も「塵袋」だったかな、風土記の中にこれと全く同じものが出て来るようですね。

平田 あゝ。

小園 神功皇后が新羅遠征の帰途に寄って、弓を射た。弓はずで地面を掘ったら小人が出て来たという話。風土記の中にも出て来るようですね。私はそれを教えたことがありましたので思いだしました。

平田 それは知りませんでした。

小園 その時に頭が黒い人々かなと思いましたが判りませんでした。

平田 あゝ、そうですか。

小園 あれは「塵袋」などを引用したのかも知れませんが。

平田 「塵袋」には風土記逸文がだいぶあるでしょうね。「塵袋」は東洋文庫の中に入っているのですが、私はその配本の時にちょうど転勤で「塵袋」を買っていないのです。本屋で探しているのですが、なかなか見付からない。

小園 仲々、ないですね。

平田 他にありませんか。前半はこれで終わらしましょう。

## 不動寺について

池田 純

お早うございます。初めて此処に立たし  
て頂きました。池田と申します。寺院に興  
味をもって少しずつ調べております。谷山  
に不動寺という所がありますが、その辺が  
区画整理されるそうです。以前から遺跡が  
ある所と地元では知られていて、大正時代  
から掘ったりしてたらしいのです。それで  
市教委の方で発掘調査をしました。寺院を  
調べているということで、市教委の発掘  
担当の出口さんから不動寺について書いて  
くれと言われました。不動寺の資料が仲々  
なかったのですが、その後よい資料が見  
つかりましたので、そのことを紹介したい  
と思います。

谷山の不動寺。谷山の方もおられるので  
ご存知の方もいらっしゃるかと思います。  
この字図を見て下さい。横に道が書いて  
あります。これが伊作街道になります。右  
の方が谷山駅。谷山駅はこの地図には入り  
ません。それで、不動寺という所を確認し  
て下さい。諏訪山と書いてありますね。諏  
訪神社がある辺りです。懐良親王が造った  
とのいわれのある諏訪神社。そこから南へ  
下った所が小字「不動寺」になります。

お寺を調べる場合、一番頼りにするのが  
三国名勝図なんですけど、不動寺について  
は書いてありません。その他に今日の資料  
に出しておきました「谷山諸記」がありま  
す。これは「谷山市誌」を作る時、木原三  
郎先生たちが写して活字化したものだそう  
です。その中に不動寺が出て来ます。左側  
のページ、下の段の3行目です。「右同村

之内、不動寺」となっております。「右同村」  
ということは、右のページに「上福元村之内」  
と書いてありますので「上福元村之内不動寺」  
といことになります。この「不動寺」という表  
現は地名的な使い方、お寺の表現ではなくて  
地名としての「不動寺」だと思えます。  
「一、地藏堂一宇、右同永里門ノ三右衛門、  
但木立像高サ壹尺五寸位、由緒相知不申候。」  
今まで不動寺については、これだけが知られて  
いました。始良町の歴史資料館に何遍か足を  
運ぶうちに、不動寺に関すると思われる史料を  
発見した次第です。それがもう一枚の方の資料  
になります。

それは「帖佐来歴」という史料です。これは  
始良町歴史資料館が発行した「館報第五号」に  
載っていたのです。当時の館長：楠田安男さん  
という方が活字化されたのです。以前、黎明館  
におられた方らしいです。その方の解説も資料  
として出しておきました。

これは伊地知季安が書いたということになっ  
ております。本田親章という人物が帖佐に勤務  
することになり、帖佐辺りの史蹟巡りをしたい  
ので資料をとのことで、伊地知季安が書いたの  
が「帖佐来歴」だそうです。文政十二年(1829)  
の記述になっております。

最初読んだ時は不動寺のことじゃないと思い  
ました。この史料には直接「不動寺」という文  
字は出て来ないのです。「宝動寺」で出て来る  
のです。今からの話は、宝動寺=不動寺じゃ  
ないかと考察したものになります。帖佐来歴の  
中の林清庵についてのところを読みます。

「今鍋倉村之内ニ畠地壹反六畦余御免地アリ」

鍋倉というのはご存知かと思いますが、帖佐の別府川を渡った向う側、加治木よりの方です。あすこに米山薬師がありますがあの下辺り。現在帖佐小学校がある辺りを鍋倉と言います。あの辺りに総禅寺という寺がありまして、その周辺に林清庵があったと思われます。総禅寺は帖佐小学校の裏にあります。曹洞宗福昌寺末寺。島津季久・朝久ゆかりの寺で、季久から五世の子孫が朝久になります。夫人は義弘の娘：お屋地さまになります。朝久は征韓：朝鮮出兵の時に向こうで病死しております。そこには季久・朝久そしてお屋地様の墓、それと島津金吾歳久の胴体が埋めてあったということです。首は塩漬けにされて京都の一条戻橋という所に曝し首され、その後京都の浄福寺法林庵に葬られ、福昌寺には廟が建てられたらしいのです。今でも福昌寺に行きますと、歳久の墓があります。義弘とか義久の墓がある一面にあります。明治五年歳久の子孫に当たる日置島津家の久朝という方が京都の首と総禅寺にあった胴体を合わせて平松神社にお祭りしたらしいのです。その後日置郡日吉町の大乗寺という日置島津家の菩提寺に改葬したらしいのです。そういういわれがあるのが総禅寺です。「総禅寺支配ナリト云ヘリ。季安福崎氏ノ古系図等ヲ按ルニ、観応二年(1351)辛卯九月二十八日齡岳公」、齡岳公というのは六代氏久になります。奥州家ですね。大隅守になります。「齡岳公、筑前金隈ニ軍タチシテ一色右馬頭範光ノ軍ヲ助ケ玉ヒ、御手(傷)ヲ負ハセラレ既ニ御戦死ニ究メラレシ時、従軍シタル伊地知弾正忠季随其以前道鑑公」、道鑑公は五代貞久のことで、氏

久のお父さんになります。「道鑑公ト御同番ノ士ナリケルガ罪ヲ尊氏將軍ニ得テ獄中ニ危カリシヲ、道鑑公御恩地ニ仰カヘラレ御訴メシ玉ヒシ御恩故ニ罪ヲ免サレケレバ、誠ニ命ノ主トテ下向シテ臣事セシ者ナルガ、則自カラ願ヒテ齡岳公ノ御鑑ヲキカヘ詐テ島津又三郎氏久と呼ハリ御身代リニ討死シケリ」と。

それで伊地知弾正忠、「忠」とは何だろう。弾正とはよく聞いたことがあるけど、「忠」は何だろうと一応調べてみました。律令制度の役職。弾正台という役所があり、その中の役職だそうです。「尹・弼・忠・疏」、弾正台の中に四つの階級があり、それにプラスして巡察弾正というのがありと書いてあります。

小園 これは「だんじょう・ただすえ」でもよろしいでしょう。

池田 弾正忠季ですか。(タダスエと読んだことでの混乱)

小園 これは一種の名誉な名前として付けてあるので。

池田 あゝそうですか。

小園 伊地知季随なんですよ。

池田 弾正忠季随(クンツヨクチュウタキエ)。

小園 弾正季随(クンツヨクタキエ)。弾正忠は律令のものであって、戦国時代のものは地位・名誉とは関係ない。(編集者後記：弾正忠季随はクンツヨクセツクあるいはクンツヨクチュウタキエヨリと読むべきだろう。季随にセツクの読みがある?)

池田 はい。

「其時弾正忠カ自ラ随ヘシ家臣福崎主税助能広ニ申付、汝ハ如何ニモ奇計を廻シ、公を難ナク御供シ帰レトノ主命を守リテ」、能広はヨシヒと読みましたがよろしいでしょうか。

小園 ヨシヒでよろしいでしょう。

池田 以前、県立図書館に古賀先生という方

がおられて、読めない文字は大抵「よし」と読めばいいとということ聞き成る程と思いました。

「能広ハ仍チ博多ノ出井ノ7道場ニ走込、公ヲ匿シ、御手紙ノ看病シマイラセ、頓テ扁舟」、これは辞書を引きますとヘンシュウと読み底の平たい舟だそうです。

「扁舟ニ棹シ、ヤウヤウ御国ニ通レ下リケレバ、道鑑公大ニ悦バセラレ、弾正忠カ菩提ノ為トテ、寺ヲ鹿兒島今ノ堀ノ内ニ建ラレ、林香庵ト名ツケテ、尼寺ニシテ、其恩ヲ報セラレ、又主税助ハ御内ノ者ニ召出サレ特ニ知行ヲ下サレシト云ヘリ。其時、主税助モ亦一寺ヲ帖佐ノ自分ノ知行所ニ建立シテ、林香庵ノ林ノ字ヲ取り、林清庵ト名ツケテ弾正忠カ菩提ノ為ニシ、又主税助自分ノ菩提ノ為ニハ宝動寺ト云ヘルヲ谷山ニ建ケルトノ趣キ、其系伝ニ見エタリ。」

ここに初めて宝動寺というのが出て来て、その由来も判ります。

「鹿兒島ニアリシ林香庵ハ尼寺タリシコト上井覚悟兼日記天正三年乙亥十一月廿七日ノ条ニ、奈良木伊賀守ハ臨江庵ノ父ニテ、関豊前守ガ下女、一兩年前、臨江庵ニ走入タルノ口事一件詳ニ出タリ。其後、元和六年、四分一上地ノ頃、無縁ト為リ、廢壊セシト考ハル。谷山ノ宝動寺トテ、三門」、これは三門ですけど、楠田先生は三間であろうとの解釈です。「三間許後ニ山アル地アリテ、僅カニ地藏堂遺リ居ケルトゾ。地藏ヲ法幢ト云ヘシハ、法幢寺ナラント、伊地知猪兵衛ノ咄ヲ聞キタリ。斯テ帖佐ノ林清庵イカニヤト日頃疑ヒ想ヘルニ、今尚御免地アルヲ聞テ季安等先祖菩提寺ナレバ一入歎喜シテ其来由ヲ粗(アアア)此ニ述ル也

加世田唐仁原ノ西照寺ハ彈正カ屍ノ流レ寄シ所トテ、于今其墳寺アリ。尤彈正御名代ニ戦死シテ博多出井ノ道場ニテ御手紙看病シマイラセシコトドモハ、山田聖榮自記并同人目安ナド云古書ニ明證アリ。

此一段六畦余ノ寺地、今総禅寺島ニモ候ヤ、元來彈正カ菩提ノ為メニ其家臣福崎氏ガ知行ノ内ニ建タル由緒本文ノ通ナレバ、彈正忠ガ法名光輝都仁庵主ノ位牌トモハ無之乎。ナクンバ建テテ其地ノ毛上」、ケジョウと読むのですか?

小園 土地のことですから「もうじょう」でしょう。

池田 「毛上ヲ手向ケ祭りタキコト也。主税ガ法名ハ知ラズ。子孫谷山ニ居テ今ハ伊地知ナリ。」谷山の不動寺のことが、遠く離れた帖佐の史料にあったということです。

それで、要素がいろいろあるわけです。宝動寺=不動寺かということで考えまして、肯定的な考察をこの報告書で書きました。

上福元村に宝動寺に該当する寺院は現在の資料から見付けられないのです。字名に残る「不動寺」以外ちょっと考えられない、というのが第一です。それから「宝動寺」は「ふどうじ」と読むのです。読めるのです。加治木に隈姫神社というのがあります。島津義弘の夫人が球磨の相良家から政略結婚で嫁に来て、離縁されたために自殺したということです。そのお姫様の祟りを怖れて祀ったのが隈姫神社なんです。昔は宝現大明神と言いましてね、土地の人は宝を「ふ」と読むのです。「ふげん」と読みます。だから宝動寺が「フドウジ」になったという可能性は非常に高いと思います。そして文字を不動寺に変えたみたいですね。そういうことが言えると思います。

「帖佐来歴」に「今、上福元村ノ地名ニ宝動

寺トテ三間許後ニ山アル地アリテ・・・」  
とありますが、現在は山はないのです。と  
ころがその辺の人に聞きますと、昔はすぐ  
後に山があったというのです。戦中か戦後  
に、小さい山を削りまして軍需工場か何か  
を造ったらしいのです。飛行場ですか、飛  
行機を製造する所か・・・」

小園 田辺航空があった。

池田 何かそんな名前です。

小園 今は団地になっています。

池田 地形的にもそういうことが言える  
のじゃないかと思えます。西谷山小学校  
辺りも昔は山だったのを削って出来たそう  
です。だから宝動寺の記述と現在の不動寺  
の跡とは一致すると言えます。また「帖佐  
来歴」に「僅ニ地藏堂遺り居ケルトゾ」と  
あるのと、「谷山諸記」の「不動寺、地藏  
堂一字・・・但木立像高サ老尺五寸」との  
両方の記述が地藏のことで一致します。

それと、現在不動寺跡は墓地になってお  
ります。先程「永里門ノ三右衛門」という  
のが出て来ましたが、あの辺は永里姓が沢  
山ありまして永里家の墓もあります。その  
墓地の中に石の蓮華の台座があります。そ  
れに「明治二十三年旧七月二十三日再建主  
伊地知孫次郎」と彫ってあります。廃仏毀  
釈の時、木造の地藏さんが焼かれたのでは  
ないか。その由来を知っている福崎家の子  
孫である伊地知孫次郎が石のお地藏さんを  
造ったのではないか。そんなことを考えま  
す。ただ、像は残っておりません。蓮華を  
彫った台座だけからの想像です。

もう一つ「主税（福崎能広）ガ法名ハ知  
ラズ。子孫谷山に居テ今ハ伊地知ナリ」と  
あることです。あの辺に伊地知家が十数軒

あります。私も直接聞こうと思って訪ねまし  
たが、留守で聞けませんでした。伊地知家が  
あの辺にはいっぱいあるのです。そんな点  
から宝動寺に間違いのないのじゃないかと思  
います。

一方、否定的な考察もしてみました。宝  
動寺はホウドウジと読む。「帖佐来歴」でも  
法幢寺という表現があるので別じゃないか  
との考え方も出来るわけです。

それから文政年間に編纂されたと思われ  
る「谷山諸記」。何故文政年間かという  
と、谷山郷歴代地頭の名前が出て来るの  
です。最後に出て来るのが文政年間の地  
頭なんです。「帖佐来歴」もほぼ同じ時  
代：文政年間に書かれたものです。それ  
で一方は不動寺と書いてある片一方は宝  
動寺と書いてある。同じ時代にそういう  
違いがあつてはおかしいとの否定的な考  
察も多少出来ませんが、結論としての報  
告書の文章を読んで締めくりたいと思  
います。

「上記した考察を踏まえて判断すると、  
宝動寺が薩摩弁の言葉の簡略化によりフ  
ドウジに変化し、不動寺という文字を当  
てるようになったと考えた方が自然なよ  
うである。また伊地知季安が宝動寺と  
記しているのは、福崎氏ノ古系図等ヲ  
按ルニとあることから、当時既に不動  
寺といわれていたが、福崎氏の系図から  
宝動寺が不動寺に変化したことを承知  
で正しい宝動寺の文字を用いたのであ  
らう。季安が、もし今は不動寺といわ  
れているが、本来宝動寺が正しいと書  
き残していたら問題は残らなかった」と。

私が気付いたことは、そういうことです。  
何かご意見を聞かせて頂けたらと思  
います。

今一つ「法幢」というのを調べてみま  
した。「仏法の目印の幢（幡）」と広  
辞苑に書いてありました。

小園 幢（ハタ）というのは、中国の古  
代王朝：

殷とか周とかの時代、戦争をする時に  
幢や幡を立てた。

池田 その時、この字（幢）のものを  
用いる。

小園 はい、ノボリやハタを立てます。  
例えば三国志で諸葛孔明が幢を立てて  
行くのですよ。そう言ったノボリやハ  
タを意味します。法ですから仏法です  
ね。文字としては法幢寺。宝動寺とか  
不動寺と書かれたのは、当時漢字で  
書く場合現在のように活字があつて  
厳密に間違いなく添削するのではなく  
て、聞き伝えていきますから漢字の  
間違いはあると思えます。私は厳密  
な分析でなく勝手な考えですけど、  
同じ所を指していると思えます。その  
地域に似たものがあればですけど、  
なければですね、そう言ったふう  
にお考えになってもよろしいの  
じゃないでしょうか。

上野 今思いついたのですが、「宝」  
というのはいわゆる富ですよね。富  
という字は「フ」とも読むのです  
ね。宝と富とは同じ読み方をし  
とつたとすれば、富動寺でフドウ  
ジ。富も宝も同じことですから、  
そういう発想があつたのじゃないか  
と思つたりしますが。

小園 中世の地名も戦国時代にな  
って来ると、同じ意味を指しながら  
も読み方が変わっているのです。自  
分で発音してみてもやっぱりそう  
だなと思う場合がありますからね。

上野 もう一つ、先程「其地ノ毛上  
ヲ手向テ」とある、この毛上とい  
うのは其の地の稲を手向けるとい  
うことですか。

小園 そういう意味でしょうね。「毛」  
というのは農作物：収穫物。大体上  
の物。

麦とか米なんかは上になりますから、  
大根は下です。

池田 一毛作とか二毛作の「毛」も  
そうですか。

小園 そうですけど、大体上に稔る  
もの。上毛と逆に言えば作物です  
ね。

それから読み方で折角の機会です  
から、後から10行目の一番下です。  
「一入歎喜シテ其来由ヲ粗此ニ述  
ル也」の所、粗というのはアラアラ  
と読む。「此（コ・コ）ニ述ル也」  
と読まれたら判り易いと思えます。  
小さなことですけど。

納 さっきの「宝」を「フ」と読  
んだことですけど、鹿児島方言流  
で言えば、宝も法も両方とも「フ」  
になるんですよ。宝もホウ、法も  
ホウでしょう。母音の長音の場合  
はオウがウに変化するのです。こ  
れは打ち切つて同じになる場合も  
あるのです。宝現寺の場合はフゲ  
シと読むのです。谷山の慈眼寺。  
われわれは普通

「ジガンジ」というているのです  
が、元々の古い読み方で言えば「ジ  
ゲンジ」ですね。谷山の年とつた  
人々に聞くと「ジガンジ」じゃ  
ないんだ、「ジゲシ」というのです。  
宝動寺もドウの長音になるため  
母音のウに変化して「フツシ」  
と読むのじゃないかと思うのです。  
鹿児島では「寺」の場合、ほとん  
どが清音になります。それと、

さっき言われたように耳に入つて  
来た音そのものを、知っている文  
字に当て込んで行きますから。

池田 平田先生が、この間、テレ  
ビで出られた鹿児島さんいろいろ  
文字がありましたね。

平田 不動寺の場合、天台宗か真  
言宗かどっちか判らないけど、  
いわゆる山伏とか不動明王との  
結び付きは考えられないのか。

池田 そういうのも考えられるの  
ですけど、どちらかという関係が  
ない。例えば臨江庵は

島津5代貞久の頃造ったわけですね。ということは、福昌寺を造ったのは7代元久ですから、それより以前の寺ということになります。それと総禅寺がやっぱり曹洞宗だったのです。もしかしたら宝動寺も曹洞宗だったのじゃないかなと考えています。

小園 島津氏は曹洞宗。

池田 そうですね。

平田 7代からだね。島津氏の場合は。

池田 あゝそうか、最初は時宗。初代から5代までは。

平田 鹿児島藩の場合、その郷・邑の幸福を祈る寺：祈願所は真言宗で、菩提所は曹洞宗の寺です。山伏は天台系統で、真言系の山伏のことはあまり聞きません。天台宗であれば、不動明王を刻んだり青面金剛像が造られている。どこかその辺に転がっていきそうな気がするのだけど。

池田 あとと言えるのは先程お地藏さんが残っていると言いましたね。大抵、御本尊を御堂に残す。お寺がつぶれると、御本尊だけは建物と共に残す場合があるのです。だから宝動寺の御本尊はお地藏さんだったのじゃないかと私は考えております。そういう記述はないのですが、大抵御本尊は残します。例えば韃靼(タタリ)の所に智恵光院という大乗院の末寺があったのですが、その御本尊も地藏さんでしたっけ。現在でも御本尊だけが残っています。

平田 観音像でしょう。

池田 観音でしたっけ。

小園 伊集院の広濟寺跡に行きますと、建物はもちろんありませんけど、坐っている地蔵さんのね、首が壊してあるのですよ。それは残っていますけどね。首

なし地蔵がありますけどね。廃仏毀釈というのは地蔵だけ残して、あとのものは壊したのか。私は全部目茶苦茶に壊してしまったと思って来たのですけど。

平田 その地域・地域だと思うよ。

小園 相当荒っぽく。

平田 荒っぽく藩の命令で壊した所は徹底して壊したけど、村人が信仰深いというか、村人全体で仏像を守って、申しわけ程度にやった所もありますからね。

青柳 目をつぶしたみたいなの所がそうですね

池田 結構、鼻とか、出てる所は顔面をよくつぶされております。あつ、それと、気付いたのが伊地知弾正忠季随。これが、ですね、いろいろ調べたら元々鹿児島在地の豪族かと思っていたら、これも越前の伊知地城主、伊知地弾正と出て来るのですね。越前から来た人なんてのは初めてこれを調べて判りました。(編集者後記：越前は伊知地、こちらは伊地知と書く)。

平田 越前島津家という分家がありますからね。早く断絶して、その家来たちは島津の本家を頼って移って来ます。その中で有力なのが伊地知氏です。

青柳 読み方のことですが、池田さんが読まれたみたいに弾正忠として、それから次は何と読むのですか。もし読むとしたら季随は。

池田 忠季(タタリ)だそうですね。

青柳 忠季じゃなくて弾正忠を活かした場合

小園 随(シカリ)と読む。

青柳 随という字で「季随」の二字だったら

平田 それで名前だな。

青柳 そうですよ。そうしないと、弾正台の四等官が一番上は尹(カ)ですよ、その次は彌(メ)だと思うのですが、その次の「忠」は何と読むのですか。

平田 弾正忠(タタリ)。

青柳 弾正忠は日本語で読んだら？

平田 「ジョウ」

青柳 四等官だったら「ジョウ」ですね

小園 あなたがおっしゃることも判ります。弾正忠(タタリ)という読み方が読み易いわけですが、伊地知弾正忠季随(タタリ)の場合、読み方を省いていると思う。あるいは印刷ミスかも知れませんね。

青柳 だけど、また弾正忠と続いている

小園 また、その後には弾正と出て来ますからね。かなり乱れているのじゃないですかね

青柳 伊地知家の人々の名前が、伊地知季安それから季通と、「季」を通字としているから。検討された方がいいのじゃないでしょうか。

小園 平安末期であれば弾正忠(タタリ)と読むべきでしょうが、江戸時代になって来ると弾正忠というのは一つの称号ですからね。これは伊地知忠季が正しいと私は思う。調べられても結構ですが、後の方にも弾正と出て来ますから。この文章は弾正と書いたり弾正忠と書いたり、乱れております。

平田 弾正カ菩提ノ為ニ、弾正忠カ、と二通りの書き方があるね。

小園 弾正忠という意味に考えてよいとは思いますが。

池田 伊地知家は大体「季」の字になっていますね。

平田 季〇だから季随の場合、随は読むとしたら、ミチだろうか。

上野 林香庵というのが、上井覚兼日記

では臨江庵という字を使っています。どっちが

池田 時代によって漢字がよく変わるので。

上野 どっちでも良い。

池田 どちらも、はい。多分これ(林香庵)は、先程の「谷山ノ其系伝ニ見エタリ」ということから持って来ていますので。そして、上井覚兼日記ではこの字(臨江庵)を使っているということだと思えます。

上野 もう一つ。地図の入っている方。左側の下の方です。最初読まれた不動寺、それから木立像高サ老尺五寸。その後「中村之内皇徳寺末寺」とありますね。

池田 これは、次の帝釈寺のことを説明したものです。

上野 こっちの方にかかるわけですか。この場合の「中村之内」の中村というのは、どこですか。

平田 現在は中山(チュウサン)。谷山郷の中村の意味。

米原 「中(カ)」ですね。山田と一緒になって中山というようになった。

平田 中村と山田が合併して中山という地名を生み出した。

上野 昔、住んでいたのだけど気付きませんでした。(笑い)

米原 今でもあすこの辺りは、「中(カ)」と言います。

上野 皇徳寺は、これは？

平田 皇徳寺団地になっている。

米原 寺は団地の下の方。

上野 実際、そういうお寺があったのですか

池田 そうです。懐良親王の菩提寺として建立されています。

平田 皇徳寺城というものもあるね。

小園 以前視察に行きましたよ。竹藪の中に

墓石が転がっていましたよ。

小山田 中郡と同じだな。

池田 そうですね。中村と郡元で中郡。

小園 しかし、どうなんですかね。皇徳寺はあの広範囲の地域だったのですかね。というのは、鎌倉時代に五ヶ別府村というのがあります。皇徳寺の周辺は五ヶ別府村なんです。だから五ヶ別府村に入っていたと思うのですが、皇徳寺はほんの一カ所だけで、団地名としては。

平田 大きな名前を付けたのだよ。

小園 大きな名前を付けたんでしょうね

平田 苦辛(クラ)城の下でしょう。

上野 宇都というのは？

平田 宇都は迫よりちょっと狭い所。

上野 迫と宇都の違いは何かあるのですか？

平田 さあ、そこは難しい。

上野 こういう所だったら迫、こういう所だったら宇都というのは。

小園 迫と言ったら、

平田 やや広いでしょう。

小園 谷間のくぼんだ所をいう。

米原 袋状になっているような所。

小園 宇都というのは先はとがっていて閉じたような所をなんとか宇都と言いますよね。例えば大根占に神之宇都というのがあります。河上神社の横にですね。峡谷になって行き止まりなんです。それを宇都と言いますから。これは一つの例ですけど。宇都とかホッとかがいろいろありますから。

平田 ホキは深いから。

納 鶴戸神宮。あゝいう地形の所は、宇都でしょう。うしろの方が行き止まりになってるのだから。

小園 あの鶴戸は洞穴のウトのような感じがするけど。

平田 宇都越という地名がありますから道につながっている。迫と言ったら水田があったりするから、わりに広い感じのシラスの浸食された所。宇都はもっと狭い所じゃないかな。

小園 迫と言え、丘の上の平べったい所を原(ハ)というのと対照的。迫は原の下にある。

平田 自然地形名はなかなか拾う気になれなかったのだけど現在迫とか宇都を拾いあげつつあります。

上野 此处に宇都が三つ続いているから。

平田 寺ヶ宇都、諏訪宇都、万田ヶ宇都。なるほど。

上野 周囲に宇都はない。宇都は此处だけだから。

平田 宇都を通る道があったのでしょうか。

青柳 此处を流れる川は何というのですか。

小園 谷山のは永田川か。

坂本 木之下川というのです。

小園 そうしたら永田川は下流の方をいうのですか。

坂本 下流だけを言います。木之下部落から上は全部木之下川というのです。私はあすこに田圃を持っているもんだから。

平田 それならば確かでしょう。(笑い)

小園 あすこの水田地帯も氾濫原ですよ。恐らく洲の上に家が建っている。高速道から下りて来ると見えるのです。トヨタの会社の辺り一帯は氾濫原だったのだろうと思って眺めています。

松浪 先程、山を削って建てたと説明がありましたが、その辺がよく判らなかったのですけども。削る以前の山はどうだったのか。

池田 お寺のすぐ近くまで山があったとその

方々は言います。現在、寺跡は普通の墓地と五輪塔なんかばらばらになって山積みされています。古いのが残っていますが。

松浪 山を削って軍需工場が出来たと聞きましたが、あれは多分昭和19年頃だったと記憶するのですけど。田辺航空ですか。

坂本 田辺航空の会社を造る時に今の谷山中学校から一と西側なんだけれども相当削りました。そして右側の方に工場とか岩下とか千々輪城なんかがあるんだけどあすこはほとんど岩山でした。そして昔は船着き場だったとかいうような話もあります。あすこの石は全部取りました。本城・岩下の石を取りました。そして土はさっきの話の西側の方を削って取っております。もう一つ小さな丘があったのです。本城・岩下の田圃側に現在不動寺農協というのが出来ているのだけれども、その手前の方に小高い丘があったのです。モイどんみたいな形で私たちは接していました。その近くに橋口という方々がおられて、瓦なんかを焼いておられました。そこは軍需工場のために削ったのではなく、その家を造るために削ったのです。

平田 袋を回しますから、会費を入れて下さい。あと十数分ありますから何なりと

池田 これは人数分ないのですけど回します。私は実は個人タクシーの運転手なんです。これを作りましてね、興味がありそうな人に差し上げるのです。そうすると皆喜ばれます。このことが南日本新聞に載ったりしまして、それでKTSから電話があったのです。地名とか名字とかについて話して頂けませんか、ということでKTS

に行ったのです。そうしたら西郷さんの先祖について話してくれと言われたのです。西郷さんの先祖については知りませんので、平田先生が詳しいと話したことから番組(消えた鹿児島さんを探せ)が出来た次第です。

平田 西郷さんの先祖の説明をしたら頭を抱えて「難かしか、まとまらん」というのです。

「うーん、鹿児島に鹿児島さんが居らんどね」と話したら、それに飛び付いて鹿児島姓のルーツ探しが始まったのです。だから二人が前後半で出て来たのです。

池田 それで番組では鰻池に鰻さんという人がいるので、そこへ行こうとの設定だったので。鰻さんという姓は西郷さんに私たちにも名字を下さいと言ったら、西郷さんが鰻池だから鰻さんにしなさいと言ったということ、私は言われたのです。それは出なかつたから良かったのですけど、この間山田尚二先生と一緒に史談会で南薩を巡ったのです。その時の話で、鰻門という門名があったことで出来た名字で、西郷さんが鰻を名乗れと言ったわけではないみたいです。

小園 鹿児島には「鯨」という姓はないでしょう。

平田 「鯨」は聞かんね。

小園 福岡とか熊本はあるんですよ。それを後輩が調べているもんだから。出水地方のものを眺めてみたけど、なくて。鰻というのは鰻池があるからね。

米原 熊本には健軍付近に「鯨」という地名があり、鯨伝説もあるようです。

小園 皇太子殿下が好きだとかいう話です。

坂本 薬師堂という所は現在公民館になっているのですけれども、その中に薬師如来像が残っている。

平田 ああ、残っているんですね。

池田 町とか郡の名前は鹿児島の人には読めま  
すけど、大字になるとそこへ行ったか、何か  
つながりがないと。

坂本 そして庭の方に金剛寺という寺の  
明治初めに壊したいろんなもの、石像など  
が置いてあるのです。それから薬師如来像  
を立てる時、一緒に付いて来た「難波田」  
という人々、ここにもちよつと書いてあり  
ますけれども、今その子孫だという人々は  
「みわだ」と名乗っています。十七軒ぐら  
いあります。

池田 どんな字を書くのですか。

坂本 簡単な「三輪田」。

西田 門名じゃないですか。

坂本 門になったのですけど最初はそう  
でなかったみたいです。後から門になった  
という話です。あすこは薬師とか波之平門  
それから内園門、小園門などがあつたよう  
です。終わり頃その門（難波門）は出来た  
らしいのです。

池田 難波(ナニ・ナバ)という姓はありま  
すよ。私の教え子にもいます。かなり南薩  
の方に多い。

坂本 谷山には難波はないですね。難  
波田だけです。

平田 難波と言え、伊集院高校に。

小園 現在、南高校にいます。

平田 他にありませんか。

池田 地名のものは面白いと思いますが  
如何ですか。

小園 私にも下さい。

池田 後日。

平田 これらは他県の人には読めないだろ  
うな。

池田 そうなんです。鹿児島の人々でも  
半分しか読めません。

平田 私は全部読めますよ。(笑い)

池田 町とか郡の名前は鹿児島の人には読めま  
すけど、大字になるとそこへ行ったか、何か  
つながりがないと。

平田 これは他県の人には悲鳴をあげる。  
納 39番の汾陽。

池田 「かわみなみ」

納 これは阿久根に行ったらありますね。  
河南源兵衛。

小園 都城の江夏もそうですね。

西田 私の知り合いに永里が二人おります。  
いつかあなたの話を聞きたいとのこと  
です。古石塔の会で伊地知のことをちよつと話された  
のでしょう。そういうことでした。

坂本 「名」というのがあつちこちにある  
ますが、何故ですか。串木野名とか中名とか。

平田 そういうことは、こつち（小園氏）の  
方が詳しい。

小園 一つの地域の耕地の名前でして、特定  
の人が持っている一つの所有を示す呼称。大体  
中世のものですけど。

坂本 広辞苑に大体そういうことが書いて  
ある。(笑い)。三種類ぐらい書いてあるもん  
だから、正しくはどれかなと思って。そういう  
荘園の名残でしょうか。それから名字になる。  
それから、すばらしい、偉い、そういうのから  
来たと広辞苑にはあつた。

平田 それ(有名)はないだろう。

小園 鎌倉時代に和田名というのは出て来な  
い。だから、後のもの。

坂本 やっぱり、荘園。そういう関係でしょ  
うね。荘園で集めるというか、伊集院みたいに  
物を集めた場所ということでしょうか。

平田 上名・下名と分けたりする一つの単位  
・区分じゃないでしょうか。じゃー今日はこれ  
で終わります。



御所ヶ原城周辺字絵図

一、薬師如来、木像高サ老尺余

脇立日光月光并十二神  
但仏鉢破損

一堂作四敷三間三尺 茅葺

但往昔ハ四間四面之コケヲ葺ト云々右薬師如来難波津ヨリ  
御下リ為被成之由候彼方ヨリ付添人老人罷下リ金剛寺辺ニ号  
難波田門ト居付為申之由其門名于今御座候私先祖之是枝盛敷  
坊へ 竜伯様天鏡之法御伝受被送之砌右之嫡子は枝浄学坊永  
野武敷坊彼兩人相伴トシテ右之法伝受被仰付右於薬師堂御伝  
受為申上之由其内右浄学坊嫡子ニ存之字ヲ御免許ニ而存長坊  
ト名ヲ被成候其以後 竜伯様ヨリ為御代入繪存長坊へ被仰付  
左文字ノ御脇差一ツ法螺ノ御貝一ツ并領仕蜂中首尾能相勸罷  
下リ右拝領之二種損申候得共于今格護仕候且亦上福元名之内  
小園門三村御寄進之由候得共誰様ヨリ御寄進ニ被遊候趣相知  
不申候彼ノ金剛寺之儀ハ元祖代々之菩提所ニテ御座候得ハ私  
領其内ニ立置申候其節先祖持高八町余内三町ハ和田名五町ハ  
上福元名彼内ヨリ薬師如来江為御仏餉供田番田修繕田五段金  
剛寺へ相付候然ル処私ヨリ三代前之浄学坊代ヨリ漸々ト及通  
追候右之御仏餉供田ニ難付置仕合ニ而茂御座候哉寺ニ衰微致  
シ其時分之任侍文芳藏司後任梅尾藏司迄ニ而寺終リ申候得ハ  
花香大方ニ罷成候代々之儀ニ御座候得ハ祖父存長坊代ヨリ明  
学坊ト申山伏ニ花香申付置候彼山伏終リ三楽坊ト申山伏相勸

神祇神性武祿 地頭飯屋ヨリ子ノ万五町程  
但并領高寄附高祭米無御座候祭礼十一月十五日由權持  
知不申候

右同村之内笹貫  
一、池ノ尾権現一社 右同 同人  
地頭飯屋ヨリ子ノ方三拾町程  
并鉢鏡一面  
但書同断祭日相究不申候

右同村之内堂園  
一、河弥陀堂一宇 右同 堂園ノ休江門  
但 但石座像高サ老尺位由緒相知不申候  
右同村之内波ノ平  
一、地藏堂一宇

木像高サ七寸程 堂作三敷三間茅葺  
右往昔舞翁寄ト云寺アリ金剛寺ト同坊式  
右同村之内橋ノ口  
一、地藏堂一宇 右同 小迎之藤左衛門  
但木立像高サ老尺位由緒相知不申候

右上げ元之内薬師堂 右同山伏 是枝三力坊  
地頭飯屋ヨリ子ノ方拾町程  
木立像高サ老尺余由緒相左之通  
金剛寺

「谷山講記」

申候彼人終リ私弟是枝連昌坊ニ花香申付于今勤行申候彼人  
終リ是枝慶存坊勤行申事ニ御座候  
右同村之内不動寺  
一、地藏堂一宇 右同永里門ノ三右衛門  
但木立像高サ老尺五寸位 由緒相知不申候  
中村之内皇徳寺末寺  
一、帝釈寺 地頭飯屋ヨリ亥ノ方尾里余  
但寺領高寄附高無御座候開基年月日相知不申候  
開山米船撮大ヨリ寛峰迄拾三代当分無住

右寺内  
一 観音堂一宇  
但仏鉢木立像高サ七尺余日蓮之作之由  
右寺内  
一 不動明王一鉢  
但木立像高サ三尺式寸  
脇立二鉢式尺三寸ツツ日蓮作之由  
中村之内皇徳寺末寺

一、昌寿庵 地頭飯屋ヨリ子方三拾四町程  
但寺領寄附高無御座候開基年号相知不申候  
一 開山三翁局ヨリ朴瑞迄拾四代当分無住  
同村之内  
一、白山権現一社 右同社人 奈良迫右膳

1 この『帖佐来歴』は薩摩藩の史学者伊地知季安(一七八一—一八六七)が、文政十三年(この年十一月に天保と改元。一八三〇)三月に記述した草稿本である。

奥書によれば、本田親章なる人物の依頼を受けて、彼が短期間帖佐に在勤する間に同地の名所旧跡を採訪する際の参考資料としてまとめたという。

内容は、標題が示すように帖佐に関する諸々の事柄を、第一から第十二まで十一の項目に分けて記述してあるが、更に自身で細々と補筆修正追記を行なっており、草稿完了までに相当の考証を加えたことが伺える。

昭和四十七年一月、町の文化財に指定された。

1、五味克先生(鹿兒島大学名誉教授)によると、『帖佐来歴』は草稿完成後更に季安自身によって、末尾に後補追記された部分があり、これらは後人の手によって書写され、明治になつて季安の子季通らが編さんした『鹿兒島県地誌備考』の帖佐

の項に採録されているという。

## 帖佐来歴

### ○林清庵

今鍋倉村之内二島地志反六畦餘御免地アリ。総禪寺支配ナリト

云ヘリ。季安、福崎氏ノ古系図等ヲ按ルニ觀應二年辛卯九月二

十八日、輪岳公筑前金隈二軍ヲチシテ一色右馬頭範光ノ軍ヲ助

ケ玉ヒ、御手ヲ負ハセラシ既ニ御戦死ニ究メラシメシ時、從軍シ

タル伊地知彈正忠季隨其以前道鑑公ト御同番ノ士ナリケルガ罪

ヲ尊氏將軍ニ得テ獄中ニ危カリシヲ、道鑑公御恩地ニ仰カヘラ

レテ御訴メシ玉ヒシ御恩故ニ罪ヲ免サレケレバ、誠ニ命ノ主ト

テ下向シテ臣事セシ者ナルガ、則自カラ願ヒテ輪岳公ノ御鑑ヲ

キカヘ、詐テ島津又三郎氏久ト呼ハリ御身代リニ討死シケリ。

其時彈正忠カ自ラ隨ヘシ家臣福崎主税助能廣ニ申付、汝ハ如何

ニモ奇計ヲ廻シ、公ヲ難ナク御供シ歸レトノ主命ヲ守リテ、能

廣ハ乃チ博多ノ出井ノ道場ニ走込、公ヲ匿シ、御手疵ノ看病シ

ヌイラセ、頓テ扁舟ニ棹シ、ヤウヤウ御国ニ遁レ下リケレバ、

道鑑公大ニ悦バセラシ、彈正忠カ菩提ノ為トテ寺ヲ鹿兒島今ノ

堀ノ内ニ建ラシ、林香庵ト名ツケテ尼寺ニシテ其恩ヲ報セラシ、

又主税助ハ御内ノ者ニ召出サシ特ニ知行モ下サレシト云ヘリ。

其時主税助モ亦一寺ヲ帖佐ノ自ノ知行所ニ建立シテ、林香庵

ノ林ノ字ヲ取り林清庵ト名ツケ彈正忠カ菩提ノ為ニシ、又主税

助自ノ菩提ノ為ニハ宝動寺ト云ヘルヲ谷山ニ建ケルトノ趣キ

其系伝ニ見ヘタリ。鹿兒島ニアリシ林香庵ハ尼寺タリシコト、

上井覺兼日記天正三乙亥十一月廿七日ノ條ニ、奈良木伊賀守ハ

臨江庵ノ父ニテ、関豊前守ガ下女一両年前臨江庵ニ走入タルト

ノ口事一件詳ニ出タリ。其後元和六年四分一土地ノ頃無縁ト為

リ廃壞セシト考ハル。谷山ノ宝動寺モ今上福元村ノ地名ニ宝動

寺トテ三門許後二山アラル地アリテ、僅ニ地藏堂遺リ居ケルトゾ。

地藏ヲ法幢ト云ヘシハ法幢寺ナラント伊地知猪兵衛ノ咄ヲ聞ク

リ。斯ノ帖佐ノ林清庵イカニヤト曰頃疑ヒ想ヘルニ、今尚御免

地アルヲ聞テ季安等先祖菩提寺ナレバ一入歆喜シテ其采由ヲ粗

此ニ述ル也。加世田唐仁原ノ西照寺ハ彈正カ屍ノ流シ寄シ所ト

テ、于今其墳寺アリ。尤彈正御名代ニ戦死シテ、博多土井ノ道

場ニテ御手疵看病シヌイラセシコトドモハ、山田聖榮自記并同

人自安ナド云古書ニ明證アリ。

此一段六畦餘ノ寺地、今総禪寺島ニモ候ヤ。元來彈正カ菩提ノ

為メニ其家臣福崎氏ガ知行ノ内ニ建タル由緒本文ノ通ナレバ、

彈正忠カ法名光輝都仁庵主ノ位牌ドモハ無之乎。ナクシバ建テ

テ其地ノ毛上ヲ手向ケ祭リタキコト也。主税カ法名ハ知ラズ。

子孫谷山ニ居テ今ハ伊地知ナリ。

# 地名研究会報

第68号

平成12年9月3日

鹿児島地名研究会

I. 第68回例会 平成12年3月5日(日) 於教職員互助組合会館和室

(出会者) 青柳俊二・打越和郎・小川秀直・小山 更・小山田 稔・川野雄一・

久米雅章・坂本 誠・築地夫人・永坂芳彦・西田春人・平田信芳・

村山謙一・米原正晃(計14名)

II. 大日本地名辞書読会 P. 1749~P. 1751

[問題となった地名および事項] 高鍋・那珂郡・新田・院・日向国の郡郷・

鹿児島県の古代史・佐土原・春山・日明貿易と臨濟寺院

高鍋 平田 今日読んだところは児湯郡の残りの夜開郷と高鍋、それから宮崎。高鍋は和名抄には財部とあるわけですが、秀吉の時代から高鍋に変わっているのです。秀吉の右筆が聞き間違えて高鍋と書いたのですが、それでも平気で高鍋と書いて秀吉からの書状が来たものですから、それに屈して高鍋という名前になったようです。こんなのは珍しい例です。間違っただけのはっきりしているわけでは

平田 今日読んだところは児湯郡の残りの夜開郷と高鍋、それから宮崎。高鍋は和名抄には財部とあるわけですが、秀吉の時代から高鍋に変わっているのです。秀吉の右筆が聞き間違えて高鍋と書いたのですが、それでも平気で高鍋と書いて秀吉からの書状が来たものですから、それに屈して高鍋という名前になったようです。こんなのは珍しい例です。間違っただけのはっきりしているわけでは

新田 西田 新田(にうた:にゅうた)は「にった」ではなく「にゅうた」というのが正しいのですか。

平田 関東が「にった」ですね。

西田 関東が「にった」ですか。

平田 こちらのほうは「にいだ」とか「にゅうた」です。

西田 読み方はどの辺で分かりますか。

平田 岐阜県と滋賀県の堺。

西田 あの辺ですか。

平田 その意味でも関ヶ原は重要な所になるのじゃないでしょうか。これは亡くなった本田親虎先生から聞いた話ですけど、川内の新田神社も神主さんが祝詞を読む時には「にいだ」と読むのだそうです。「にった」というのは新田義貞が有名になってから「にった」と読むようになったので、鹿児島県の読みとしては「にいだ」か「にゅうた」。一般的には「にいだ」。

米原 こちらは新山と書いて「にいやま」と読む。

平田 「にいやま」がありますね。

平田 次の那珂郡というのは、上・中・下の中に由来します。「中」をそのまま引き継いで来ているわけですから那珂郡が日向国の本来の中心地なんです。那珂郡の中心地というのは油津・飢肥、あの一帯になります。

小山 南那珂郡ですね。

平田 あゝ南那珂郡。いずれにしてもあの辺が日向国の中心であったということ

院

坂本 「院」について、これには詳しく書いてあります。県内に伊集院とか祁答院とか「院」の付く地名がだいぶあります。

「院」という意味はこのようにして判るのだけでも、寺院の院、それから病院の院、これらはやっぱりそういうようなものを引きずって付けられたものでしょうか。

平田 まあ、そうでしょうけど。日本語ほど次から次へと用例の広がる言語はないと思います。最初の意味は倉院：倉庫、垣根で囲った所。それから始まるのでしょけれどね。そして解釈が広がっていく。寺院はちゃんと囲まれています。病院も隔離していた時代があります。

小山 病院・薬院というものは、新しく生まれたものではありませんか。病院という言葉は古い本では出て来ないでしょう。良い言葉は日本ではすぐ真似して使うでしょう。

平田 最近は美容院があります。(笑)

米原 お寺の場合は寺院よりも坊の方が多い。

平田 これは『名字と日本人』(文春新書)、最近買った本です。名字を扱った本の中では歴史的な眼でみているので、参考になると思います。紹介しておきます。

日向国の郡・郷

平田 宮崎県の部分を読んでいて、宮崎県：日向国は郡・郷の移動が激しいとの見方がされていますが、そういう見方でよいのかな、と思います。宮崎県を調べてみる必要もあるなと思いますが、よその県のことには口出しは出来ませんので、やる時には九州全体を取り上げてやらなきゃ

ならない。その中で宮崎県を取り扱うのであれば宮崎県の人にも納得するでしょうが、鹿児島の方が宮崎の研究の解釈はおかしいぞと発言することは出来ないでしょうから。これは大変な作業だなと思います。

私は大隅国・薩摩国を手がけましたが、現在の行政の領域とそんなに変わらないのです。現在の行政単位と昔を比べて整理をすれば、そんなに難しくはないと思うのです。鹿児島県の場合も未だに研究者によって解釈が分かれています。大隅国では大隅郡の範囲ぐらいだと思います。大隅郡についての考え方は一人一人違っています。

鹿児島県の古代史

平田 寝耳に水の状態で聞いたのですが、知事部局が鹿児島県の古代史は手薄との認識を示し、編集のための予算を組むらしいのです。鹿児島県史は昭和14年～18年段階のままですからね。未だに天孫降臨の話がそのまま載っている。あれが権威のある本になっていますからおかしな話です。5年かけてやるというのですが、理解は甘いなと思います。確かに縄文草創期あたりは数多くの遺跡が出て来ていますから書き直さねばならんし、神話も書き直さねばならんと思います。中村明蔵さんが南日本新聞に連載したことが引き金になったと思います。

全体的にみると、鹿児島県の古代史は歴史考古学の分野が手薄だなと思うのです。というのが薩摩国府・国分寺・大隅国府を私が手がけて30年以上経つのですが、私の段階からそんなに進んでいないわけです。郡衙はほとんど手をつけていませんし、駅家だってほとんど確認していない状態です。そういう中で5年間でどうやって書き上げるのかなと思います。知らねえぞ、というわけにはいかんでしょうが、縄文に

比べると歴史考古は話にならない。

鹿児島県史として誇るものを残すためには出水郡衙とか高城郡衙、日置郡衙、阿多郡衙、大隅国では嘯吟郡衙とか大隅郡衙などを突き止めてからやらないと、満足出来ないのではないかと思います。それを5年間でやれって、逆立ちしても出来るもんじゃない。

最近では開発が進みましてね、そのために鹿児島県埋文センターは発掘要員を七十数名抱えているそうです。私が追い出される時は十数名しかいなかったのですがね。まあ増えたわけですね。ところが新聞で報道されるのは、ほとんどが上野原より古いもの。立切遺跡や水迫遺跡が出て来たりで、盛んに報道しますが、歴史考古の方はほとんど情報が出て来ない。そんな状態なのに5年間でどうやってまとめあげるのかな、と思います。まあお手並み拝見ということでしょうかね。全部をまとめる人は大変ですよ。とてもじゃないが、うまくいくかなと危惧を感じます。宮崎県史は20年近くかけているようです。また現段階では神話の分析まで踏み込めないでしょうから、現段階で処理出来るだけの情報をまとめるということでしょうね。さっき言ったように郡衙とか駅家の跡を抑える作業をしない限り、満足のいく古代史は作れないんじゃないかと思います。

私は鹿児島県史をしょっちゅう見ているのですが、第一巻の後半から以降は相当レベルの高いものです。中世とか近世の記述は、どんなに優秀なスタッフを集めても昭和の鹿児島県史を超えるような内容は出来ないんじゃないかと思います。問題は

古代だけです。

佐土原

平田 宮崎県のところで何かありませんか。例えば佐土原は里原が訛ったというのですが、どうですかね。里原という地名は他にもありますかね。

坂本 宮崎の人たちは「サドハラ」と言いますか。鹿児島では「サドバル」とか「ムラサツバイ」、「バイ」と言います。「サドバイ」と言いよったかなと、そこがちょっと気になる。

平田 「バル」でしょうね。

小園 新田原がありますね。

平田 問題は、サドが何か、ですね。サドが里ならば佐渡島も「里」だということになる。日本全国の「サド」を拾いあげなければならぬでしょうね。まだ拾いあげていませんのでそれ以上のことは言えません。

春山

久米 初めて参加させて頂いたのですが、私は春山という所に住んでいるのです。春山という地名がちょっと気になっているのです。春山は修験の「春山入り」という言葉につながっているのか。それとも「壑：ハリ・ハル」で壑った山：ハルヤマ。春山という地名を鹿児島県で探してみたら、日置郡に一つ、鹿児島郡に一つ、それから国分の止上神社の横にある重久の春山がありました。さらに全国的に春山を見ますと、結構あるわけです。

福島県の田村という所に春山があるので、問い合わせたら修験が入って来ているとのことでした。

いつ頃から「春」という形になったのか、春山という名前があるのか、と。いろんな墓標とか民具的なものを当たっているのだけど、なかなか確証的なものを得ない。『伊集院由緒記』

にも江戸の頃に春山郷・春山野という地名が出て来ます。春山には山伏山という山もあります。春山小学校を昭和38年に出られた方も関心があり、竹下校長先生も春山の郷土史を調べておられるようです。その結果、修験が入り込んでいる所だ、と言っておられます。

実際、私たちがどういういわれの名前なのかを掘り下げていく時に、いろんな異説が出て来ます。自分がそういう気持ちで探っていく時、その先入観に何でも引きつけて行くわけです。

伊地知氏が垂水に持って来たオンダコラ祭りなどもいわれを探ってみました。いわゆる福井県の伊知地という所がそのルーツになります。伊地知というのは伊豆の残党が入り込んだ場所だという説があります。宮崎県の伊地知重隆さんという方が本を出しておられます。伊地知家のルーツを探っていくと、イツチノタケヒコに至ると、掘り起こしておられるわけです。

どういう観点に立って地名というものを私たちは探すのか。自分の研究を外側から固めて行くということは、ある意味では我田引水的なこともあるのですが、そういう確証というか、地名のいわれを、これはこうだと判断出来る手がかりは、どんなところから持ち出して来ればいいのかと、非常に迷います。

平田 そうですね。日本の地名学というのは、民俗学を樹立した柳田国男が民俗学の一分野として地名の中から民俗的なものを探っていくとして取り組んだのが最初です。柳田国男自身は、日本全国の字を初め、いろんなデータを集められるポスト

にあったので、相当数集めたようですが、結局『地名の研究』を書く段階で、これは学問として成り立たんと彼自身が投げだしているわけです。民俗学の流れを汲む人たちが谷川健一さんを中心に日本地名研究所というのを作っています。それから、もう一つは地理学の一分野として地名学の構築が進められています。二つの流れがどうもうまく行っておらず、日本の地名学はまだ固まっていないのが実態です。

私自身は地名を手がかりに歴史を探っていくという立場です。それで先程紹介した『名字と日本人』の著者も、名字を歩く地名だと解釈しているのですが、この人は名字を通して歴史を知ろうという姿勢の人です。名字の研究も歴史を探ろうとの立場に変わって来たなということで、この本を紹介したわけです。

鹿児島県の地名で、例えば始良とか肝属とか曾於などは全然意味が判らないのですが、逆にみるとこれらは歴史が古いことを意味します。奈良時代には既にあつた地名です。私は地名を通して鹿児島県の歴史を探っていくと考えています。まだ判らない郡家とか駅家。庄司とか政所の位置とかを探っていくのが、地名を調べて行く目的だと思います。

地名に昔の言葉が残っていますから、これを手がかりにすれば古代の日本語とか中世の日本語につながって来るかも知れません。しかし、小学館の日本国語大辞典などを見ると、各語句の終わりの方に語源説が沢山あげてありますが満足する説はないようです。日本の語源学は進んでいないなと思います。そう言った中で地名を研究対象にするのは、やっぱり歴史を調べるのが中心にならざるを得ません。

#### 日明貿易と臨濟寺院

平田 先程「春山」が問題になりましたが、

春に修験者が登る山という考え方と、開墾した「墾山」という考え方があります。私は最近、伊集院について見直さなきゃいけないなと思っていることが一つあるのです。やがて文字になって来ると思うのですが、沖縄国際大学の高宮先生が古希記念論文集を出されるので、それに原稿を送りました。私が注目したのは沖縄に臨濟宗と真言宗の寺が古くから見えるものですからそれを整理したのです。そのついでに鹿児島県の臨濟寺院を整理したら、どういふのが出て来たかということ、臨濟寺院の中で一番の大物は伊集院の広済寺というお寺でした。伊集院広済寺の末寺に、ですね。(板書)。伊作多宝寺を初めとして坊津海印寺、山川正龍寺それから船間島の臨江寺などです。もう一つ臨濟宗の寺院で重要なのは志布志の大慈寺です。それから国分の正興寺。別格に鹿児島の大龍寺があります。これらの中で一番大きな寺は伊集院広済寺なんです。

臨濟宗の寺は16世紀に日明貿易を推進し琉球貿易と関わった。そのような時代背景の中で伊集院広済寺を支配したというか、こことつながったのが伊作島津氏、すなわち島津忠良一貴久父子だったと考えられます。島津の家柄からいうと分家の分家ですが、それが本家の実権を握ることになるのは、臨濟宗寺院をしっかりと握っておってその財力が背景にあつたから島津忠良(日新公)・貴久父子が薩隅日の支配者になり得たということです。

そこで伊集院広済寺というのが本来どこにあつたのか。伊集院には古城という所があるのじゃないですか。その辺が昔の伊集

院の中心であつて、現在の伊集院はいわゆる一宇治城が出来てからということですね。そうすると、さっき久米さんが疑問に出された春山はそれに近いということになります。

久米 広済寺・古城の話を出されましたが、あそこに千手院という……

平田 私は現地に行ったことがないので知らないのですが。

久保 妙円寺の末寺になるということですけど。大内氏との関係よりも、まだちょっと古い話になるのですか。

平田 そうですね。日明貿易に島津氏が関わって来るのは細川氏との関係ですよ。応仁の乱で細川氏と大内氏が争うでしょう。細川氏に付いたのは堺の商人ですね。大内氏に付いたのが博多の商人でしょう。日明貿易は最初、大内氏が握っていたわけですから博多の商人が独占していたのです。ところが応仁の乱を契機に京都・堺の商人は細川氏と結び付いて、大内氏の方を通らずに薩摩すなわち島津の方のルートを通って行くようになる。そこで島津氏が急速に成長して来るわけです。

それ以前は日宋貿易・日明貿易に薩摩の硫黄は重要な商品だったので、硫黄を通して間接的につながっていたわけですがけれども、応仁の乱後、細川氏とのつながりで南島ルートが急速に伸びて来る。それに関わったのが臨濟宗の寺院で、ここにあげた大慈寺とか正興寺とか。大龍寺は最も新しいですね。伊集院の広済寺、それから坊津の海印寺という寺が大きく関わったのではないかと思います。

坊津の海印寺を郷土史で調べても載っていないし、三国名勝図会にもほとんど書いてないのです。結局、一乗院だけ大きく書いてあるのですが、あれは真言宗の寺です。真言宗よりも

むしろ臨濟宗の寺に注目すべきだろうと思います。というのは臨濟宗の坊さん達は漢籍を一生懸命勉強していた当時では一番の学者でしょうから、文章で中国の人達と筆談がやれたのです。外交使節として臨濟宗の坊さんが出かけて行ったのです。その意味で鹿児島県の臨濟宗寺院は見直す必要があるなと思っています。

伊集院広濟寺の元の寺、それから古城。あの一带を見直す必要があるなと思っています。そこで、あの一带の小字絵図あたりからの復元とか、現地を歩いての遺物散布状況とか、そういうのを確かめていけばいいのじゃないでしょうか。

久米 先生は臨濟宗の話がされますけどね、あの辺は曹洞宗の寺が多いのです。曹洞宗の末寺というのが、直林寺。それから日吉の方の深固寺とかなんとか。

小山田 深固院。

久米 深固院というのですかね。それが広濟寺とは全く流れが違うわけですね。時代的なものも違うし、流れも違う。

## 峠の地名

峠の地名についてお話し申し上げます。地名には関心を持っているのですが、調査をしたことがなく、興味だけで一向にやったことがないのです。平田先生から何かせよということで、ばたばたと作って来ましたが、内容があまり伴わないような発表になったようです。いろいろと教えて頂ければと思います。

峠にどういうものがあるだろうか、と

平田 あのね、曹洞宗と臨濟宗は時代も視点も異なる。島津氏の支配体制が整ってから各郷ごとに祈願所と菩提所という寺院が置かれるのです。島津氏の支配が確立して来ると、一番重要視されるのが真言宗の寺なんです。それが祈願所として置かれます。その村とか郷の幸福を願う寺、これが真言宗の寺です。それから菩提所と呼ばれるもの：菩提寺があるのですが、これが曹洞宗の寺です。江戸時代になってから真言宗と曹洞宗が重視されるのです。

これはどういうことかという、島津の支配体制ががっちり固まって来ると臨濟宗寺院の財力に頼らなくてもいいわけです。殿様が思った通りに進めて行けばいいのです。そこで、真言宗と曹洞宗の寺が大事にされた。貿易の方は御用商人が動くことになるのです。御用商人として活躍するのが、阿久根の河南、市来の海江田、高山の重、志布志の中山、指宿の浜崎太平次などの商人が出て来るわけですね。そのように考えたら歴史的な流れも理解出来るのじゃないでしょうか。

じゃー、前半はこれくらいにしましょう。

### 小川秀直

いうことを少し考えたのが今日の話です。

峠にはよく妖怪が出るという話があります。峠を通っている人から幽霊が出たという話がよく聞かれます。例えば、入来峠は有名な妖怪が出る所でよく話を聞きます。ある雨の夜にタクシーが一人の女性を拾った。車を飛ばして入来峠に差し掛かったところが後ろにいるはずの女性の気配がしない。車を止めて後ろを見たら女性はいなかった。しかし座席はぐっしより

濡れていた、と。この話はよく聞くので、大抵の方はご存知かと思っています。

知覧町に野呂尾峠という所があります。これもまた話があるかと思って、聞いてみました。男の連中が野呂尾峠に登っている色々な物を捨てていたら、後ろに怖い顔をした山姫が立っていたのでびっくりして逃げた。そんな話が伝わっております。あちこちの峠でそんな話が聞けるのじゃないでしょうか。峠という所はどうも何か出るような所のようなのです。

峠という文字は、ご存知のように国字であります。山を上下したと書きます。日本で出来た文字です。いろいろ辞書を引かまして書いておきました。そこに書いてある通りなんですが、要するに山道を登って上下したような所を「峠」というようです。広辞苑には「タムケ(手向)の転」と出ています。通行者が道祖神に手向をすることから来たんだというふうに書いてあります。手向については万葉集にいっぱい出て来ます。「近江道の逢坂山に手向けして、我が越えゆけば」(万.3240)「周防にある磐国山を越えむ日は、手向けよくせよ荒しその道」(万.567)「砺波山手向の神に幣奉り、我が乞ひ祈まく」(万.4008) 峠を越える時は何か手向をして通ったもののようなのです。手向の神というのは「旅行者が道中の安全のため幣を手向けて祈祷した神」であります。

三代実録にも元慶二年(878)の条に「授越中国正六位上手向神従五位下」とあり手向の神にも位が授けられています。和名抄には「道神、太無介之加美」と書いてあります。

大言海を引きますと「たうげ(峠)：手向ノ音便」と書いてあります。やはり手向から来ていると書いてあり「上り下りノ山ノ境」で「路行ク人ノ国津神・道神ニ手向ケスル所」と書いてあります。中山太郎氏は『日本民俗学辞典』に「手向神は即道祖神だ」と書いております。『日本民俗語大辞典』を引きますと、石上堅氏は「岡越之道の途中をいう。その頂上によく道祖神が祀られている」としております。

それで峠の語源というのは何だろうかと思うのですが、いろいろ辞書をみますと、どうも二つ説があるように思います。タムケ(手向)からトウゲ(峠)になったんだという説、広辞苑とか大言海などがそういう説明です。もう一つ、タワ・タヲ・トウなど、撓むの転訛、タワゴエのつまったものだという説。『日本民俗語大辞典』を引きますと、このように出ております。他にもあるのかどうか、よく判りません。どちらが正しいのか、私は後の方かなと思ったりもしてるのですが、どうなんでしょうか。いろいろ読みますと峠は手向をするようなやっぱり何か怪しげな所、怖い所だというのは感じとして判るかと思うのです。

峠を意味する地名が他にあるのだろうか、今まで関心を持って来ました。これについて説明を加えてみます。

4. 辻 辻も国字だそうです。『字通』を引きますと「交差路をいう」と書いてあります。「辻は神霊の行き通う所とされ、道祖を祭り、辻占なども此処で行われた」と。『大言海』の「つむじ」を引きますと「路ノ縦横ニ通ジタル処」、『古語大辞典』を引きますと「辻、物の合わせ目、頂上、頂点」、『日葡辞書』を引きますと、これまた「道の交差点、頭のつじ、頭のとっぺん、つじかぜ(辻風)」と出て来ます

辻では辻占などをやるというのが昔から知られているわけです。万葉集にもありまして「言霊の八十の巷に夕占問ふ、占正に告る妹は相寄らむ」（万・2506）言霊によると、あの子は私に寄って来るだろうという歌が載っています。

辻というのはどうも峠と同じように怪しげな所のごとくです。(7) 辻の事例をあげました。鬼火焚きをよく辻でやります。写真①、鹿児島市の中山では鬼火焚きを昔は此処の辻でしていた、と。40年ぐらい前まで辻に十字に穴を掘ってやっていた。鹿児島県のあちこちをまわりますと、辻で鬼火焚きをしていたとよく聞きます。辻という所は、どうも霊が集まるような何か特殊な所なのでしょう。此処で火祭りなどを行っているようです。

写真②、大根占町の池田という所です。旗山神社の裏になります。そこに辻があります。子供が坐っていますが、そこに昔辻の堂があったそうです。辻の堂というのは土地の人はカドモリサマ（門守様）と言っています。池田の守り神なのだ、と。此処にウツロな木があったような気がするのですが確認はしませんでした。現在は観音様を祀っているようです。旗山神社の木の下にも祠があり、昔は辻堂があったと言います。辻というのは交差点です。三叉路にはよく石敢当があります。魔物の侵入があるような所には、そういう物を置きます。

写真③、辻之岳。これは山川町の大山という所にあります。大山の人たちは大山のイワムラ？という認識はしているようで、ウヤマダケ（大山岳）といたりツジダケ

（辻岳）というようです。これを見ますと山の頂上もツジと言うんだということです。これを見た限りでは辻岳というのは、どうもそういう所のようなようです。

穎娃町に辻風岡というのがあります。此処は広い台地です。終戦前飛行場を造ろうとした所で、まだトーチカなどが残っています。飛行場を造ろうとしているうちに終戦になって一度も使われなかった所です。広い台地の中にぽつんと辻風岡というのがあります。これもやっぱり山の頂上を指す意味なんだ、と感じているところです。まあ聞いたのですけどよく判らず、また聞き方が悪くてあまり聞けませんでした。やっぱり風が強いのかなと思います。文字からいうとそうなのですが、広い台地の中にぽつんとある山で頂上という意味があるのかなと思っているところです。

写真⑤、甌島です。ツゾン堂（辻堂）と言います。戦後掘り下げまして二車線の良い道路になっているのですが、本来は左右に森がありまして、この森の所まで山があったわけです。随分掘り下げまして、この上の方に辻堂がありました。昔は歩いて行くわけですので、ずーっと登って行きまして辻堂の所に行って、そこで休んで柴を手向けて一休みして下りて来たということです。右の方に薬師堂とありますが、これは下の集落に持って来てあります。薬師さんは中に入っております。これが辻堂の所に置いてありました。辻堂があるから辻堂というのだけでも、どうも峠自体を辻と表現するのはないかなと考えているところです。

辻というのは三つの意味があるように思います。①交差点の辻、②てっぺん、頭をつむじ、山の頂上、③峠。

それで、元の言葉はどれだろうかといろいろ

考えてみますけども、辻：交差点から来たわけではないだろう。違うと思っているわけです。交差点のことを単に辻と言いますけども、四ツ辻とも言います。交差した所だったら辻だけでよさそうですが、敢えて四ツ辻というぐらいですから、どうもこっちの方は始まりではない、後から出たのじゃないかと思えます。何と言いましようか、突き出た所、高い所、そういうような意味が辻の元の形ではなかろうかなと考えておるわけです。それから交差点の辻に行ったのだろうかと思っているところです。

写真の2枚目の方を出してください。他に峠に次ぐ地名があるのだろうか。⑦と⑧に「越」という文字を出してあります。大浦町の越路（こえじ）という所、旧道ですけど、坂道があります。左の方は海だったそうです。下の方を埋め立てて若干新しい陸地が出来たようです。

写真⑧は穎娃町の矢越（やこし）という所です。昔は七曲がりの鬱蒼とした森の中を道路があったと言います。戦後、大きな道路が通って掘り下げられていますけど、鬱蒼とした怖い所だったそうです。全国に矢越山とか矢越岬というのがあり、いろいろな伝承があります。例えば矢越明神というのがありますが、それは八幡太郎の矢を御神体としている。岬に悪い神がいて、沖を船が通ることが出来なかったのをば、これを源義経（マ、源義家？）が弓矢で射て、それで安全に航海出来るようになった。それから矢越岬というのだとか言う伝承がありますが、矢を射たから矢越ではないだろう。やっぱり峠かな。矢を射るので

あれば守りかなんかで射たのかなと思っております。「越」というのも歌にあります。天城越とか〇〇越とか、よくあります。越というのもやっぱり峠を意味する言葉だろうなど思っているところです。

写真⑨、此処は知覧町の横尾峠と言っている所です。左の方にこんもりした岡があります。その岡は現在牧場になっておりまして、昔はもっと右の方の道路あたりまで山があったようです。戦後こういう大きな道路が出来ました。下の方は知覧の町の方に行くわけですが、この横尾峠の下は横尾という字があります。横尾峠という停留所もあります。「尾」というのも、やはり峠を意味する言葉のようです。

写真⑩、登尾峠。知覧町にある峠です。これも最近出来た新しい道路です。右側に細い道路がありますが、昔の道です。何回か改修されてこうなったわけですが、左の方の下の集落：後岳という所からずーっと登って来るのです。暗い森の道だったのをよく憶えております。

写真⑪、大崎町から志布志の方に行く途中、高尾という所でバス停があります。此処では聞き書きはしませんでした。写真だけ撮って来ました。

写真⑫、峯尾峠。これは川辺町と枕崎市を越える峠で、左のトンネルの下の方に桐木平という集落があります。峯尾というのも峠を意味する地名ではないかなと思います。

峠というのは最初申しましたように、得体の知れない所で手向をする所。とうげ、手向から峠になったのか、まあ二つあるようです。辻も交差点とか、頭をつむじも辻と言ったりしますので、そういうてっぺんを指す言葉もあるでしょうし、峠を意味する言葉も辻にはあるようです。越、矢越というものがあるようにこれも

峠を意味する言葉だろう。それから、尾。これも細長いものの末端という言葉なんですけど、やっぱり峠を意味する言葉だろう。山の裾から来たのか、峯から来たのか、はっきりしませんが、やはり峠を意味する地名ではなかろうかと考えます。他に峠を意味する地名があるのかどうか。その辺は判りません。もう少し調べてはみたいと思っています。お気づきのことを教えて頂ければと思います。あちこち調査をしないものですから、どうも資料不足で申しわけないのですが、一応この程度で終わらせて頂きます。

〔質疑応答〕

平田 ありがとうございます。どなたでも意見がありましたら。

米原 柳田先生は通山も峠の一つとしています。とおりに、とうげ。これは峠の機能の一つとして非常に重要だということを書いておられます。

平田 鹿児島県には通山という地名が沢山ありますね。

米原 大体そういう所なんです。

久米 ①の写真の辻ですが、中山のどこら辺りですか。

小川 これは、平之馬場という所です。

久米 平之馬場。

小川 滝之口のどこか、あの辺ですが。

久米 島津の賢石。島津貴久が実久に追われて加世田の方に逃れる途中、賢を洗ったといわれる所。

小川 あっちはなくて、もっとこっちです。平之馬場と私のノートには書いてあるのですが。

久米 平之馬場ですね。はい。

米原 ちょっと私もうろ覚えなんです、北見俊夫さんという人がいましたね。この人が峠の交易機能、こんな名前が付いた、とくに峠の四つの機能というのかな、そんなのを書いておられました。峠の機能の一つは、いわゆる交易です。ある決まった日にそこに行って交易をする。あるいは、そこまで行って物を受け取る。そういうことは沢山ありますよね。例えば最近でも佐多町の辺塚あたりは、今は自衛隊道路というのがありますが、道路がなかった時代というのは子供たちもみんな大尾まで行って、そこで教科書などを受け取ったというのです。そこで教科書を買うわけです。そう言った交易の場所。もう一つはさっき話されたような妖怪とか祭りなど関係する場所。峠というのが異界との一つの境界線というのでしょうか。そういう世界だということが一つ。もう一つは国見峠などのような形で、そこに行けば展望が一変して来る。

平田 うん、十国峠みたいな。

米原 そうですね。展望が一変して来る。今までのと違った世界に変わって来る。そういうような所。峠の機能のもう一つは何だったのかちょっと思い出せません。あの、茶屋などが出て来ますよね。

平田 峠の茶屋だね。

米原 はい。峠にはそういうようなことがあります。峯と峠とどこが違うかという、峯は自然の地形だけど、峠は人が関わることによって初めて峠になる。峠が峠になるというのは、人との関わりによって起こって来る。まあそういうようなことだったのじゃないかな、と記憶しています。

小川 不勉強で知りませんでした。北見先生の本も読んでみます。

平田 今日で66号まで配ったわけですが実は第1回の会合で私は峠の語源を説明したのです。

小川 そうですか。

平田 タオというのが、トウゲよりも古い。トウゲという地名は新しい。まあ室町時代に登場して来る言葉です。私が問題にしたのは、タムケ：手向からトウゲ：峠に訛ったという転訛説。そういう地名解釈をすればどんな地名でも訛ったで解決する。タムケからタウゲ（トウゲ）への変化と似ているのが、ヒムカからヒウガ（ヒュウガ）。ウとムは無相通ずるのか。ウは有という言葉だ、ムは無だ。それが同じになるとは思えない。そういうことを第1回の例会で分析したのです。これは坊さん達が山に登る登山（とうざん）・下山（げざん）。登山と下山が結び付いたら、トウゲ（峠）という言葉が出来るのじゃないか。国字も山に上と下ですから、上ると下る。そんな発想の方が面白いのじゃないかということを書いたことがあります。

今日のお話は辻をだいたい取りあげられていました。これは新しい視点です。えーと大隅の方に辻が岳というのがあるのでは？

小山田 田代の方から登る。

平田 どこですか？

小山田 花瀬から。

平田 花瀬の方から。

小山田 花瀬公園の方から根占の方に行く新しい道路の橋がある。

平田 山の上で辻になってるわけじゃないでしょう。四ツ辻に。

永山 奥さんはよく山に登いやつから。

平田 そんな話はしませんから。

永坂？ 辻岳に登ったことがあります、見晴らしが非常に良いです。上はちょっとガレになっていて、尖った頂上みたいな格好です。

（後記：辻岳は根占町に所在）。

平田 鹿児島市にも辻ヶ岡という団地がありますね。

小山田 坂元に行く方にある。

平田 あれも山の上ですよ。それで「辻」は整理する必要があるなど感じました。「越」を皆峠に結び付けられましたが、峠はやはり近世以降に付いた名前です。金山峠とか中川峠。だから要注意。それより古いのは、タオ。タオが古い道とつながるのじゃないかと思えます。

鹿児島県の道は、此処から西に向かう出水筋もそうですが、水上坂を登ってシラス台地の上を歩いて行きます。台地の上・山の上・尾根を通るということは敵が見えるわけです。安全な山の上を歩いて行くのが昔の道だったということです。それで、すべてが峠に結び付くのではなくて、山の上の道路を行った。それをまず考えるべきじゃないでしょうか。そうすると、「越」も道につながるし岡・尾もそうなるわけです。そっちの方を優先的に解釈した方が良いのじゃないでしょうか。私はそんなことを感じました。

夏は川を渡るのも気持ちがいいのですが、冬はたまらんですからね。古い道はなるべく水のある所は通らないように尾根伝いに行っています。伊集院に出る道筋、水上坂なんかは良い例ですね。

それと沢筋を登って行けば間違いがないようにすけれども、あれはあっちこっちから小さな支流が入って来ますから反って間違い易いのです。沢伝いの道が発展するのは新しいのじゃないかと思うのです。但しこれは思い付きです。

青柳 国道3号線は甲突川沿いに通って行きますが、沢伝いということからどうも新しいですね。江戸時代に入ってからのものでしょうね。

平田 まあそれは言えますね。大隅国・薩摩国の道というのは麓と麓を皆つないでいます。麓と麓をつなぐ道は沢伝いのものが多く、いわゆる分水嶺を越えて向こうの沢に降りてつながっている。それを上げたのが近代の道になるのじゃないかな。

それで、水上坂の道は3号線よりも古いことは事実だけでも、それよりも古い道はむしろ先程話題になった春山を通して伊集院に出る道。これが古いのじゃないかと思うのだけでも。その辺はもう一回洗い直す必要があるなと思います。要するに安全に渡れる道というのが一番大事でしょうからね。戦乱時代と平穏な時代との通路というのは違って来るのじゃないですか。それにしても峠の地名は面白い地名です。

青柳 ちょっと言っておかないといけないと思うのだけど、辻で鬼火焚きが行われる所、あれはどこだったのですかね。

小川 2枚目のプリントに書いてあります。どこでも鬼火焚きのことは聞きます。

青柳 通じ(ツジ?)ということから昔の烽火(とぶひ・ほうか)。緊急連絡に烽火で連絡しますよね。ノロシ(狼煙)というか、昼は煙を焚いて、夜は火で。それがあった所には、つむじ神社というのがあるというのを何かで読んだことがあります。つむじ風のつむじです。出雲風土記につむじ神社というのが神名帳にあって、つむじ神社がある場所には大体烽火というのが置かれている。そういう研究があります。

平田 そこには「辻」という地名が付いているの？

青柳 いや、つむじ神社というのは今でもあります。例えば、その山の上には烽火があった。と。その山の神社の名前は、つむじ神社。『風土記の考古学』という本に池田さんという人だったかな、その人が研究しているのです。隠岐島と出雲国を結ぶ烽火の跡もつむじ神社の有無で調べて行く。そういうことをされているのです。

鹿児島の場合も当然烽火を考えて行ったら、新しい視点が開けて来る。例えば、甕島と薩摩国との連絡。遣唐使の往来の関係ですけど、そういう船が来た時に連絡することが言われているわけでしょう。その時の連絡網として薩摩半島の海岸線沿いに烽火があるとか、そういうことは考えられませんか。

平田 あるでしょうね。  
青柳 だから、辻についてもその辺もあるのじゃないかと思えます。

平田 はい、判りました。  
築地 谷山に辻之堂という地名があるのですが、それもやはり辻堂があったからですか。

平田 辻堂というのは集落はずれの辻に堂があって、諸国を廻って来る坊さんが自由に泊まれるお堂があったのです。それを辻堂と言います。別名、旦過(たんが)。これは小川さんのお父さんから教わったのですけども(板書)。旦(朝)早く通り過ぎて行くから旦過だ、と。出水に旦花(たんが)という所があります。出水の駅前にあります。

川野 生徒の名字にそういうのがあります。  
平田 旦花という名字があるよね。  
米原 疫払いの時の豆撒きとか、金撒きというのは、大体辻です。辻というのは

そう言ったものを初めいろんなことをする

平田 悪魔を払う。

米原 そうですね。ということは、いろんな人が、いろんな所から、そう言った辻に来る。そういう所だと私は思っています。だから、そう言った行者が来るのも辻になる。

平田 民俗的なことを考えるのも必要でしょうが、一番のポイントはやっぱり道路だろうと思うのです。交通路として重要。交通路の手がかりになるのは近世では橋・渡し場。これを通らない道路はないわけですから、県内の石橋の分布や渡しを抑えることによって昔の道路が確認出来る。山を越える時には必ず峠を通るわけですから、峠の地名を辿る方法もあります。安全を祈るためには手向の場所もあるでしょうし、鹿児島の場合は柴立があつたり花立があつたりするわけです。時代が下って来ると、日枝神社があります。鹿児島県の日枝神社というのは必ず道路のそばにあります。これは道祖神である猿田彦と結び付くのかなとも思います。そういう橋・渡し・峠などの交通路と関係したことから見るのが一つ。それから、その道路で、辻とか峠でどういう民俗的な行事が行われたか、そこにはどう言った伝説があるか、との視点に展開して行けばよろしいのじゃないでしょうか。

坂本 それに付随してちょっと考えるのだけでも、また鹿児島だけか判らんけれども、十文字の道路というのはあんまりなかったのじゃないかと思うのです。全部三叉路じゃないかなと思って見ているのです。谷山の場合、あっちこちに鬼火焚きを

する場所があつたけれども、十文字の所で鬼火焚きをしたような気はせんし、全部三叉路のような所ばっかしを使っていたような気がするもんだから。

平田 ああ、そうですか。

坂本 辻堂もそうなんです。谷山にはあっちこちに辻之堂という場所があるけど、十文字になっていないような気がします。それも関係があるのかなあるのかなと思って、ちょっと気になったもんだから。

平田 三叉路も辻と言ったのでしょうか。

坂本 十文字という辻はないようですね。現在は十文字になっていますけどね。

米原 三文字という地名は？

平田 三文字は多いね。

小山田 三文字は多いです。

米原 地名としてだいぶ残っていますね。

平田 はい。時間が来たようです。終わりにしましょう。次はどなたか。坂本さんあたりはどうですか。米原さん、次ぎはやってみませんか、9月ぐらいに。なければ、6月は私が臨濟宗寺院の分布について話しましょう。今日はこれで。有り難うございました。

## 峠の地名

とうげ (峠) を意味する地名に、どういふものがあるか考えてみたい。

1. 峠には妖怪がでる  
・ 人來峠  
・ 登尾 (のぼお) 峠

2. 峠は「国字」である。トウゲ (峠) とは、

- (1) 大字典を引くと、つめたる処。其処より又下阪となる故に、山と上と下とを合わせて其義を示す」とある。

(2) 広辞苑には、

- (3) 万葉集 3240 に、「近江道の逢坂山に手向けして 我が越えけば」

万葉集 567 に「周防にある磐国山を越えむ日は 手向よくせよ荒らしその道」

万葉集 400 手向けには、

「瀨波山

手向けの神は、幣奉り 我が乞ひ袴まく」とある。

手向けの神は、多牟氣・多武氣・手向・手祭・供養などの字を用いている。

- (4) 三代実録、元慶二年 (878年) の条に、「授越 中国正六位上手向神従五位下」とある。

(5) 倭名鈔

「道神 太無介之加美」

(6) 大言海

「たうげ (峠)

手向ノ音便

縁ノ延カ

① 坂路ノ登リツメタル処

② 上リ下リノ山ノ境  
路行ク人ノ国津神、道神ニ手向スル所」

(7) 国語大辞典

「峠とうげ

たむげ (手向) の変化。通行者がここで道祖神に手向をしてまつり、旅路の平

安を祈ったところからいう」

タムケは、旅行中、山道を登りつめた地点で、守護神が変わると考えられ、その地点を

さす地名と思われる。

・ 中山太郎氏は、手向神は即道祖神であるという (日本民俗学辞典)。

・ 日本民俗語大辞典 (石上 堅氏)

とうげ (峠)・・・岡越えの路の頂上の途中をいう。その頂上によく狐神、道祖神 (塞の神) が祀られている。丘陵の嶺通りの道路で、横断する地点を村の境目としていたために、標と峠が一つになつてしまった。

3. 峠の語源に二つある。

- (1) タムケ (手向け) → トウゲ (峠) か。

(2) タウ・タラ・トウ (撓む = おされてまがる・しなう・ゆがむ) の転訛。タラゴエのつ

まったもの。

万葉集 3278 に「高山の 峰のたをりに 射目立てて 鹿猪待つがごと 床敷きて わが待つ君を

犬な吠えそね」

\* 萬葉辞典・・・たをり = 峯の折曲がり。山の稜線の低く撓んだやうな所。鞍部。

4. 辻 (つじ)

(1) 字通 国字。交差路をいう。

辻は神靈の行き通うところとされ道祖を祭り、辻占などのことも行われた。

(2)大言海 つむじ。路ノ縦横二通ジタル処。

(3)古語大辞典 つじ(施毛。辻)  
物の合わせ目。頂上。頂点。

(4)日葡辞書 ツジ・ミチツジ(辻または道辻) 道の交差点  
頭のつじ 頭のてっぺん(つむじ)

ツジカゼ(辻風・旋風) つむじ風

(5)広辞苑 辻堂 路傍に建ててある仏堂

(6)万葉集 2506  
「言靈のはたらく四通八達の辻で夕占をして問うと、占いにまさしくあらわれた。  
(言靈のはたらく四通八達の辻で夕占をして問うと、占いにまさしくあらわれた。  
あの子は私に寄るであらうと)」

(7)辻の事例

①辻では、鬼火焚きが行われる。  
オネツコ(鬼火焚き)は、今は田んぼで行われているが、40年程前までは辻で行っていた。

辻の中 中央に十に穴を掘って、竹やタキキなどでヤグラを組んだ。  
②大根占町池田、旗山神社前の辻に、辻の堂があった。この辻の堂はカドモリサマ(門守様)といって池田の守り神であった。

③山の頂上を辻と言う。  
山川町大山に、辻之岳がある。地元ではウヤマダケ(大山岳)・ツジダケ(辻岳)などと言う。

④上飯村と里村の境の峠をツツンドウ(辻堂)と言う。  
⑧辻には3つの意味がある。

①交差点  
②てっぺんを指す→頭のつむじ・山の頂上  
③峠

## 5. 越

(1)大字典 越 コユ・コス

・渡りこめること  
・コシと訓じ、物を越して物するにいふ語。「垣根越に」

(2)日葡辞書 コエ(越え)

物の上を通り過ぎる。たとえば、山などの上を越えて通る。

(3)事例

①颯娃町矢越  
②大浦町越路

## 6. 尾

(1)漢和大字典

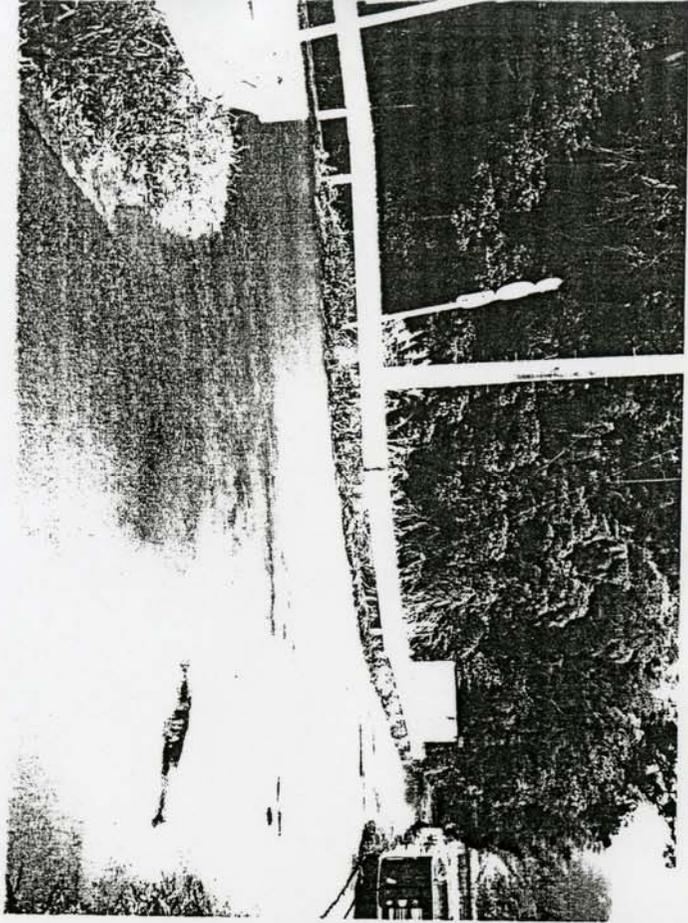
・動物のしっぽ  
・細長い物の末端

(2)大言海 尾

・シリヲ、シツポ  
・山ノ裾ノ引延ヘタル処  
を(尾)  
・山ノ高キ処

(3)事例

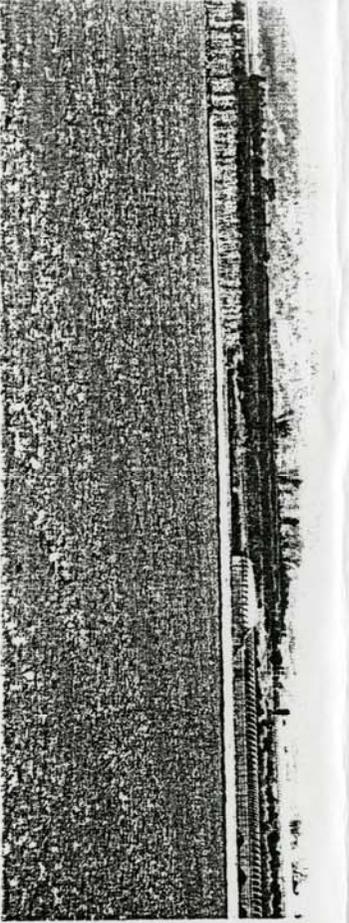
①横尾峠(知覧町)  
②登尾峠(知覧町)  
③高尾(大崎町)  
④峯尾峠(川辺町)



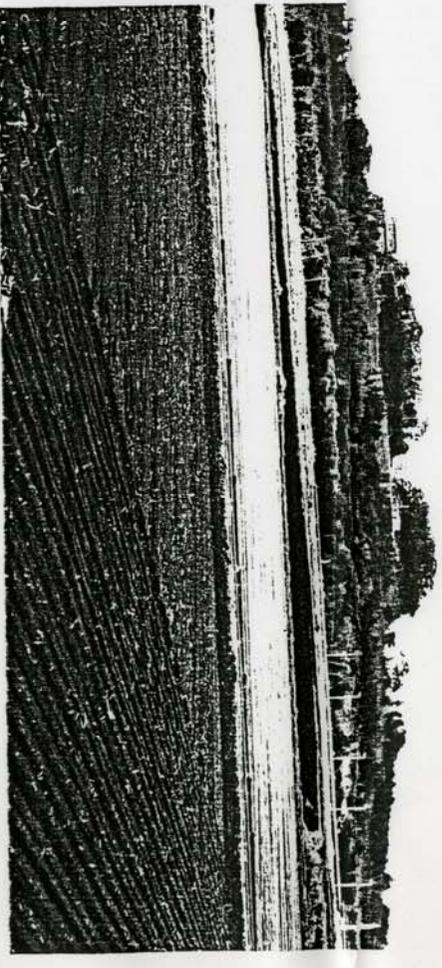
① 鹿嶋市中山



② 大根占町池田



③ 过之岳 (山川町)



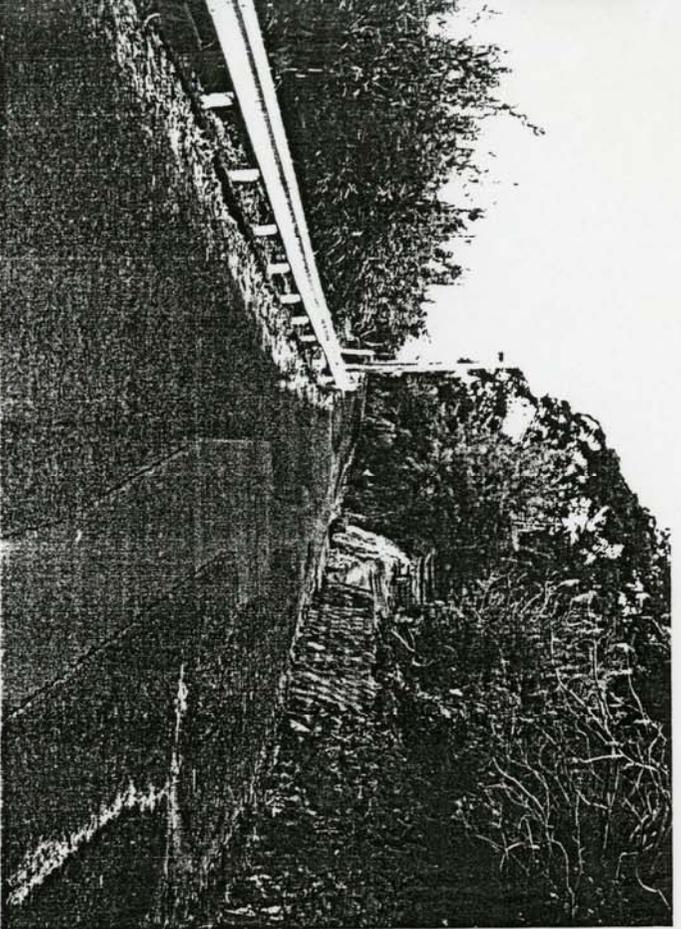
④ 过風洞 (穎娃町)



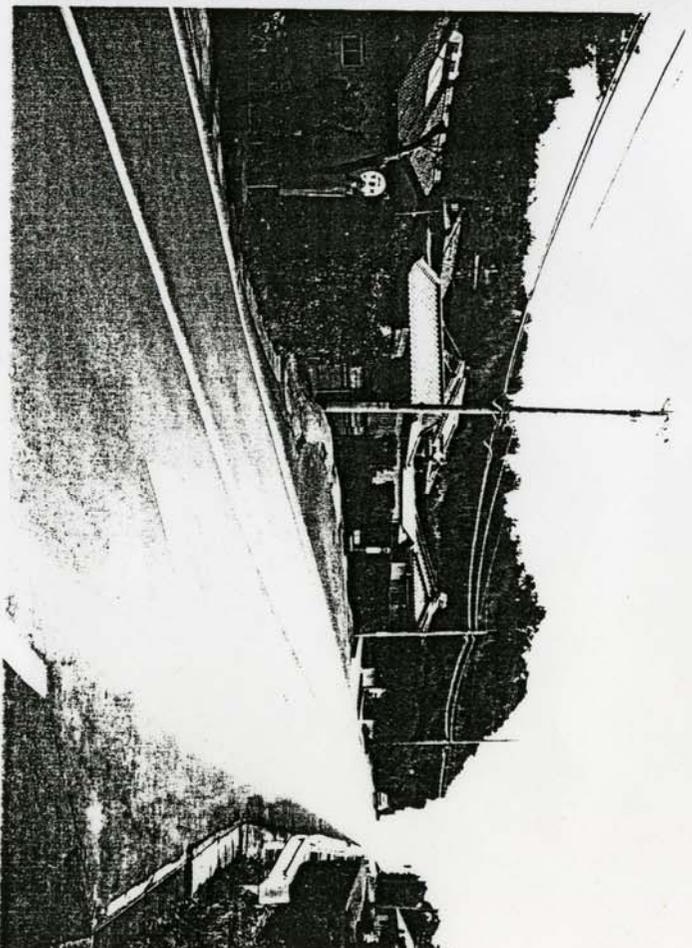
⑤ ツツジ堂 (过堂) (上敷村)



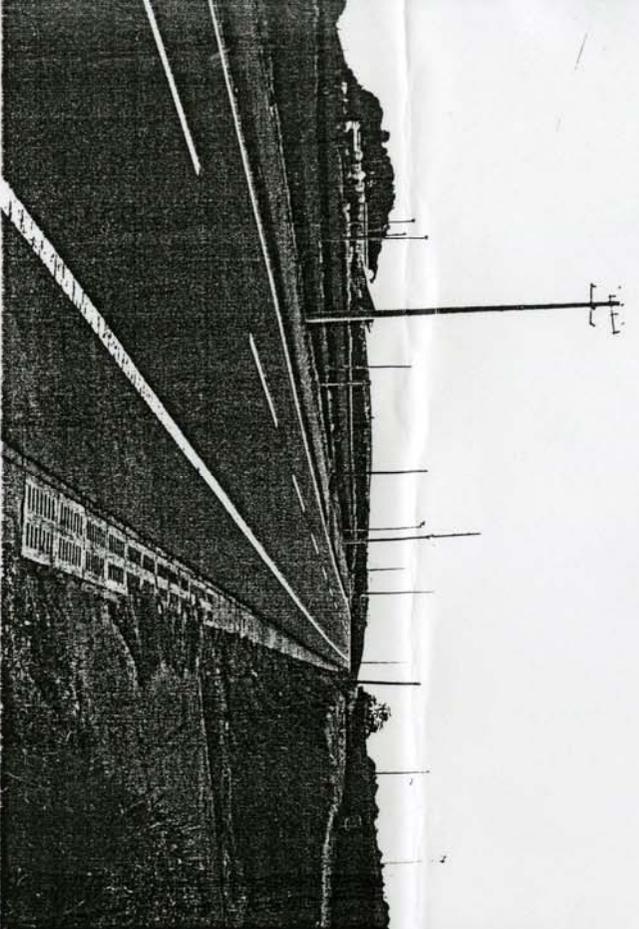
⑥ 葉師堂 (上敷村)



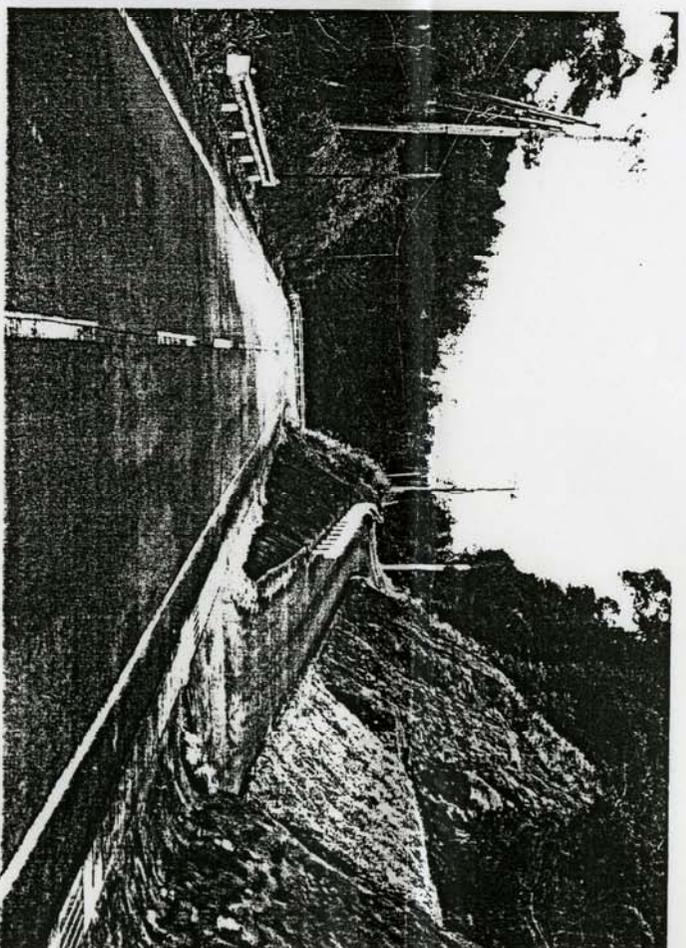
⑦ 大浦町越路



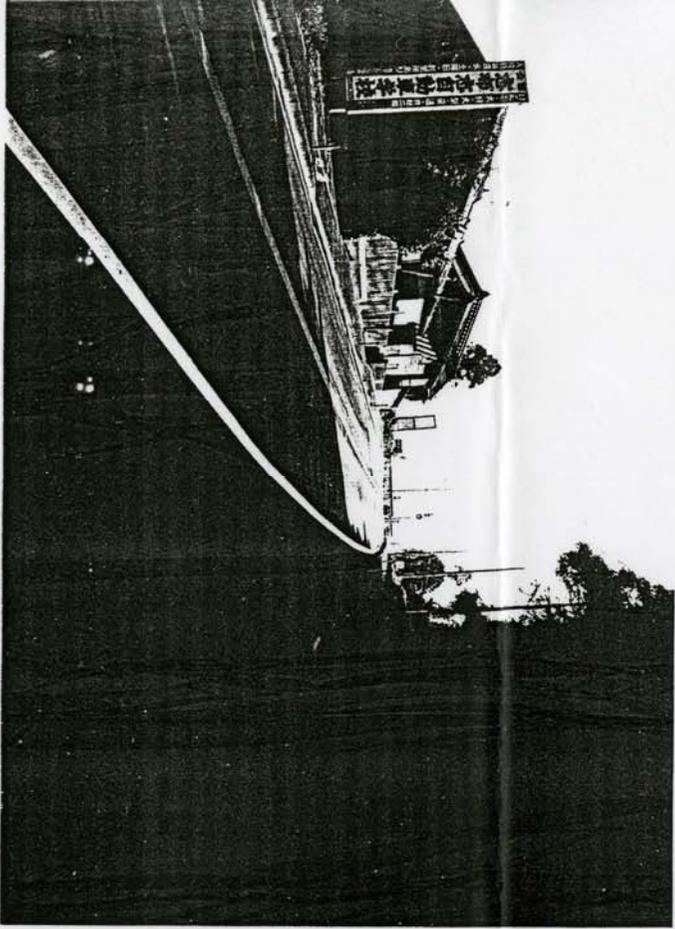
⑧ 穎娃町矢越



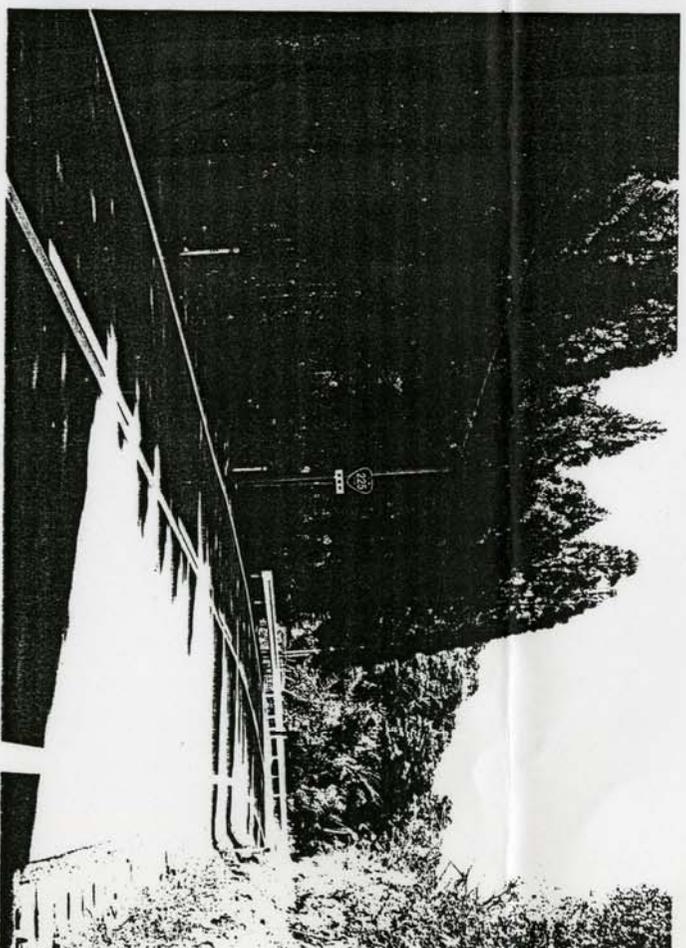
⑨ 横尾峠 (知覧町)



⑩ 登尾峠 (知覧町)



⑪ 高尾 (大崎町)



⑫ 峯尾峠 (川辺町)